中村古峡主幹

變態心理

大正六年十一月六日第三種郵便物認可
大正十二年六月二十五日印刷納本 同十二年七月一日發行（毎月一回）

第十二巻
第一號

七月號

東京 日本精神醫學會 發行

變態心理第十二卷第一號目次

變態心理

第六十九號

（第十二卷 第一號）

盆踊の夜

「盆々盆も今日明日ばかり、明後日は山のしほれ草、しほれた草を櫓に乘せて、下から見れば牡丹花、上から見れば情の花、牡丹の花は咲いても散るが、情の花なら今ばかり」

樂しき盆踊の夜に、初めて戀を知つた十六の娘があつた。然し彼女の戀は遂げられなかつた。年が變ると共に、思はぬ家に嫁がればならなかつた。さうして嫁いだ後、始めて可愛い男の胤を宿してゐたことを知り、病氣と稱して里へ戻つて來た。思ふ相手の男も、知り初めた戀の甘味を忘れ兼れて、欝々と暮してゐた。さうして憂さ晴らしの釣遊びの時、ふと女が嫁いだことを聞き知り、驚いて水に落ちて死んでしまつた。その時、病み臥せる女の床に男の魂が現れたので、女は夢心地に床を抜け出し、一散に走つて同じく水に投じてしまつたといふ。（信濃の女夫石傳説）

「お盆お盆と待つのがお盆、お盆過ぎたら何待つだ」

さす手ひく手面白く騷ぐ盆踊りは、樂しい戀物語りの温床だ。自然に惠まれた日本の農家が、また人に惠まれる時だ。生活苦と道德とで縛られた日本の社會に、盆踊のやうな社交行事が存するのは、興味ある對照である。

活動の天地たる夏を思ふと共に、また開放された生活の天地たる盆踊りを思ふ。

大正十二年七月一日發行

日常生活の精神病理

ギエンナ大學教授
墺國醫學博士　シグムント・フロイト

（五）言ひ損ひ（承前）

一七、失言の根本的原因

私が神經病的徵候を解決し除去する場合に使用する精神療法に於て、私は患者の偶然的な言葉や空想から、患者がこれを隱さうと努力してゐるにも拘らず知らず識らずの間に露はれて來る患者の思想內容を發見する仕事にぶつかることがよくある。さうした場合に、言ひ損ひが最も價値ある役目を演ずることが屢々ある。私はこれを最も確かな而も最も奇妙な實例によつて示すことが出來る。

例へば患者は叔母のことを言つてから、後に言ひ損ひに氣づかないでその叔母のことを『私の母』と呼んだり、夫のことを『兄』と言つたりする。かやうに患者は、患者がこれらの人々を互に『同一視して』ゐたと云ふ事實、患者がこれらの人々を同一の部門に入れて置いたと云ふ事實、そしてその部門は患者の情緒的生活に取つては同じ種類の思ひ出を意味してゐると云ふ事實！——さう云ふ事實に私の注意を惹くのである。或は、廿歲の若者が私の診察時間に次のやうに言つて自分を紹介する。『私は先生が治療して下すつたN・Nの父です——いや、弟です。なに、N・Nは私より四つ年上なんです。』私は此の言ひ損ひから、彼が自分も矢張り兄のやうに父の缺點のために病氣である、自分も兄のやうに

るのだと云ふことを了解する。また時には、いつもと違つた言葉の排列や、無理に拵へた言葉遣ひだけで、別な動機を持つた抑壓された思想が患者の言葉に干與してゐると云ふことが十分暴露されるやうなことがある。

其故、粗雜な言語障碍に於ても、より精緻な言語障碍――精緻であるとは言へ矢張り『失言』として包攝さるべきもの――に於ても、私は失言の根元を決定し、また新しく形づくられた言ひ損ひを説明するにも事足るものは、音の接觸影響ではなくして、言はうと思つた言葉以外のところにある思想であると云ふことを發見するのである。私は音をして互に變化を起させるところの法則を疑ふものではない。然し私には、それらの法則だけでは言葉の正確な發言を强制的に損ふには足らぬやうに思はれるのである。私が一層綿密に研究し吟味した例では、それらの法則は單に豫造された機構を示して居るに過ぎない。そしてその機構が更に遠い心理的動機によつて都合よく利用されただけである。然しながら後者はこれらの音の關係の勢力範圍の一部を成すものではない。『言ひ損ひに起因する代用物の大多數には、かやうな發音上の法則は全然存在してゐない。此の點に於て私はヴントの説に充分贊同するものである。ヴントも矢張り、失言の根柢に横たはつてゐる條件は複雜なものであつて、音の接觸影響より遙かに根本的なものであると假定してゐる。

假令私が『これらの一層遠い心理的影響』――ヴントの言葉による――を確實なものとして受け容れても、私は或る程度の注意の轉向を伴つた早口に言はれた言葉に於ては、失言の原因を容易にメリンガーとマイヤーの定則に限ることが出來ると云ふことも亦、これを承認するに吝ならぬものであ

る。然しながら此の二人の著者によつて集録された實例の若干に於ては、更に複雜な解決法を要すること極めて明白である。

或る種の失言に於ては、吾々は猥褻な言葉や意味に對する襲撃の結果が妨害的要素を成してゐることを假定して差閊へない。故意に語や句の形を惡くしたりもぢつたりするのは、野卑な人間がよくやることであるが、その目的は猥褻な事を想起させるものとして、害のない動機を使用することに外ならない。而して此の戲れは極めて頻々たるものがあるのである。從つて若しそれが不知不識の間に意志に逆つて現れて來たからと言つて、少しも珍らしいことではないと言はなければならない。

私は讀者が何等の證據もないこれらの解釋の價値と、私がみづから蒐集して分析法によつて說明したこれらの實例の價値とを輕視せざるべきを信ずるものである。けれども若し私が依然として、明白に單純な失言の場合でも、矢張りその原因は言はうと思つた文脈以外のところにある半ば抑壓された觀念が起因となつて生じた障碍に歸するであらうと云ふ期待を、秘かに心に懷いてゐるとすれば、それはメリンガーの注目すべき觀察が私の心を唆つてさうさせるからである。此の著者は、何人も自分が言ひ損ひをしたことを認めようと欲しないのは注目すべきことである、聰明な正直な人でも、若し吾々があなたは言ひ損ひをしたと言ふと機嫌を惡くする者が澤山ゐると主張してゐる。私はメリンガーの如く『何人も』などゝ云ふ言葉を使つて此の主張を一般的なものにするやうな危險を敢て冒さうとは思はない。けれども言ひ損ひの表明にこびりついてゐる情緒的痕跡――それは明かに一種の羞恥心である――にはその意味があるのである。それは忘却した名前を想ひ起すことが出來ぬ場合に顯はれる怒り、及び明白に無關係な記憶が馬鹿にはつきりしてゐる時に感ずる驚きと同じ部類に入るべき

ものである。そしてそれはいつもきまつて、障碍の形成に或る動機が干與してゐることを示すものである。

一八、固有名詞の毀損

固有名詞をもぢつて發音するのは、それが故意に爲された場合には侮辱になるものであつて、それが故意の失言でないやうに見える場合の凡てに於ても同一の意味を持つことが出來るであらう。マイヤーの報告によると、或る時その少し前に『ブロイアー』と云ふ名前を發音したために『フロイド』と言ふべきところを『フロイダー』と言ひ、また或る時『フロイドとブロイアー』の方法と言ふべきところを『フロイアーとブロイド』の方法と言つてその方法のことを語つた人は、確かに此の方法に對して特別な熱心を持つてゐなかつたのである。後に書き損ひの條下に於て、私は確かにこれ以外の説明を許さない固有名詞毀損の例を一つ報告しようと思ふ。(一)

(一)　特に貴族連は自分が診察を受けてゐる醫師の名前をもぢつて發音することが極めて多いものであると言つて差閊へない。吾吾はその事から貴族連は表面はいつも鄭重な態度を以て醫師を迎へるが、その實心の中では之を輕蔑してゐるのだと云ふ結論を下して差閊へないのである。私は此處にトロントのイー・ジォーンス教授の著書『精神分析論』の第三章四十九頁から、固有名詞忘却に關する卓越した觀察を少し引用することにしよう。

『自分の名前が人から忘却されたことを發見した時に、烈しい憤恚の感情を避け得る人は少ないものである。どうか自分の名前を覺えてゐて貰ひたいと云ふ希望、または屹度覺えてゐて呉れるだらうと云ふ期待をかけてゐた人から忘却された場合には、特にさうである。自分の名前を忘却された者は、若し自分がその人の心にもつと大きい印象を與へたなら、名前は人格の完成上必要な部分であるから、その人は屹度自分をまた記憶して呉れるだらうと云ふことを、本能的に認めるものである。それと同じやうに、大抵の人に取つては、殆んどそれを豫想することの出來なかつた場合に自分が大人物から名前で呼びかけられたのを發見すること

位嬉しいことは少ないものである。ナポレオンは大抵の指導者と同じやうに此の術の達人であつた。一八一四年のフランスの不幸な戰役の眞最中に、ナポレオンは此の方面に於ける彼の記憶の驚くべき證據を與へた。クラオンヌの近くの町にゐた時に、彼は市長のド・ビューシーに二十年餘り前にラ・フェール聯隊で會つたことがあるのを想ひ出した。狂喜したド・ビュー シーは直ぐ樣異常な熱誠を以てナポレオンの旗下に身を投じた。此の反對に、人を侮辱するのに、その人の名前を忘れたやうなふりをすること位確かな方法はない。此の方法によつて、その人は吾々の眼から見ると極めてつまらぬ人間であるから、吾々はその人の名前を覺えるために頭を惱ますことは出來ない、と云ふ諷刺が傳へられるのである。此の手段は文學上で屢々利用される。ツルゲーネフの『煙』の中には次のやうな章句がある。卽ち『だから貴方は今でもバーデンは面白い所だと思つてゐらつしやるんです――リトヴィノフさん。』ラトミロフはいつもリトヴィノフの名字を躊躇しながら言つた。いつでも、ちやうどそれを忘れてしまつて、直ぐには想ひ出せないと云ふ風だつた。これとそれからリトヴィノフに挨拶する時に帽子を高い所で振ることによつて、彼はリトヴィノフの自負心を辱しめようと思つたのである。』同じ著者は『父と子』の中で次のやうに書いてゐる。卽ち『知事はキルサノフとバザロフを自分の舞踏會に招待した。それから五六分とは經たぬうちに、二人を兄弟と見做してキサロフと呼びながら、また二人を招待した。』此處では、知事が前に二人に話しかけたのを忘却したことと、名前を間違へたことと、二人の青年を區別することが出來なかつたこととが、輕視の極點を構成してゐるのである。名前の變造はそれを忘却することと同じ意味を有するものである。それは完全な記憶喪失に向ふ一步に外ならない。』

一九、大望複合體と言ひ損ひ

これらの場合に於ける妨害的要素としては、批評の混淆がある。その批評は、その時話し手の意思に一致しないために、省略されなければならぬところの批評なのである。

或はその正反對のこともある。卽ち代用された名前、または奇妙な名前の採用が、その名前に對する尊重を意味するのである。言ひ損ひのために生じた同一視が、或る認知――暫くの間背景の中に留つてゐなければならない或る認知に等しいのである。フェレンツィ博士が學生時代に遭遇した此の種の經驗を語つてゐる。

『私はカレッヂの一年の時、全級の學生の前で詩の暗誦をしなければならなかつた。此の種の經驗はそれが生れて初めてだつた。然し私は充分豫習して置いた。暗誦を始めるや否や、私はどつと云ふ笑ひ聲に妨げられて狼狽した。後で敎授が私に此の奇妙な暗誦を説明して呉れた。私は先づ詩の題の『遠方より（From the Distance）』を言つた。それは正しかつた。ところが、その詩の本當の作者の名前を言ふべきところを、私自身の名前を言つてしまつた。詩人の姓名は Alexander Petöfi と云ふのであつた。その名の Alexander が私自身の名と同じだつたために名前の交換が生じたのである。然しその眞の理由は、確かに私がその時自分をその有名な流行詩人と同一視したと云ふ事實にあるのである。私は意識的にさへ彼に對して崇拜に近い愛と尊敬とを抱いてゐたのである。全大望複合體が此の間違つた行爲の下に隱れてゐるのである。』

或る若い醫師に關するこれと同じやうな同一視が私に報告された。その醫師は、『私はドクトル・ウィルヒョーです』と言つて、おど〳〵した恭謙な態度を以て有名なウィルヒョーに自己を紹介した。驚いた敎授は彼の方を向いて、『貴方のお名前もウィルヒョーといふのですか』と訊いた。その大望を抱いた青年がどう云ふ風にしてその言ひ損ひを辯明したか、言ひ換へると、彼は此の大人物に接すると自分と云ふものが餘りにつまらぬ人間であるやうに思はれたので、自分自身の名前が記憶から脫け出してしまつたのだと云ふ面白い言譯を考へついたかどうか、それとも彼は、自分も他日ウィルヒョーのやうな偉人になりたいものである、だからウィルヒョー敎授から餘り見下げたやうな態度を以て遇されたくないものである、と云ふ希望を彼が抱いてゐたことを承認する勇氣があつたかどうか、それは私のあづかり知らぬところである。此の二つの思想の中の一方かまたは兩方が、此の青年を自己紹介中

に度を失ふやうな精神狀態に投じたものであらう。

非常に個人的な動機のために、私はこれと同じやうな解釋が次に引用する例に於ても適用され得るかどうかと云ふことを未解決の儘にして置かなければならぬ。一九〇七年にアムステルダムで開催された萬國會議の席上で、私のヒステリー說が喧々囂々たる論議の的になつた。最も烈しい私の反對者の一人が、私の說に對して痛烈な辯駁を加へながら、何度も言ひ損ひをした。その言ひ損ひのし方は彼自身が私の代りになつて、私の名前で話すと云ふ風であつた。例へば彼は、『ブロイアーとフロイド』と言はうと思つた時に、『御承知の通り、ブロイアーと私は證明しました』などと言つた。此の反對者の名前は、私自身の名前と音の類似してゐるところは少しもないのである。此の例と、それから失言に於ける名前の交換の他の例からして、吾々は次のやうな事實を思ひ出すのである。卽ち、それは失言は類似した音によつてそれに與へられた便宜を十分放棄することが出來、また內容の中で隱蔽された關係によつて支持されさへすればその目的を達することが出來ると云ふ事實である。

二〇、言ひ損ひと自己暴露

他の更に意義のある例に於ては、自己批評卽ち自分自身の言葉に對する內心の反駁が失言の原因になり、更に一步を進めては言はうと思つた言葉に對して反對の代用語を押しつけてゐる。吾々はかやうな場合には、或る主張の發言が如何にその主張の目的を轉ずるものであるか、また言ひ損ひが如何に內心の不正直を暴露させるものであるかを觀察して、驚きの念に打たれるのである。此の場合には失言が往々その當人が言ひたくないと思つてゐる事柄の表白に酷似した表白になるものである。かや

うにして失言は自己の秘密を漏洩する手段となるのである。

ブリルは次のやうに語つてゐる。『私は最近多數のパラノイド的傾向を示した或る婦人から診察を乞はれた。ところでその婦人には私と協力することの出來る親戚が一人もなかつたので、私は志願患者として州立病院へ入院することを彼女に勸めた。彼女はすつかりさうする氣になつた。ところがその次の日に、彼女は彼女と一緒に或るアパートメントを借りてゐる友人達が、彼等の計畫が妨害されるだらうと云ふ理由で彼女の入院に反對した云々と私に言つた。私は我慢がし切れなくなつて『あなたの精神狀態に就いて何も知らぬお友達の言ふことなど聽いたつて何の役にも立ちません。あなたは御自分の事を始末する能力がちつともないのですから』と言つた。實は私は「能力が充分ある」と言ふ積りだつたのである。此處では失言が私の僞らざる意見を表白したのである。

ブリルの報告した次の實例で分る通り、偶然の機會から言語材料が原因になつて、壓倒的な秘密漏洩または滑稽な結果を來すに役立つやうな失言の實例が生ずることが、屢々あるものである。『金持の癖に餘り氣前のよくない主人が或る晩舞踏會に友人連を招待した。午後十一時三十分頃までは萬事調子よく行つた。その時分になつて、舞踏が一先づ中止された。皆は多分夜食を食べるためだらうと思つた。ところが豈圖らんや夜食などは出なかつたので、客は大抵非常な失望を感じた。夜食の代りに彼等は薄いサンドウィッチとラムネを饗された。その日は選擧日に近かつたので、會話は各種の候補者のことに集中した。そして議論が段々熱して來た時に、進步黨の候補者の熱心な嘆美者である一人の客が、主人に向つてかう言つた。「あなたはテッディーに就いて何とでも好きな事を言つてい、然し此處に一つ、彼は常に信賴することの出來る人間だと云ふ特徵があります。彼は常にあな

たに本式の食事(square meal)を與へます。」實は彼は正當な取引(square deal)と言ふ積りだつたのである。集つてゐた客人達は、どつとばかりに笑ひ出した。そこでお互にその意味を悟つた話し手と主人は、非常な當惑に陷つた。』

『治療の財政的重荷のために取分け壓せられてゐた或る婦人に處方箋を書いてやつてゐた時に、私は彼女が不意に「どうか大きな勘定書(big bills)を下さいますな、私には飲めませんから」と言ふのを聞いて興味を感じた。勿論彼女は丸藥(pills)と言ふ積りだつたのである。

次の實例は、言ひ損ひによつて自己の秘密を漏洩する稍眞面目な場合を例證するものである。二三の補助的細目を加へれば、次の轉載は全部エイ・エイ・ブリル博士によつて最初に刊行されたもの(一)と同じになる。

(1) Zentralb. f. Psychoanalyse, ii., Jahrg. I. それからまたブリルの Psychoanalysis: Its Theories and Practical Application, p. 202. Saunders, Philadelphia and London を比較せよ。

『或る晩フリンク博士と散歩してゐた時、吾々は偶然同業者のドクトルPに會つた。私は何年も彼に會つたことがなかつたし、また彼の私生涯に就いては何も知らなかつた。だから吾々が再會を非常に悦んだことは勿論である。そして私の招待に應じて彼は吾々と一緒にカフェへ行つた。其處で吾々は愉快に話し合ひながら二時間ばかり過した。私が彼に結婚したかどうかと訊いたところが、彼はまだ結婚しないと答へて、「僕のやうな男がどうして結婚などしませう」と附け加へた。

『カフェを出た時、彼は不意に私の方を向いて次のやうに言つた。「かう云ふ場合に君ならどうするか聞かして貰ひたいものですね。僕は離婚の訴訟で共同被告を指名された看護婦を知つてゐるんです。

細君が夫に對して離婚の訴訟を起して、その看護婦を共同被告に指名したんです。そして彼は離婚の判決を受けたんです。」私は彼の言葉を遮つて、「君は彼女が離婚の判決を受けたと云ふ積りなんぢやないですか」と言つた。彼は直ぐ樣前の言葉を訂正して、「さうです、彼女が離婚の判決を受けたんです」と言つた。そして更に言葉を續けて、訴訟騷ぎが此の看護婦の心に非常な激動を與へたものだから、彼女は到頭神經過敏になつて飲酒に耽つたと云ふ次第を語つた。彼は私にその看護婦を治療する方法を知らして貰ひたいと言つた。

『私は彼の言ひ損ひを訂正するや否や、直ちに彼にその言ひ損ひを説明して呉れと言つた。然し大方の人の例に漏れず、彼は私の質問に驚いた。彼は人には言ひ損ひをする權利がないものであるかどうか知りたいと言つた。私は彼に、言ひ損ひにはすべて理由があるものである、若し彼がまだ結婚してゐないと私に語らなかつたなら、彼が件の離婚訴訟の主人公だつたのだと言ふであらう、その言ひ損ひは、彼が離婚手當を支拂ふ義務を免れ且ニウ・ヨーク州で再婚することを許されるために、細君の代りに自分で離婚の判決を受けたかつたと思つてゐると云ふことを示したものである、と云ふ説明をしてやつた。

『彼は私の解釋をきつぱり否定した。けれども彼が哄笑に紛らした感情の激動は、私の疑を強めるばかりであつた。私が君は「學問のために」本當の事を言はなければいけないと訴へたところが、彼は「若し君が僕に嘘を言はせたいんなら兎も角も、さうでなかつたら君は僕が決して結婚しなかつたと云ふことを信じて呉れなければなりません。從つて君の精神分析的解釋は全部間違つてゐるのです」と言つた。けれども彼は、こんな些細な事に注意を拂ふ人と一緒にゐるのは危險だと附け加へた。そ

れから彼は不意にほかの約束を思ひ出して吾々に別れを告げた。『フリンク博士も私も、彼の失言に對する私の解釋が正しいと云ふことを確信した。そこで私は更に調査の歩を進めてそれを確證するかまたはそれに對する反證を擧げようと決心した。翌日私はドクトルPの隣人で彼の古くからの友人である人を見つけた。その人は解釋をあらゆる點に亙つて確證して呉れた。ドクトルPの細君に對して二三週間前離婚が許可されたのであつた。そして或る看護婦が共同被告に指名されたのであつた。その後二三週間經つて私はドクトルPに會つた。すると彼は私に自分はフロイド學派の機構を一から十まで確信すると語つた。』

オットー・ランクの報告にかゝる次の例に於ても、自己暴露がちやうど前の例と同じやうに明瞭に現れてゐる。

凡ての愛國的感情に缺けてゐて、子供を敎育するにもこんな餘計な感情に全然かゝはらないやうに敎育したいものだと思つてゐた或る父親が、息子達が愛國的示威運動に加はることを非難し、彼等が叔父の同じやうな行動を參考にすることを擯斥して、『お前達は何もあの人の眞似をすることはないよ。だつて、あの人は馬鹿（idiot）ぢやあないか』と言つた。父の言葉の調子がいつもと違つてゐるので子供達が吃驚したやうな顏付をしたものだから、彼は自分が言ひ損ひをしたと云ふ事實に氣がついた。そこで彼は辯解して『勿論私は愛國者（patriot）と言ふ積りだつたのだ』と言つた。

かやうな言ひ損ひが眞面目な論爭を行つてゐる時に起つて、論爭者の一人が言はうと思つた意味をあべこべにしてしまふと、彼はそれがために直ちに論敵に對して不利な地位——論敵が殆んど必らずこれを利用するところの不利な地位に陷るものである。

此のことは、人々は私の概念の説を承認することを悦ばず、また間違つた行爲に對する寛容に結びつけられてゐる便宜を棄てることを喜ばないにも拘らず、矢張り言ひ損ひやその他の間違つた行爲を本書の中で示した方法と同じやうな方法を以て解釋してゐると云ふことを、明瞭に示すものである。かやうな言ひ損ひによつて決定的な瞬間に必然的に喚起される陽氣な笑と嘲笑とは、かやうな言ひ損ひは失言であつて、心理學的には何の意味もないものであると云ふ一般に承認されてゐる習俗的な考に明確に反するものである。ドイツ帝國辯護の言葉が言ひ損ひのために反對の意味になつてしまつた時（一九〇七年、十一月）、單に失言に過ぎないと云ふ抗議を提出してその場を切り拔けようと努力したのは、實にドイツ宰相プリンス・ビュロウであつた。

『現在卽ちウィルヘルム二世皇帝の新時代に關しては、私は私が一年前に述べましたところを反覆し得るに過ぎません。卽ち吾が帝國の周圍の一團の責任を有する忠告者のことに就いて兎やかう言ふのは不正であり不當であらうと（大聲で「無責任だな！」と叫ぶ者あり）――無責任な忠告者のことに就いて兎やかう言ふのはでした。失言を恕して下さい』（歡喜）

二一、劇と小說に利用された言ひ損ひ

話し手の心內の秘密を暴露することよりも寧ろ舞臺外の聽き手を啓發することを目的とした面白い失言の實例が、ワレンシュタイン（『ピッコロミニ』第一幕第五場）に發見される。そして此處で此の方法を用ひてゐる詩人が失言の機構と意圖とに精通してゐることを示してゐる。前の場では、マックス・ピッコロミニは熱情的に公爵の方の肩を持つてゐた。そして旅行中ワレンシュタインの娘に隨つて陣

營に行く時知るやうになつた平和の幸福に熱中してゐた。彼はあわてふためいて父と宮廷大使クェステンベルヒの許を去る。場面は次のやうに進行する。

Questenberg. Woe unto us! Are matters thus? Friend, should we allow him to go there with this false opinion, and not recall him at once in order to open his eyes instantly.

Octavio (rousing himself from profound meditation). He has already opened mine, and I see more than pleases me.

Questenberg. What is it, friend?

Octavio. A curse on that journey!

Questenberg. Why? What is it?

Otavio. Come! I must immediately follow the unlucky trail, must see with my own eyes——come——(Wishes to lead him away.)

Questenberg. What is the matter? Where?

Octavio (urging). To her!

Questenberg. To——?

Octavio (Correct himself). To the duke! Let us go, etc.

彼の所へ(to him)と言ふべきところを彼女の所へ(to her)と言つてしまつた此の一寸した言ひ損ひは、廷臣の方は『彼は彼に謎のやうな事を言つてゐる』と言つて不平をこぼしてゐるのに、一方父親の方は自分の息子が公爵の方の肩を持つ動機の中に他の原因があることを見て取つたと云ふ事實を、

吾々舞臺外の者に示すことを目的としてゐるのである。

詩人が言ひ損ひを用ひてゐる實例が、もう一つオットー・ランクによつてシェイクスピーアの中に發見された。私はランクの報告を Zentralblatt für Psychoanalyse の第一卷第三號から引用することにする。

『動機の非常に微妙な、そして專門的見地から見て著しく巧妙に利用されてゐる詩の中の言ひ損ひを、シェイクスピーアの『ヴェニスの商人』(第三幕第二場)の中に發見することが出來る。それはフロイドによつてワレンシュタインの中に指摘された言ひ損ひ(『日常生活の精神病理』第二版四十八頁)と同じやうに、單に詩人と云ふものが此の言ひ損ひと云ふ誤謬の機構と意味とを知つてゐたと云ふことを示して居るばかりでなく、聽き手の方でもそれを了解するものだと云ふことを豫想しても居るのである。ポーシャは父の遺言があるために、夫を選ぶのに富籤によらなければならなかつた。彼女は僥倖にも自分の嫌ひな求婚者はみんな避けることが出來た。最後にバッサニオと云ふ自分の心に適つた求婚者を得た時、彼女がバッサニオも矢張り空籤を引きはしないだらうかと思つて心配したのは寧ろ當然である。第二場では、彼女は假令彼が間違つた玉手箱を選んでも必らず彼に自分の愛を捧げると云ふことを、バッサニオに話したいものだと思ふ。けれども彼女は自分の誓言のために妨げられる。此の心的葛藤の中で、詩人は彼女に次のやうなことを言はせてゐる。それは嬉しい求婚者に對して發せられたものである。

"There is something tells me (but it is not love),

I would not lose you; and you know yourself
Hate counsels not in such a quality.
But lest you should not understand me well
(And yet a maiden hath no tongue but thought),
I would detain you here some month or two,
Before you venture for me. I could teach you
How to choose right, but then I am forsworn;
So will I never be; so may you miss me;
But if you do, you'll make me wish a sin,
That I had been forsworn. Beshrew your eyes,
They have o'erlooked me, and divided me:
One half of me is yours, the other half yours——
Mine own, I would say; but if mine, then yours——
And so all yours."

『實際は彼に隱して置かなければならぬために、彼女がこれを優しく彼に暗示したいものだと思つたその事柄、卽ち選擇の前でも彼女はすつかり彼のものであると云ふこと——彼女は彼を愛してゐると云ふことを、詩人は嘆賞すべき心理學的感受性を以て、言ひ損ひにして表面に出現させてゐる。詩人は此の技巧によつて、戀人の堪へ難い不確かさ並びに選擇の結果に關する聽き手の同じやうな緊張を巧く鎭めてゐる。』

言ひ損ひに關する吾々の概念が大詩人達によつて確證された結果、當然湧くべき價値のある興味が湧いたから、イー・ジォーンス博士の報告にかゝる第三の實例を次に引用しても差問へあるまい。(一)

(一) ジォーンス著『精神分析論』六十頁。

『吾が大小說家ヂォーヂ・メレディスは、その傑作「我儘者」に於て、言ひ損ひの機構に對する更に一層見事な理解を示してゐる。此の小說の筋は簡單に言ふと次の通りである。貴族社會の者から非常な嘆美を受けてゐるサー・ワイロビー・パッターンと云ふ貴族が、コンスタンシャ・ダーハム孃と云ふ女と婚約する。ダーハム孃はパッターンの中に烈しい利己主義を發見する。彼はその利己主義を巧みに世人の眼から隱してゐるのである。そこで彼女は結婚を避けるためにオックスフォードと云ふ大尉と駈落する。その後數年經つてパッターンはクララ・ミッドルトン孃と云ふ女と婚約する。それから「我儘者」の大部分は、矢張り彼の利己主義を發見したためにミッドルトン孃の心の中に生ずる葛藤の細かい描寫で滿たされてゐる。外部の事情と彼女の名譽觀念から、彼女は自分の約束を守つてゐる。然るに彼は彼女の眼には益々厭な男になつて來る。彼女は彼の從兄弟で秘書をしてゐるヴーノン・ホキットフォード——彼女がとどこれと結婚する男——を幾分信賴した。けれども種々樣々の動機から彼は冷淡に構へてゐる。

『クララは獨白で次のやうに言つてゐる。「あゝ、誰か高潔な紳士が本當の私を見ることが出來て、屑よく私を助けて此の茨の牢獄から連れ出して下さるといゝんだけど。私には自分の遣り方を破ることは出來ないわ。私は臆病者だもの。誰か一本指で一寸招いて吳れさへすれば私は變つてしまふわ、屹度。私は血を流して梟の鳴聲を聞きながら仲間のところへ飛んで行くことが出來るわ。……コンスタン

シャさんは軍人に會つたのね。多分あの女はお祈りをして、そのお祈りが叶つたんだわ。あの女のしたことは惡いことだけど、私はあの女があんなことをしたのでどんなにあの女が好きだか知れないわ。男の名前はハリー・オックスフォードつて云ふのだつたわね。コンスタンシャさんはぐづ／＼しなかつたわ。あの女は鎖を切つてしまつたのよ。あの女は署名してしまつたのよ。あゝ勇ましい娘さん、あなたは私のことをどうお考へになつて？ だけど私にはハリー・ホキットフォードさんがないんですもの。私はたつた獨りなんですもの。……」不圖、オックスフォードと言ふべきところを他の名前を言つてしまつたことに氣づいて彼女は、ハッと心を打たれて顔を眞赤にした。

『二人の男の名前がどちらも「フォード」で終つてゐると云ふ事實が、兩者の混同を一層容易ならしめるのは明かなことであり、また多くの人はその事實を此の混同の適當な原因と見做すであらうが、然しその根本的な眞の動機は作者によつて明白に指示されてゐる。他の章句の中に同じ失言があつて、躊躇と主格の變化がこれに伴つてゐる。これは精神分析を行ふ場合に、患者の半意識的な複合體に觸れた時によく起ることである。サー・ワイロビーはホキットフォードのことを最負してから言ふ。「虛報ですよ。不慣の事をやらうなどゝ云ふ決心は、意氣地のないヴーノンにはこれつぱちも起りつこないんです。」クララはかう答へる。「ですけど若しオックスフォードさんが――いえ、ホキットフォードさんが……湖水の上を泳いで來るあなたの白鳥、あの白鳥が怒つてゐる時は何て美しく見えるんでせう！私はあなたにかうお訊きしようとしましたのよ、屹度自分以外の者が大變崇拜されてゐるのを見た人達は當然落膽してしまふでせうつて。」サー・ワイロビーは突然心の蒙を啓かれたので固くなつてしまつた。

『更に他の章句で、クララはまた言ひ損ひをして、ヴーノン・ホキットフォードともつと親密な關係を結びたいと云ふ秘密の願望を暴露させてゐる。彼女は友達の少年に話しかけながら、かう言つてゐる。「ヴーノンさんに言つて頂戴――いえ、ホキットフォードさんに言つて頂戴」と。』

二三　結論

此處で辯護されてゐる失言の概念は、最も微細な點に亘つて容易にこれを實證することが出來る。私は最も些細なまた最も自然的な失言の場合にも充分意味があつて、一層顯著な實例と同じ解釋を施すことが出來るものであると云ふことを、繰返し證明することが出來た。私の所望に叛いて、固い個人的の動機から、ブダペストへ小旅行をしようと決心した一婦人患者が、たつた三日の旅行ですと言つて言譯をした。ところが彼女は言ひ損ひをして、たつた三週間の旅行ですと言つてしまつた。彼女は、私を困らせるために私が彼女に不適當だと認めてゐる社會で三日でなく三週間も過したいと云ふ秘密の感情を心の中に懷いてゐると云ふことを、思はず知らず漏らしてしまつたのである。

或る晩私は劇場へ妻を呼びに行かなかつた言譯をしようと思つて、『私は十時十分過ぎに劇場へ行つたんだよ』と言つた。私はその言葉を直された。『十時前とおつしやる積りだつたんでせう。』勿論私は十時前と言はうと思つたのである。十時過では確かに言譯にならない譯である。私は芝居のプログラムに『十時前閉場』と書いてあると云ふことを言はれてゐたのであつた。私が劇場に着いた時には、控室は眞暗で、劇場の中はがらんとしてゐた。言ふまでもなく芝居が早くすんで、妻は私を待つてゐなかつたのである。時計を見たら十時にはまだ五分あつた。私は家へ歸つた時の自分の立場をもつと有利

にし、十時十分前だつたと言はうと決心した。不幸にして言ひ損ひがその意圖を臺なしにして、私の不正直を暴露してしまつたのである。私はその不正直に、實際に白狀しなければならぬ事柄以上のものを認めたのである。

此の事から吾々は最早失言と云ふことの出來ない言語障碍に導かれる。何故失言と云ふことが出來ないかと言ふと、かやうな言語障碍は、例へば度を失つた時のども〻りのやうに、個々の語を損はないで、言葉全體の音律と發言に影響を及ぼすからである。然し此處でも前の場合と同じやうに、言語障碍によつて吾々に暴露されるものは心內の葛藤である。私は陛下に拜謁を仰せつけられてゐる時や、眞面目に戀を打明けてゐる時や、陪審官の前で自分の名聞と名譽とを辯護してゐる時に、言ひ損ひをする者があらうとは實際思はない。之を要するに、人々は諺にあるやうに彼等が全部其處にゐる時には言ひ損ひをしないものである。作者の文體を批評する場合でさへ、吾々は單一の失言の根元に必らず見出されるところの說明の原則に從つて差閊へないし、またそれに慣れて居るのである。明瞭にして些の疑點もない書き方を見ると、吾々は作者が此處では自分の心と調和してゐると云ふことを知るけれども、適當に使はれたものとして二つ以上の的を狙つてゐる無理强いの混亂した辭句を見出した場合には、吾々はそれによつて未完成の複雜な思想がそれに加はつてゐると云ふことを認めることが出來るのである。或は吾々はそれを通して作者の抑へつけられた自己批評の聲を聞くことが出來るのである。（一）

（一）「人が充分考へた事は
明瞭に言ひ表され、
またそれを語るべき言葉は
たやすく現れて來る。」
ボアロー作「作詩法」

嫉妬妄想に就いて

醫學士　森田正馬

嫉妬妄想の實例

今日お話する材料は詳しく調べてゐる間がありませんでしたが、最近見た嫉妬妄想患者に就いて、ごく簡單に申し上げます。

患者は二十七歳の板金の職工、三年前結婚し、二歳の子供あり、堅い人で酒も飲まず、教育は高等小學一年ぐらゐであります。大正十二年五月三日、患者は妻と子供とを追ひ立て一緒に警視廳に行き、嫉妬のために二人を訴へました。その時家内を毆つたが、その後のことは何も知らない。無我夢中で興奮狀態であつたと思はれます。それから根岸病院へ送られて來ました。その時にも矢張り夢中で、患者は後に其の時の事を思ひ出さず、唯自働車に乘つたといふ記憶があるだけです。そして、問にも答へず、じろ〳〵人の顏を見て笑つてゐます。或は澄ましたやうな態度や、ふざけてゐるやうな恰好で、落着いてゐられない樣子です。その晚は病室へ入つても亂暴などはしないが、言ふことは聞かず、床へも就かず、うろ〳〵してゐました。翌日は落着いておとなしく、話も出來ました。警視廳へ行つたのは一時の憤怒の感動であつて、前後不覺の狀態でありました。そして、その日病院へ來たのである

から意識溷濁の狀態で、その時のことを思ひ出さない。

この事件は嫉妬妄想から起つたことであります。詳しい調査は出來てゐないが、患者の言に依つてその大體が分ります。患者は深川のある工場に職工を勤めてゐます。患者は一ヶ月半程前から家内の擧動を疑ひ初め、始同じ工場に勤めてゐる三十餘りの同僚がゐます。長屋住居で、その二階に矢張り終氣を附けたがどうも疑はしい。家内は二歲に成る子供を虐待し、頰のところには二條の痕が附いてゐたが、これは火箸を附けたに違ひないと患者は話してゐます。斯く子供を虐待するのは怪しいといふところから、同居してゐる職工を疑ひ初めました。現場は未だ認めないが、いろ〳〵疑ふべき理由があります。それはいくら掃除しても座敷に箒の先の切れたものが落ちてゐることで、（患者はそれを藁の穗と稱してゐます。）如何なる譯かと言ひますと、一方の職工と密通するのは自分の寢てゐる時であつて、自分を藁の穗でつついて見て、寢てゐるかどうかを驗すものであると想像します。そして、藁の穗が落ちてゐるのを以て密通と解釋します。その他、いつでも爐の中に火箸や鏝が入れてあつて、いくら自分が其の位置を置き換へても、また元のやうに成つてゐます。どうも合點が行かない。恐らくは自分に姦通の現場を見付けられた時、自分をそれで突くだらうといふ證據であります。

それで、今度の事件の起る前四日位は、晝は工場へ通つて働き、夜は寢た振りで寢ず番をしましたが、これが非常に難しい。つひうと〳〵してその間にどうされるか分らない。身體も疲れ、疲勞の結果腹が立ち夢中に成つたことと思はれます。五月三日、患者が階下にゐたところが、家内が梯子段のところで音を立ててある合圖をしました。それを知ると同時にかつと腹が立つて警視廳へ連れて行つたのでありますが、その時のことは患者はよく覺えてゐません。

お話はこれだけであります。五月三日に入院して十日には退院してゐるので、調査の期間もなく、事實はこれだけであります。諸君はこれだけでどう考へられますか。普通か常識外れか、それは人々に依つて見方が異るかも知れない。我々は患者が一月半位前から不圖家内の行狀を疑ひ、その解釋の仕方や、家内や子供を警視廳へ引張つて行つた擧動から、略之を嫉妬妄想といふやうに推定します。從つてかかる型で起るものは早發性痴呆の嫉妬妄想であります。實地には斯く診斷を附けます。學問的の確かな斷定のためには、もつと詳しい材料が要りますが、實地にはこれで間違ひはない。しかし、嫉妬妄想は二十七歳は少し早い方で、大抵三十歳か四十歳で起りますが、兎も角早發性痴呆の一種であります。嫉妬妄想は色々の病氣に起りますが、その起り具合に稍特徴があります。患者の姦通の證據が餘り突飛で、馬鹿げさ加減が變質者の妄想と違ふところです。そして、この妄想は之をなくすることが出來ないで、病の進むに從ひもつと馬鹿げた、もつと際どいものとなつて行きます。夫婦隔離して別に置けば妄想は餘り込み入つて來ないけれども、妄想そのものが取れないのがこの病氣の性質であります。

感情の調節

極く簡單な材料で大體をお話して、嫉妬妄想は斯かるものであるといふことを申し上げましたが、之に就いて少し脫線しますが、感情に就いて申し上げます。

多くの患者に就いての經驗から得たところの、早發性痴呆の本態とも云はるべきものは感情の鈍麻であつて、これがその特徴であります。この病は後天性に起るもので、之に罹ると追々感情が鈍く成

り、末期には無氣力となり、呆けると云ふのはこのことであります。感情鈍痲と云ふことは、大きく云へば我々人間の生存、向上、發展して行く上に對する感情、換言すれば、生存慾、發展慾、知識慾、社交慾、審美慾、斯かるものが鈍くなるのであります。鈍くなると云ふ結果は釣合が惡くなるのであります。我々の生存、向上、發展は感情の釣合如何に在るもので、心臟や筋肉の働きでも思想の働きでも、凡て興奮と抑制との二つの調節作用があつて、心臟では交感神經は心臟を興奮させ、迷走神經は心臟を靜止させます。で、交感神經が興奮すれば心臟はむやみに打ち出し、迷走神經が興奮すれば脈が遲くなると云ふやうになります。斯く凡てその釣合と云ふことが必要であつて、若しそれを知らずに單に一つの事のみを知れば、それは生物識(なまものしり)であります。感情鈍痲の結果は第一に釣合が惡くなるので、憤怒、疑ひ、嫉妬とかいふものも斯かる場合に調節が無いから一圖に爆發します。始め、この感情の釣合が惡くなる特徴は、我儘になり、却つて理窟が非常に巧くなります。その譯は、加減なしに唯一圖のことを言ふからで、例へば親が金を吳れない、好きな娘を貰つて吳れないとかに關して、理窟だけは仲々巧い。巧くなると云ふのも、一圖の感情に支配されて釣合取れず、見境なくなるからであります。嫉妬妄想の場合には被害的の考へや感情が起る時、それを調節するだけの精神機能が侵されてゐるから、其の猜疑が常識はづれの馬鹿げた解釋をも自ら省みて疑ふ餘地のない妄想となつてしまふのであります。

申すまでもありませんが、人間活動の發動力は感情であつて、之なくば我々の生活は成り立たず、斯やうに大切なものでありますが、又各其の人の持前のものであり、それが發揮されて、馬鹿は馬鹿で終り、偉人は偉人で終ります。その感情を他から植ゑつけたり、附け足したりすることは出來ない。

その事實は精神病者、變質者、白痴などの經驗から考へて知られることであります。

感情は本來他から附加することが出來ないものであります。但し、感情は養成することは出來ます。例へば相當の年頃が來れば色情が起り、その色情は起るべきに起るもので、之を他からくつつける譯には行かない。腹の減らない者に饑餓の感じを與へることが出來ないと同然で、色慾の起らぬ者に戀せよと云つても出來ない。ここに感情の無いと有るとの區別が肝要であります。足りない、又は無い感情は出せません。しかし、感情を養成することは出來ます。

我々が疑ひや、被害的の考へや、或は嫉妬の情を起すのは、お互ひの持前でありますが、それが調節を失ふ場合、即ち早發性痴呆の場合に、被害妄想や嫉妬妄想を起すのであります。妄想の成立發生に關する理論としては、感情の釣合が惡くなつて、それで早發性痴呆の樣々の妄想が起ると解釋します。そして、到底我々が思ひも付けぬやうな巧い理窟が成り立つのであります。それは、感情鈍痲のため理性の力を失つて行くからであつて、この早發性痴呆の如き病的の場合に、ある一つの感情が起るとそれからそれと發展するものであつて、この有樣は著明に早發性痴呆の妄想に依つて知られます。之を普通の人に應用しても、病とは我々の生理的狀態の增進したものであるから、これと同じ徑路、同じ形を有します。

吾人は常にある感情を其の感情のままに表出して居るのではない。一方には之に反對の感情があつて之を調節して居る。又それを抑制する理性を我々は持つてゐます。此の感情を理性に依つて調節することが、修養上大切なことと思はれます。ある感情が起り、そのまま發展すれば突飛な思想が起り、感情が無ければ思想も亦成立しない。例へばここに心靈の肯定をする人がありとすれば、それは神秘

をあこがれるといふ抑へ難い感情から起ります。凡ての行爲も思想も感情から出發して、これ無しには起らない。若し吾人が常に單に感情のままにやつて行けば、必ず病的のものと成るのであります。調節があつて玆に始めて正しい思想が成立するのであります。

斯くの如く我々の精神修養は感情を理性的によく調節して行くといふことに在るのであります。我々が正しい思想を得るところの根原となるべき感情の調節を失つたならば、其の結果は如何になるべきかといふことを此の早發性痴呆の妄想の起る事柄から、我々に考へさせるのであります。

——大正十二年六月十日變態心理講話會に於て——

幻影を見るマクベス（二）

明治學院教授　鷲山弟三郎

マクベスがいよ〳〵ダンカン王を殺害した眞夜中のことであるが、ダンカン王の忠臣マクダフがおのが家に妻子と共に就寢してゐたものの、蟲の告知と云ふべきものであらうかどうしても安眠が出來ない。のみならず何となく老王の身邊が氣遣はれて、何事か天變地異が起つて王の安泰が失はれるやうに感じた。果ては丁度マクベスがその殘忍の刄を王の胸元に突き刺した瞬間であるが、マクダフの眼前の暗中に王の亡靈といふべきか生靈といふべきか、兎も角王の姿が見えたのである。之を見たマクダフはさてこそ御變事とむつくりと起き上り、甲冑に身をかためてマクベスの居城をさして一目散に馳せつけ、ぴつたりと閉じた鐵の扉を力まかせに叩くのである。邸内ではマクベスと夫人とが血にそまつた手の仕末をして居る。

マクベ　や、何處かで叩く？：、どうしたのだ予は？音がするたびに悸々する。

夫人　南の門を誰だか叩いてゐますよ。室へ戻りませう。水で一寸洗ひさへすれば爲た事は消えちまひますの。

二人は寢室へかくれた。門番は扉を開いた。マクダフは王の容子を見屆けるために早速寢所に案内を乞うた。

マクダ　あゝ怖しや〳〵〳〵！口にもいはれな

い、心に思ひつくことさへも出來ない！此上もない大破壞が行はれたのです。無慚至極の弑逆が、勿體なくも神聖な御寶庫を切り破つて、御玉の緒を盜み去りました。……　起きた〳〵！さ早く非常鐘を鳴らしなさい。大逆罪を働いたものがありますぞ！バンコーどのドナルベインどの！

此物音に驚いてマクベスも夫人もバンコーもその場にをどり出して來た。夫人は驚愕此上もないやうに裝うてその場にどうつと倒れた。マクベスは巧みに自分の罪惡を眩ませて「此一時間前に死んでゐたなら、幸福な一生を送つたと言へたものを。今からは最早此世に眞實に大切な物は何もなくなつてしまつた。取るに足らんものばかりだ。譽も德も絕えてしまつた。人心に勢ひを附ける命の酒が酌み干されてしまつて、只滓渣ばかりが此穴倉の中に取殘されてゐる」とダンカン王の追悼

らしい口吻を洩したが、それは作者が罪惡によつて良心の權威、人格の尊嚴を失つた者の荒廢した心情を正直に告白せしめたものである。それでこれはマクベスにとつて單なる芝居ではなかつた。僞善的な嘘の修辭もない。そして此の時以後彼は何時までも此の想ひ、この悶えを消すことが出來なかつたのである。彼の努力は此荒廢を償ふ爲に集中せられたといつてよからう。けれどもヘーゲルの言葉を以てすれば「宇宙の大秩序に反擊したものは其反動を受けざれば善惡何れをの結末をも齎らさない。」マクベスは到底ダンカン王を弑逆して己自身に招いた大缺陷は、少々の善行の供養等によつて補塡されざるを知り、尙更に大いなる罪科中の中に誤魔化して、惡を以て善に勝たしめようと試みて居る。此處に彼の堂々たる姿が見られないではないが、依然として靈性の奧深く敗殘の疵が仄見える。「ダンカンは今墓の中にゐる。定めない人生の熱病をすませて安樂に眠つてゐる」と

か、「死んだ者の方が幸福だ」とか、「俺はもう生き飽いた」等と呟いて居る。

然しながら吾々がマクベス劇に就いて刮目して見るべきものはその敗殘の主人公ではない。危急點以後の彼は惡を以て善に打勝たしめようとする彼である。毒を食へば皿までといふ心情、一部を破壞すれば全體をといふ心理である。その心情を以て彼が己が周圍を見廻した時、その瞳の自ら轉向して行つたところはバンコーであつた。何故か？バンコーは彼の野心とその罪科を觀破して居るからである。マクベスはこの人物さへ居なければ安眠も回復し、不安の感も跡を絶つと思つて居る。しかも三人の魔女共はバンコーに對し、「あなたは王樣になれないが、あなたの子孫は王樣になれる」と約束をした。さすれば何時バンコーはマクベスに襲撃するか知れない。一切の杞憂と安眠の妨害は彼にあるやうに見えたのは當然である。今は一刻も躊躇すべきでもなく悲歎に暮れて居るべきでもない。九分通りにもう仕事は終へた。彼は狂つたやうに急いだ。バンコーに自ら手を下すのではないが、刺客をえたいのである。他人の手で行るとすれば、ダンカンの思ひ出のやうに始終其死者が自分に附纒うて惱ますやうなことはあるまいといふ奇妙な考へが胸に浮んだ。

果して然うだとすると、予はバンコーの子孫の爲に、此手を血で汚したのだ。奴等の爲に慈悲深いダンカンを殺したのだ。心の平和の盃へ苦いものを注ぎ込んだのだ。只彼奴等のために、さうして予の此の不死の靈寶を惡魔の有に歸せしめてしまつたのだ。彼奴等を王にするために、バンコーめの子孫を王にするために！そんな事をする位なら、さア運命め、自分でやつて來い。汝か、己か、必死の勝負をしてくれよう！

彼はかうしてバンコー暗殺の決心の臍を堅め

た。二人の刺客は彼の招致に應じて宮中に罷り出で、懇々とマクベスからダンカン弑逆の罪はまさしくバンコーにありと說き聽かされ、之を屠るは天に對し國に對し男子の取るべきの義務なりと感じて殺意充滿、日の黄昏るるを待つてバンコーの來るべき道へと急いだ。

時はマクベスがダンカンの後を繼いでスコットランドの王として君臨した卽位式の酒宴の夕である。有志百官を招致したその席には無論バンコーも臨席することになつて居た。然しバンコーはむしろ己が血祭のために招待されて居たといふ方が至當であるかも知れない。何となれば、日の黄昏るるを待つて刺客が城外の往還に身を潛めたのは全く酒宴の開かるゝ一二時間前のことであつたからである。けれども此バンコー暗殺のことはマクベスと刺客のほかには全く誰知る者のない事件である。マクベスは自分の妻にさへこの事だけはほんとうに明かさなかつた。

マクベ　ああ、予の此胸の中は蝎（さそり）の巣だ！なア、お前、バンコーと其伜のフリヤンスがまだ生きてるだらう。

夫人　ですけれど、いつまでも死なない父子でもありますまい。

マクベ　さ、まだしもそれが慰めだ。やつつけようと思へばやつつけることが出來る。だから陽氣にしておいで。……………だんだん暗くなる。鴉が塒へ急ぐ。白日を主とする善良なものが、悉皆首を垂れて眠りかけると、夜を專らにする邪な者共がその餌食を得ようと競ひ起つ。（夫人に）ささ、不審に思ひなさる筈だ、が、まゝ、沈着いておいでなさい。惡で始められた事は惡の力で以て堅固になる。……だから、さ、一しよにおいでなさい。

盛裝の王と王妃は大饗宴の用意全く整つた大廣間に出かけて行つた。有志百官はすでに着席して

居つて、ひたすら王の出場を遲しと待つて居たのである。王は列座のものを一目見渡して丁度その眞中と思はれるところに王妃と二人で着席した。丁度その時の事であるが、刺客はバンコーを無事に刺し止めたと王に耳打ちにきた。マクベスは何食はぬ顏をして刺客の言葉をきき、又もや列座の客を見まはしたが、只一つバンコーの爲めに設けられた椅子の空席になつて居るのを見て。

これで、あのバンコーさへ來てくれれば、國中の名族は悉く一室内に集つた譯なのだが、どうかあの仁の見えんのは、何か凶變があつた爲ではなく、不實な男だなぞといつて吾々が非難するやうな理由で來られないのであれば可いが！

とマクベスは、全く内心の曇りを虚僞をもて拂ひのけ、一切を糊塗してかからうとした。然し第二の實在に對する反擊は依然として卽座に反動の波に捲き込まれざるをえなくなつてきた。バンコーの亡靈がその場に出現してマクベスの坐るべき椅子に着いたのである。しかも二十個に亘つて突き刺された其傷口から迸り出た血は全身を紅に染め、兩眼は潰れたまゝにマクベスを睨んで居る。マクベスは棒立になつて駭いてしまつた。勿論この亡靈はマクベスだけに見えたもので、他の人には彼が只空の椅子を眺めて驚愕して居るとしか思へない。マクベスは木を引きさくやうな、ヒステリックな女がおびえた時のやうな聲で「よもや予がしたとは言へまい。そんなに血みどろの頭髮を掉り立てるな」と叫んだ。貴族共はその聲をきいて更に愕かざるをえない。そのうちの一人は立つて、「諸君お起ちなさい。陛下は御不例のやうです」といふと、夫人は大急ぎでそれを制して、「いいえお掛けなさい、皆さん。折々斯ういふことはあるのです。幼い時分からです。發作は一時の事です。すぐ回復りませう」と巧みにマクベスを疵つた。そして小聲でマクベスに對しては、「ねえそんなも

のに慄へるのは怖れるにも事を缺いて贋物です。冬の爐の傍で、女子供が、お祖母さんの保證附で話す怪談なんかにこそ似合つてゐます。何故そんな顏をなさるんです? つまるところ只椅子を睨んでいらつしやるんぢやありませんの?」となだめるやうに詰つて見たが、依然としてマクベスの眼にはバンコーの姿は消えない。

(指して)そこを見て下さい! 御覽! そら、そこを……そら如何だ!

此時亡靈は一旦消えた。消えるとマクベスは急に氣をとりなほして「わたしには妙な持病があるのです。知つて居る人達には何でもないのだが。……さアさア、諸君の健康を祝さう。ぢや席に着かう。酒を持て。滿々と注げ。滿堂の諸君の爲、又ここに居られん予の親友バンコーのために、慶賀の盃を擧げる。あゝ彼の仁がここにをるといいのに! 諸君のため、及びあの仁のために、乾杯する。一同の萬福を祈りますぞ」とかういつた時又もやマクベスの身邊に接近して亡靈は立ちはだかつた。其物凄い樣子は前にもまさるものと見え、マクベスは狂亂の態で怒鳴り始めた。

マクベ　(亡靈に)退れ! 目通りを避けろ! 地の中へ入つちまへ! 汝の骨には髓がなく、汝の血は冷く、汝の目には物を見る力は無い筈だのに、じろ〳〵見つめてゐる。

(貴族等駭きて又席を起たうとする)

夫人　(人々を制して) 皆さん、あれは只ほんの癖だと思つて下さい。全く然うなのですから。只折角の興を醒ましてまことに。

マクベ　(亡靈に)人の敢てすることなら何でもする。凄じいロシヤ熊の姿で來い。角の生えた犀なり、……其姿さへ止してくれれば此堅固な筋肉が假にも慄へるやうなことはないのだ。……退れ、怖ろしい影め!

此處で亡靈は消えてしまつた。

ああ去つちまつた。去つちまひさへすりやもう大丈夫だ。

かうして亡靈は二度現はれて居るが、二度とも一たん恐怖したマクベスがもう一度氣を取直して亡靈を叱りつけた時に消えることになつて居る。それは丁度ダンカンの寢所に赴かうとした時、空中に見えた短刀と同じことで、罪の認識と共に現はれ、罪の優越によつて消えるやうに配されて居る。兎もかくかうして幻影は消えたが、彼の秘事はもう竝みゐる貴族連の掌中に握られた。又もや不幸にも此の行爲は最初の場合と同樣徒勞となつた。假令バンコーは倒れて亡靈は征服されても、彼の内なる擾亂は鎭定されないからである。

飜つて吾々は此バンコーの亡靈に就いて今少しく精細に考察して見る必要がある。先づ第一に不思議に思はれるのは此亡靈が並居る人々、否マクベスと一身同體でなければならぬマクベス夫人の眼にさへ見えず、只マクベスにのみ見えたといふ奇異なる事象である。然しこれは我日本の亡靈觀より見て奇異なるもので、英國の亡靈觀、ことにエリザベス王朝時代のそれより見れば何の不可思議はないのである。ブラッドリー敎授があのハムレット劇を批評した時、有名な一場面卽ち、ハムレットが不貞の母を言葉を盡し心を籠めて諫めるところで、突然父王の亡靈がその場に現はれるのを評して、一般の人士は何故あの亡靈が王子ハムレットにのみ見えて、妻なるガートルードに見えないかと訝かしく思ふであらうが、それはエリザベス時代の亡靈觀を知らない者の云ひ分である。あの時代に於ては亡靈は對個人に出現するものであつた。どれ程人が群れて居るもそのうちの一人に出現するのが、亡靈出現の通則であつたといつて居るのを見ると、バンコーの亡靈がマクベス一人に見えるやうに配したのを不自然として、作者をなじる由はないのである。

今一歩進んだ問題として、シェクスピアは何故此剛膽なマクベスに殊更に幻影を見る變態心理を配したかといふ本質論的な問題である。それは幾

分作者がホリンシエッドのクロニクルに準據したことにも基因するが、其究極的な原因は作者の描いたマクベスといふ人物が特殊の性格を備へて居るからである。而してこの特質を把握することがマクベス劇に對するシエクスピアの創意を了解するになくてならぬ鍵であると信じられて居る。

剛膽で野心の多い斷行家は或る範圍に於て詩人の想像力を備へて居た――一方にはある印象に極端に敏感であり、他方に於ては身心の兩者に猛烈な混亂を來す想像力があつた。このために彼は絕えず超自然な印象を心に殘したり、超自然な恐怖を抱く癖があつた。又それを通して特別に良心と名譽心とが暗示せられるところもある。マクベスの善性（良心）は道義觀とか無上命令とか禁斷とかいふ明白な言葉となつて現はれるのではなく、ある驚くべき又懼るべき幻影となつて現はれてくるのである。このやうに幻影は彼にとつて最高のもので、何時でも意識よりも高くあり深くもある。それで彼がそれに服從して居さへすれば安泰であつた。ところが彼の妻は全くそれを誤解して居るし、彼自身も完全には自分の幻像の作用を諒解出來て居なかつた。犯罪を思ひ止まらせ、警告に從はせようとする物恐ろしい幻像が、最も深い自我の反抗として現はれて來るに拘らず、それは彼の妻にとつては單なる臆病な神經の所爲と見え、彼自身も始終不安定を惧れるためとか、惡の應報を惧れるために見えるもの位に考へてゐた。卽ち內なる自我が良心に惧れ戰いてゐる時に、分別と思案は外なる褒貶に囚はれて居たのである。このやうに彼が自分に對して眞の明を缺いて居たことが、幾多の淺慮な批評家や俳優達によつて、恰も彼が一個の臆病な冷血な策略の多い無情漢で唯危險なるがために躊ひ、安泰を缺くがために苦惱した者のやうに重ね重ね誤られて評價されたり、扮出されて居る。事實上彼の膽力は驚くべきものである。靈性は絕えず恐異の幻影となつて彼の進展を阻止しようとしたり、或時は其耳朶に彼自らが平安を殺害し、永遠の寶石を投げ捨ててゐると叫んだり、囁いたりしたに拘はらず、彼は罪から罪へと堂々と濶歩して行つたのである。（以下次號）

最近の學説

性道徳の新目標

早大教授　安部磯雄

自由戀愛とか自由結婚とかいふ言葉があるが、之は結婚制度の破壞を意味するものであつて、現在の結婚制度は人間を束縛したものであり、今日多くの人には結婚制度のために苦んでゐて、夫婦とは名のみで實がない有樣であるが、然し一度結婚した以上法律もなか／＼離婚を許さぬし、よし許しても社會の制裁があるので事實上離婚を實行することが出來ないのであるが、之は實に個人の權利、幸福を無視するものであつて、人間は斯くの如き結婚制度のために束縛さるべきでないといふ考へから、自由戀愛や自由結婚に關する説が公然と唱へられ、それを實行するものも多く出て來たのである。此説の中にはまた別の意味も含まれてゐるのであつて、現在之が爲めに何人も苦しみ、何人も之を以て悲むべきこととしてゐるのは、文明の社會に醜業婦の存在してゐることであつて、今日は醜業婦の增加することはあつても減少する傾向は認められないのであるが、自由結婚論者から云はせると醜業婦の多いことは現在の結婚制度の缺陷から來るのであつて、現在の結婚制度に於ては夫婦の間に愛情が全く無くなつてゐても、法律や社會の輿論が夫婦關係を無理に繫いで置かうとするので、勢ひ男は自己の滿足を他の方面に求めなければならないから、今日の社會に醜業婦が存在する所以であると考へるのであつて、若し結婚制度を破壞すれば不自然な夫婦關係は除かれるので、自ら醜業婦の必要がなくなる譯であつて、自由結婚が行はれなければ醜業婦を社會から驅逐することが出來ないと主張するものである。また全然結婚制度を破壞せぬまでも、現在の結婚制度其者に反對する人は少くないのであつて、結婚制度を廢さうとは思はぬがそれを現在よりは違つたものに改めようとする立場にあるものがある。例へば契約結婚であつて、結婚は双方の契約であるから期限をつけて五年なり十年なり結婚をし、期限が切れても双方が猶滿足であるならば其結婚の期限を更に引延ばすし、不滿であるならば期限が至れば直に分れることが出來ると考へるものがある。つまり之は結婚が成功するか失敗するか分らないので、試驗的に結婚をするのであるから試驗結婚と稱しても差支ないのであつて、外國に於ても此説を唱へる者がある。然しいづれにしても一方は試驗的に行ふ結婚であり、他は期限の契約もなく、結婚制度を無視して、自己が滿足ならばよし、不滿足ならば分れるといふ自由結婚であつて、結局に於てその差は大きくはない。で其結果はどうなるかといふに必ずしも雜婚になるとは限らないので、結局夫婦の關係は變るには變るが、少くとも夫婦關係を保つてゐる間は一夫一婦で行かなければならぬといふ説もあるのである。然し普通事實はさういふやうな一時的一夫一婦が行はれるよりも雜婚に陷りやすいのであつて、自由結婚が盛んに行はれる結果は雜婚が生じて自ら一夫一婦の説を否認するやうになるのであるが、今日に於ても大分さういふ傾向が見られるのである。（中略）

茲に一つの提案として、私自身としては

—最近の學説—

此標準によつて性の問題を取扱ひたいと思ふのであるが、それは一言にしていへば幸福といふことであつて、今私はその事について考へて見たいと思ふのである。要するに結婚生活の目的は幸福といふことにあるのであつて、人生は大部分此幸福の思想によつて導かれてゐるのである。我々の結婚生活はいふまでもなく我々の要求をそれによつて滿足させることが出來るから結婚をするのであるが、其要求の滿足は肉體的でもあり、靈的でもある。或人の考へるやうに結婚は肉ばかりでもないが、さればとて靈ばかりで行くことも出來ないのであつて、それは靈肉一致の境地であつて、人間は此の二つの滿足を結婚によつて求めるのである。誰しも結婚する時は此二つの滿足を得るためにすることは明かであるが、若し結婚によつて此二つ の滿足を得られない場合には、結婚生活は無意味であるから、斯くの如き不幸な結果になつた時には離婚は決して不道德ではない。不幸を忍んででも結婚生活を繼續しなければならぬ必要はないから、一度結婚したら分れることが出來ぬといふやうな窮屈な考へ方は今日の實際に通用しないのである。で我々の結婚生活に於ては此幸福といふことが一つの標準となるのであつて、此標準によつて結婚生活を判斷しなければならないのである。然しながら茲に注意すべきは此幸福は決して一人の幸福ではないといふことである。結婚は二人の關係であつて、だから幸福は二人のものでなければならない。我々の道德は決して利己的であつてはならないので、自分丈けの幸福を許ることは許されない。自己の幸福と他の幸福との兩立に我々の道德の立脚點はあるのであつて、一人の幸福を以てすべてを判斷することは出來ない。で結婚生活の標準は幸福にあるのであるが、それは飽くまでも、二人の幸福であつて、此標準によつて結婚生活を繼續するか破棄するか判斷すべきである。そこで實際問題に入ると、若し我々が離婚したいといふ時に、結婚はもと／＼二人の幸福のためにしたのであるから、其結果が不幸であつたならば、二人の合意の上でそれを實行することは差支ない筈であつて、何人と雖も之に反對することは出來ない。そして斯の如き態度こそ性に關する道德の一つの標準としたいのである。

—（中央公論六月號）—

自殺者の生理狀態

醫學博士　三田定則

予等の研究材料は男四百四十三、女百五十二例にのぼつてゐるが、その體中における病的變化を述べると、男性自殺者の剖見所見例は、その數四百四十三で、中に或は屍體腐敗の度極めて甚しきか或ひは他の原因よりして、體中の變化を明らかにすることの出來なかつたものが二十七例ほどあつた。故にこれを四百四十三から差しひくと、男性自殺者の體內における變化を窺知するに足るべきものは約四百十六例になる。そして剖見所見を通覽して、體內に多少の病的變化を備ふるものが三百五十五、その他の五十一例は、更に病變なく、全く健全なりと見なさゝるべからざるものなるがゆゑに、男性自殺者を病變あるものとなきものとに區別し、これを百分率に換算すると

病變あるもの八十八プロセント
病變なきもの十二プロセント

の割合を呈し、自殺者の多數は、身心に何等かの病變を有するものであつて、その點の健全なるものに至つては非常に少いこと

がわかる。斯く自殺者には、大抵何等かの病變を備ふるものが大部分をしめてゐるのであるが、然らばその自殺者の病變中如何なる種類のものが一番多いかといふに、慢性軟腦膜炎が卅プロセント、慢性アルコール中毒が二十八プロセント、慢性內腦水が十三プロセント、動脈硬度十一プロセント心筋脂肪變性十二プロセント、胸腺淋巴腺增殖乃至先天性大動脈狹少等の體質が十二プロセントである。この事實を基礎として吾人は、男性の自殺は、(一)中央神經系統、(二)循環器系統に一定の病變を有するもの、(三)一定の體質を具備するものに最も屢々現るる現象であると斷言したい。以上は男性自殺者について論じたのであるが、つぎに女性のそれを述べて見よう。

私が特に女性の自殺者を、男性より區分して述べようとする理由は、女性には、男性に存在しない一種特異の狀態があるからである。卽ち姙娠と月經とがそれで、この二つの狀態は、勿論生理的現象の範圍を脫したものとはいひかねるけれども或ひは姙娠に於て、或ひは月經に際し、精神上並びに身體上に、生理的であるか、または病的であるかの判別をなし難き諸種の變化を發現することも多きは最もよく人の知る所である。かういふ狀態にある女性が、ある因子を動機として、容易に自發的におのれを殺すことの如何に屢々なるかは吾人が、女性自殺者の百五十二例を檢査した結果に徵して明らかである。この多數の女性自殺者中、何等の病的變化をも檢出することの出來なかつたものは、僅に全數の十六プロセントに過ぎず、殘りの大多數は、體內諸臟器に多少の病變を呈してゐるものであつて、實に全數の八十四プロセントにのぼつてゐる。然らば、檢出し得たる病變中、如何なる種類のものが最も多數であるかといふに

慢性瀰蔓性軟及硬腦膜炎　二十九プロセント
月經　二十五プロセント
姙娠　二十三プロセント
陰性　十六プロセント
胸腺淋巴腺體質乃至先天性大動脈腺狹小　十六プロセント
動脈硬變　十一プロセント

といふ成績になる。

以上男性及び女性自殺者について檢査したる解剖的檢査の結果を總括して見るに、男性にありては、その自殺者の多數は中央神經または循環器系統に病變を有するか、或ひは淋巴胸腺體質を備ふるものである。女性においてもおなじく、中央神經系または循環器系に病變あるもの、月經の初め、または姙娠、或ひは淋巴胸腺體質を存するものである。かくの如く、自殺者の多くは、精神的にまたは身體的に不健全なものであつて、男性にありては、その健全なるものは僅に十二プロセント、女性にありては十六プロセントに過ぎない。

—東京日々(五月八、九日)—

自殺の男女別

法學博士　財部靜治

歐洲諸國の例によるに、男自殺數は絕對數比較上、女自殺數の三乃至四又は五倍に達す。而も又右の不同圈內に於ける、歐洲諸國間の相違も、輕視するを得ず。Rehfisch の研究によるに、女自殺の割合最も少きは瑞士にして、卽ち女自殺一につき、男自殺五・八なり。白耳義、巴丁、うゆるてむべるひ及芬蘭に於ても、その割合は婦人のため、可なり有利にして、卽ち一對五の割合なり。普魯西、巴威里及丁抹に移れば、その

――最近の學說――

割合既に一對四なり。更に一歩を進め、婦人を稼ぎ仕事に引入るゝこと多き諸國諸地方、假令ば普魯西の首府、佛蘭西、墺太利、伊太利、錯遜、瑞典、諾威にありては、女自殺の割合一層多く、卽ち男自殺に比し、一對三乃至三・五の割合を示す。就中伯林は女自殺の割合最も高く、一對二・八の女對男自殺比を示す。こは女子が營利又は勞働に加はること餘りに多く、かくて男子と殆ど同一なる諸條件に、曝さるゝによるものたるや、明かなりとせり。說の當否はともかく、自殺に及ぼす婦人職業の影響を力說せんとするものなるが、茲に尙附言すべきは、自殺を以て犯罪として取扱ひ、從ひて表面の自殺統計々數に、多くの疑問を挿まるる。英蘭自殺中婦人割合に多く、Schnapper Arndt これを觀じ、そは虞らくは英國婦人の、解放せらるゝこと多きによるものなるべしとせることなり。

本邦自殺に於ける、婦人の割合高きこと、歐洲諸國の比にあらず。之につきては本邦人に男女別上、歐洲諸國に反し、男數超過を示すこと、多少の關係あるべしと雖も、自殺女數の高き割合、歐洲諸國に比し、餘りに甚しく相違することを考ふるときは、之のみにより說明するに足らず、別に有力なる特殊原因あることを、推測せしめずんばあらず。それ本邦婦人界にありては、十有餘年前の近時に至るまでも「出でましてかへります日のなしときく、今日の御幸に逢ふぞかなしき」と詠じつゝ、君に殉し夫に殉せし一烈婦を生じ、又その昔身を殺して、孝道又貞節を守りし、袈裟御前の事蹟は、今尙女訓の敎材に加へられつゝあり。高き本邦自殺女數の裡面には、婦女界道德上由來推稱せられたる、是等特殊人格の餘波を宿すこと全くなしとすべきか。否寧ろその計數は、本邦婦人の解放運動、未だ充分に實施されず、婦人の社會的地位著しく劣れることを示すの、徵とすべきものなるか。兎も角材料は些々たる一計數に外ならざるも、社會心理社會倫理の硏究家、文學者又敎育家により、種々の疑問は之を中心として、發せらるゝの外なかるべきを想ふ。

—經濟論叢（五月號）—

神經衰弱症

醫學博士　長 地 長 孝

學術上からいへば、神經衰弱症といふ症狀のうちにも、色々の種類がある。卽ち普通の神經衰弱の外に精神薄弱といふ—敢て精神作用が衰弱を來すといふ譯ではないが—病症がある。この精神衰弱と、神經衰弱との間の區別もまた、劃然と立てることが困難であるけれども、この區別を知ることは、豫後の上に於ても又醫治の上に於ても極めて必要なことなのである。然しこれとても、專門家ならぬ讀者諸君にとつては、左程興味もなく又それ程必要なことでもない。讀者に最も必要なことは、神經衰弱症が他の病氣に伴うた症狀として起るといふこと、及び或る種の病氣が起るために先づ以て神經衰弱症の症狀を以て現れて來るといふ、この二つの事實である。例へば、肺尖カタルの始めはいつもよく神經衰弱といふ風で起り來ること、又胃病の結果として神經衰弱が起るなどは、卽ちこれに外ならぬのである。（尤も神經衰弱そのものの一症狀としても消化不良が起るのである）が故に右の如き場合に於て、根本の肺尖カタルに治療を加へずして單に神經衰弱だけを癒さうとしたり、根元なる胃病を直さずして神經衰弱に治療を加へたりするのは、見當違ひの考へであり、間違つた治療法である。ところが茲に又注意を要するのは、以

上のやうに實際に他の病氣に伴つて現れて來るもの、外に、反對に又神經衰弱のため種々の疾病觀念卽ち「自分は肺が惡いのではないか」とか「腦が惡いのではないか」とか云ふやうな觀念が、實際は單純な神經衰弱で他の機關には異常がないのに拘らず起つて來て、それを家人又は醫者に訴へることがあるといふことである。

——最近の學說——

斯うなると益々其判斷が面倒になつて來たもので、或は病氣の結果として現れたものなのか、それとも又單に疾病觀念なのか、等を分つために、患者の言だけを根據として判斷してはゐられなくなるのである。卽ちその患者の言よりも、先づ以て身體諸機關に異狀あるや否やを檢して、はじめて神經衰弱症の診斷を下すやうに心掛けなければならぬ。これは勿論治療する醫者の責任でもあるが、又一方患者自身も考慮を拂はればならぬ問題である。

世には神經衰弱といふと、神經そのものの活動が弱くなつたかのやうに考へる人があるやうだが、それは大なる考へ違ひである。神經衰弱症といふものは、少くともその初期に於ては却つて精神の働きが鋭敏になるのである。それが證據には神經衰弱の患者は、屢々人の足音が非常に強く頭に響くとか、通常人には左程でない電車の軋る音が無暗に氣になつて堪らないとかいふやうに、通常人以上に鋭敏になるのである。全體一つの神經は外界から受けた刺戟を腦に傳へ、腦は之を認識するのであるが、その刺戟が腦なり神經なりを働かせるためには一定の程度の强さを持つてゐなければならぬ。だからこの强さに達せない刺戟は、神經を昂奮させることが出來ない。分り易く言へば腦にも感ぜないといふことになるのである。此の限界を專門的に、刺戟の閾といつてゐる。然しこの閾がなかつたとしたならば、日常起る刺戟のために、腦や神經は少しも休む時がないのであるが、此閾があるために休まる事が出來るのである。

然るに神經衰弱といふものは、此の閾が低くなつたのであるから、普通人には少しも感じないやうなことまでも、感じて昂奮するのであるから、よく云へば鋭敏であらうが、一方確かに鋭敏を通り越して過敏になつてゐるのである。然しかう見て來ると、腦の働きの鋭敏な人と、先天的に神經質の人と、神經衰弱のために神經が過敏になつた人との、三つの間に一定の限界がなくなるやうに思はれよう。けれども神經衰弱の過敏には、ある特徵があつて、決して先天性の腦の働きのよいのや神經質やと同じではないのである。其の特徵とは過敏に働くと同時に直ちに疲勞してしまふといふことである。

—雄辯（六月號）—

教育と醫學

醫學博士
文學博士　富士川游

教育と醫學とが互に相接觸することは、第一に兒童の教育に際して醫學的の補助を必要とする場合に明かに認められる。兒童の教育に際して醫學的の補助を必要とする場合は、實際にありて、成績不良の兒童を診査することである。今日の學校の科程は稟賦の劣等なるものでも他の兒童と共にこれを修むることが出來るのであるから、成績が不良であるからと言つて、直ちにこれを稟賦の劣等なるものとして仕舞ふことは出來ぬ。必ずその兒童を精密に檢査して、その精神狀態を明かにせねばならぬ。そしてこれを今日までの研究の結果に照すに此の如き成績不良の兒童は、大凡、左の四種類に區別することが出來る。

（イ）精神薄弱の兒童（魯鈍）

(ロ) 精神異常の兒童(精神低格)
(ハ) 社會的に傷けられたる兒童(環境不良のもの)
(ニ) 病的の兒童

精神薄弱といふのは、精神中樞器官の發育が十分でないか、又は遲れてゐるがために、精神の作用が不十分で、殊に倫理的及心理性的判斷の力が著しく障碍を受けてゐるものである。卽ち魯鈍 Debi-lität と稱せられるもので、槪して言へば、智力の缺陷を存するものであるが、これを診斷して精神薄弱なることを鑑定するには、醫學的心理學的の檢査を施さねばならぬ。試驗に落第するからといつて、常識的にこれを魯鈍と決定することは甚だ危險である。さうしていよいよ精神薄弱と定まりたる上はこれを補助學校 Hilfsschule 又は補助學級 Hil-fsklasse に移して特殊の教育を施さねばならぬ。こゝに教育と醫學との親密なる關係が存する。

精神異常といふのは、一にこれを精神低格 Psycho, athische Minderwertigkeit と名づける。その主徵とするところのものは、感情及び意志の障碍で、その結果、その性格が異狀を呈するものであるから、又これを性格異狀とも稱するのである。精神異狀といふけれども精神病ではなく、精神の狀態が健康と疾病との中間にあるもので、之れに屬するものには種々の種類がある。その最も輕度のものは神經質と名づけられるもので、これには普通の教育方法が應用せられて差支ない。殊に神經質の治療の方法として教育を應用すべき場合に然りとする。然しながら一人子の如き性格の變狀を示すことの著しいものにありては、教育上特別の注意を要する。「ヒステリー」性のもの、癲癇性のもの及び變質性(狹義の)のものにありては、精神低格の程度が著しいから普通の教育の方法を施すに適せざる場合が多い。精神異狀の多數のものには言語の障碍を呈するもので、吶吃、言語澁滯等はその徵候の一つであるが、それよりも更に著明なるは精神の作用で、殊に虛言と竊盜とは教育上重大の注意を要するものとしてこれを擧げねばならぬ。精神異狀のものにありては、抑制作用の缺如、衝動性行爲想像作用の昂進、自己中心の思考の激甚、意志薄弱等が現れて、それが爲めに反社會的の行爲をなすものが甚だ多い。

社會的に傷つけられたる兒童には先づ飢餓の兒童(食事が十分でない)過勞の兒童(たとへば新聞の配達などするもの)等が數へられる。これ等の兒童は學科に對して無關心であるばかりでなく、教室にありて坐睡をなし、頑固で、剛情で、終には、遺棄の狀態に陷りて竊盜の行爲をなすに至るのが常である。遺棄の狀態に置かれて、兩親の監督を離れ、若しくは兩親の監督が不十分又は不適當で、その上に無教育の狀態にあるものは貧賤の社會に多いものであるが、これ等の遺棄兒童の中にて、精神薄弱及び精神異狀のものは、動もすれば學校に通ふことを嫌ひ、眞面目に修學することも出來ずして、遂に少年犯罪者の列に入るものである。兩親の飲酒、亂行、家庭の不和等環境の不良のために傷けられるところの兒童の數もまた少なくない。

病的の兒童に屬するものは、佝僂病に罹れる兒童、結核及び梅毒等を患ひ居れる兩親の間に生れたる兒童、病的の體質を有する兒童、結核及び營養障碍等の全身病に罹れる兒童、耳目口鼻咽喉等の疾患を患ひ居れる兒童等で、これらの場合に、精神作用の發達が一時的に阻害せられてゐることが尠くない。

嬰兒殺の考察

岡島龜次郎

一　嬰兒殺の志向と理由

何故子供は殺されるのであるか。殺す位なら產まなければよいではないかとある人は言ふだらう。產んだ以上は殺してはならんと他の人は言ふだらう。ところがこの自明の眞理のやうに見える立言は人間が長い經驗によつて漸う達し得た思想の表現である。人間の中に奔流する自然の力が、「先見」の光に照し出されて、人間社會に始めて嬰兒殺が行はれて以來、人類は嘗て嬰兒殺への志向を全然忘却したことはない。たゞその方法がその社會の狀態及思想に應じて變化したゞけである。現代人は產んだ子供を殺しては惡いといふ道德意識を持ち、受胎せずに性慾を滿足さすだけの智識を獲得したから產兒制限を提唱し宣傳しそれに共鳴するのである。產兒制限はその志向に於て嬰兒殺と同一ではないか。無論現代人はポリネシア土人よりも觀念財が豐富だから、子供を持たないといふ理由は兩者に於て非常に違ふだらうが、（さうしてこの相異のために嬰兒殺が多樣の形態をとるのだが）最も根本的な點卽ち子供を持ちたくないといふ志向に於ては全然同一である。（註）この最も內面的な欲求が嬰兒殺、墮胎、あるひは產兒制限として實現されたのである。けれども私はこゝではこの志向が低級の野蠻人を除いて如何なる文化階段

の人にも存在するといふことだけを指摘するに止めて、子供を持ちたくない理由に就て稍詳細に語らうと思ふ。このためには先づ如何なる種類の子供が殺されるかといふことを觀察するのが便宜である。

（註）嬰兒殺のいはゞ本流的志向はこの「子供を持ちたくない」といふことだが、その外に傍流的志向ともいふべきものが存在する。たとへば子供を多く產みたいために、あるひは食慾のために子供を殺すことがある。犧牲などもその一例といつてよい。これらは本流的志向とは正反對に、子供を持ちたいのである。私の今の目的は本流的志向の考察にあるのだが、第一には人間生活に於ける觀念の位置を考察する便宜から、第二には事實の興味から、この傍流的思想のあらはれも共に叙述して見よう。

二　殺される子供（一）

古事記に「此子者（水蛭子）入葦船流去、次生淡島、是亦不入子之例」とある。この記事で見ると、さうしてこの事が異常として取扱はれてないところから考へると、不具や虛弱な子を棄てることは日本上代の習慣であつたらしい。無論この物語の結構から見て女が男に物を言ひかけた因緣で不具な子が生れた。從つてその子は育てるべきではないから棄てたと考へられないこともない。けれどもさういふ思想が當時あつたかどうかは分らない。北米印度人は不具や癈疾の子の生れるのは惡魔の仕業だと考へて嬰兒殺をやり、タイチ人はそれをタブーを犯した罪だとか、敵の呪（のろひ）の結果だとか判斷じて殺すが、日本上代にはこの惡魔の考へ方が存在したから、（ミソギ、大祓）この理由で水蛭子や淡島やが殺されたのかも知れない。

　けれども不具な子供を殺す理由はこんな因果觀念の方面から考へずに、單に生活の便宜の方面からも考へることが出來る。生命の神聖の認識されない時代（このことの認識され出したのは遠い過

去のことではない。」にあつては、人間は他の自然物と餘り區別されなかつた。フェンジア人は饑餓の時には犬よりも先に老婆を殺す。その理由を聞かれると、そこの子供は、「犬は獺を捕まへるがお婆さんは駄目だ。」と答へるさうだが、これと同樣の心理で不具や虛弱な子供は殺される。水蛭子の棄てられた理由もこれで同樣でないとは言へない。この「役に立たないものは殺す」といふ考へ方は嬰兒殺の鐵則で、子供を持ちたくないといふ志向の實現の順序は大體この鐵則によつて決定せられてゐる。さうして、この考へ方は精神的宗敎が人心に滲透するまでは支持せられたもので、あの華かな文化を生んだギリシャに於てさへも不具の嬰兒殺は公然行はれた。その最も有名な例はスパルタにある。プラトーンやアリストテレスは嬰兒殺や墮胎を是認したばかりではなく慫慂さへもした。スパルタでは法律で命令した。この風はローマにも存在し、セネカは「無用なものを健全なものから離別するのは理性的行爲である。」と云つてゐる。無論ギリシャやローマの哲人たちのこの見解は、個人的であるよりも社會的立場からなされたものであることは看過出來ないが、それでも「無用」が撰擇の標準である點に於ては個人的の場合と同樣である。この考へ方が純個人的な純感情的なキリスト敎會によつて如何に非難され、生命神聖の觀念が如何にして芽生へたかといふことを觀察するのは興味のあることである。

この無用なものは殺すといふ觀念に關聯して思ひ出されることは、カリホルニアに於けるある印度人の間に行はれる習慣である。「こゝでは女は子を産むために、ひとりで、河緣か水のある洞窟のほとりに行く。さうして、子供が生れるや否や彼女は子供を水の中に投げ込む。若し子供が水面に浮び上つて泣いたときには拾ひ上げて育てるが、若し沈んでしまへばそのまゝにして置く。」(Sutherland: Origin and Growth of Moral Instincts, vol.

II. p. 99) この習慣の起原に就てはスザーランドは何も語つてゐないが、これも無用なものは殺すといふ考へ方から來てゐるのではないかと思ふ。

不具な子供と同様に双生兒が殺される。日本では昔から双生兒や三子(みつご)は祥端だと考へられ、幕府や官府から褒美を貰つた例があるが、野蠻人の間では双生兒の一方或ひは兩方が殺される場合が多い。(Westermarck: Origin and Development of Moral Ideas, vol. I. p. 395) ある野蠻人は男が同時に二兒の父になる筈はないといふ考へから、一方は自分の子供ではないと判斷する。他の野蠻人は双生兒は凶事の前兆であるか、あるひは物神(フエティシュ)の怒りの結果だと思ふ。さうして、因果の有機的存在を信じる野蠻人の因果觀念から、その原因のあらはれと思はれるものを消滅させて安心する。またある野蠻人は一方を殺さなければ自分の力が無くなると考へて殺す。この「力」が、即ち精神がそれを宿す肉體を食ふことによつて、あるひは他の理由によつて他に轉移するといふ思想は未開民族の生活に非常な影響を及ぼしてゐるので、最近代に至つて、人は漸うこの思想から解放せられたやうに見える。臆病になりたくないために兎の肉を食はなかつたり、敵の勇士の肉を食ふことによつて、それだけの勇氣が増すと思つたり、自分と同じ名を子供につけると早く死ぬと考へたりするのは無數の中の數例である。キリスト教會の聖餐にもこの面影がある。種痘術の發明せられたときに、そんなことをすれば牛になると言つて非難したのは有名な話になつてゐる。嬰兒殺もまた人間の行爲であるから、この觀念の圏外にあり得るわけはない。双生兒の殺されるのも一つの場合だが、その外に子供が棄として殺される場合や長男のみが習慣的に殺されるゐる場合なども、この現代人には理解出來ぬ觀念によつて説明せられる。フレザーは長男殺の理由を列擧して、(一)神への貢物、(二)父の死の身代り、(三)精神を奪ふことによつて父

の生命を危險にするから父によつて殺される、と言つてゐるが（Frazer: Golden Bough, vol. IV p. 188)(二)(三)などはこの例である。またオーストラリア土人の母親は後の出産の力を增すために初生兒を食ふが、これも恐らく靈肉のこの考へ方から來てゐるのであらう。

しかし嬰兒殺に於ける最も劇的な光景は長男を犧牲として神に捧げる場面だらう。嬰兒殺や墮胎の多くが、物置の隅や產婆の部屋で恐怖のために戰きながら實行されるに對比して、これは堂々と廣場で、群集の前で、正義の名に於て、悲壯ではあるが崇高な感情で實行せられる。この代表は言ふまでもなく、創世紀（二二、一——一二）に描かれたあの場面である。「是に於てアブラハム彼處に壇を築き柴薪を臚列べその子イサクを縛りてこれを壇の柴薪の上に置かせたり。斯してアブラハム、手を舒べて刀を執りてその子を宰さんとす。時にエホバの使者天より彼を呼びて：：汝の手を童子に按ずるなかれ：：」この長男殺は最も貴重な物を神に捧げやうといふ意志の發現で、神と人間との關係が人間からの獻貢によつて漸う休戰的狀態を保ち得ると信じた文化階段に於ては、極めて眞劍ではあるが、しかしながら當り前の事柄である。センゼロ族では、天候が惡くて收獲の少いときには豫言者が長子の犧牲を命じた。印度人はガンジス河の神に長子を投げた。クトナカ族の女はかう太陽に祈る。「私は子供を孕んでゐます。生れましたときにはあなたに捧げまするによつて、私達を憐んで下さい。」

この外に子供は多くの子供が生れるために神に捧げられる。しかし犧牲による嬰兒殺は人間性の必然の勢として犯されるのではなくて、捧げ物の種類がたま〳〵子供と決定せられた場合に起るに過ぎないのだから、嬰兒殺の考察に於てはこれ以上述べる必要はないと思ふ。たゞこゝでは、ある文化階段ではかゝる理由による嬰兒殺もあるとい

ふことだけを指摘して、もつと本質的なもの、子供を持ちたくないといふ志向による嬰兒殺、生活問題、結婚制度に基因する嬰兒殺、更に根本的に言へば、性慾が自らを實現するために自然及社會に對する反抗挑戰としての嬰兒殺の事實の觀察に入らうと思ふ。

三　殺される子供(二)

前に述べたやうに不具や雙生兒の殺される理由は、その子供の事情が普通でないからであつて、若し彼等が健全な肉體を持つてゐたならば、育て上げられたのである。犧牲としての嬰兒殺は人文史の一挿話として取扱はるべきもので、嬰兒を殺すことのみがその目的でないことは明かである。長子殺に至つては殆んど本流的の嬰兒殺とは正反對の現象で、習慣が組織的嬰兒殺を命じ、たゞ一人、あるひは二人の生存だけが許されるやうな場合にでも、その生活權を享有するものは多く長子である。（例へば南米印度人のムバヤ族では、末子だけを殘して、他は皆殺した。その結果、この一部族は全滅した）德川時代には日向では、「大方長子一人を擧げて其餘は擧げず。」（中井竹山「草茅危言」卷八）といふ有様であつたが、生活難から來る嬰兒殺は大體に於て一定數の子供を持てばその後を殺すのが通例である。例へばラダカ族では、母親は三人までは子供を持つ權利があるが、それ以上生れた時には自分の手で生埋にしなくてはならない。ボーラ族では女兒は皆殺すが、初生兒だけは育てる。兎に角長子だけを殺すといふのは傍流的嬰兒殺で、この問題の中心であるところの性慾と生存慾乃至性慾と社會制度の衝突から生じる嬰兒殺とはその性質を異にする。無論ある野蠻人の間では女が餘りに早く子供を持つために長子を殺すことはある。例へばオーストラリア土人は平均十二歳で母親になる。さうして子供は自然の許す限り生れる。そこで嬰兒殺となる。けれどもこの場合は長子だから殺されるのではなくて、不幸にも餘りに若い母親を持つたがために

殺されるのでなる。

一般から言つて、生活難の犧牲となる者は第一に女兒である。社會制度の犧牲となる者は、言ふ迄もなく私生兒である。先づ女兒殺から始めよう。

女兒の殺されるのは、生活難からばかりではない。蒙古のハッカ族では、この次に男の形で生れ變つて來させるために女兒を殺す。ギリシャやローマの頽廢期では、美しい女奴隷が澤山輸入されたので、手數をかけて女兒を育てることを嫌がつた。そのお蔭でギリシャ文化は崩壞し、ローマ帝國は分裂したとスザーランドは述べてゐる。印度人は女兒の誕生を祟りだと思ふ。貧乏と屈辱の豫徴だと思ふ。この觀念は印度人の社會生活に淵源するのだが、兎に角この觀念は女兒殺に導かれる。

生活難からの場合にも色々の種類がある。生活樣式から來るものもあれば、社會制度から來るものもある。例へばラーヂプト族では女の結婚費が高いから女を殺す。けれども女兒殺の主要動機は女兒が戰爭や食料蒐集やの能力が少いといふところにある。このことは低級な野蠻人の間にこの風習が一番盛んであることを見ても分る。無論野蠻人のこの風習は、自分の部落に餘り多くの女兒を置くと、他部族から襲擊せられる可能性が多いといふ懸念によつても助長されたらうが、大體に於ては生活樣式が女子を厄介物とするところから起つたのであらう。低級野蠻人の女兒殺はだから純經濟的の立場から行はれたものと見てよい。それが未開人に於て、文明人に於て、生活樣式や制度や道德觀念の變遷と共に、各異る理由の下に實行せられるその推移を見ることは興味のあることだが、それは後に述べる。

日本にもこの純經濟的立場からの女兒殺が廣く行はれてゐたらしい。例へば「百姓囊」の中に、「山家の土民、子を繁く產するもの初め一二人育てぬれば末は皆省くといひて殺すこと多し。殊に女子は大方殺すならはしの村里もありし。」とあるのを

考へるやうになる。さうして男兒殺といふ現象が生れる。しかし女子が經濟的に有能であつたのは、過去に於ては重に、あるひは、たゞ廣義に於ける賣淫制度の場合に限られてゐる。日本の貧民階級で女の生れるのを喜ぶのもこの一例である。賣買結婚制度の行はれてゐる社會では、男兒殺の行はれることが多い。例へば南米のアビポネス族では「母親は男兒よりも女兒を助ける場合が多い。何故ならば、息子が大きくなれば妻を購つてやらなくてはならないが、娘が年頃になれば賣ることが出來るから。」

私生兒が不幸な母親によつて闇の中に葬り去られる事實は餘りに明白だから此處で述べる必要はあるまい。たゞ女子にとつて最も殘酷な結婚制度を持つ印度の社會が、墮胎と嬰兒殺の淵叢であることを指摘すれば足りるだらう。またかかる犯罪を强制する社會に於ては、經濟的立場からではない女兒殺が一般に行はれ、「一人の女の子の姿も見ても見てもわかる。序に言へば、日本で嬰兒殺は一般に、殆んど罪の意識なしに行はれてゐた。墮胎は無論である。だから德川時代には人口が殖えなかつた。「草茅危言」には「邊土遠畜の窮民子を舉げざるもの夥し。　　俗習風をなして恬然として怪まず。」とあり「救條談話」には、禁洗子（殺兒のこと）といふ一項を、勸農桑、敦孝弟、息爭訟、尙節儉完賦稅、厚風俗の諸項に加へて民衆に訓へてゐるのを見ても、嬰兒殺の烈しさが想像せられる。墮胎の多かつたことは、回向院の水子塚には一萬人も埋めてある（國家醫學雜誌三九二號「日本に於ける惡習の古俗」）といふので明らかである。

女子は多くの場合經濟的に無能力だが、ある特殊の事情ある時には、男子よりも有能となる。例へば男子は生涯の半ばを邊塞の防備のために費さねばならんのに、美しい女子は後宮に召されて歌舞管絃に日を暮すといふやうな場合には、白樂天が巧に代言したやうに、民衆は女子の方を重しと

えない」やうな村落が隨所に發見せられるやうになるのは必然の勢である。（Umritsur 地方。Baspoor の村では 1867 年に男 100 人に就て、女 8 人より居なかつた。）

四　嬰兒殺の程度

以上で大體如何なる種類の嬰兒が殺されるかゞ分つた。各特殊の理由で特殊の嬰兒が殺される。けれども、前に述べたやうに嬰兒殺の志向は子供を持ちたくないといふのだから、二三の例外を除いては、男でも女でもそれに頓着なく兎に角子供の數を少くしたいのである。このことは子供の種類を識別することの出來ぬ墮胎の場合に最も明白だが、嬰兒殺の手段を採る場合でもこの心理が最も強く働いてゐることは無論である。そこである社會では子供を所有する限界數が出來て、それから後に生れたものはその種類に頓着なく、地上から葬り去るやうになる。それならば、嬰兒殺は如何なる程度に實行せられてゐるか。

「嬰兒殺は南北アメリカの土人の間に一般に行はれる。アビポネス族では二三人しか育てない。……ポリネシア土人の間ではそれは公然と組織的に良心の呵責もなく實行されてゐる。サンドウィツチ島では子供の三分の二が兩親の手で殺される。ライン島では一家族に四人だけが生存の機會を許される。ラダク族では四人目以上の子供は母親の手で生埋にせられる。エリス群島のバイタプ族では一家族に二人以上育てゝはならないと法律が命じてゐる。ソロモン族では殆んど全部の子供を殺して、餘り小さくない子供を他部族から買つてゐるところもある。アウストラリヤでは嬰兒殺は一般に行はれてゐる。こゝでは女は二男一女だけを育てる。こゝの法律では嬰兒殺は必要な實行だとされ、何かの事情でこれを無視する者は非難せられ罰せられる。……印度のトダス族では一八二〇年頃迄は一家族に一女だけが育てられた。コンド族でも女兒殺は全く知られてゐないことはないが、ボーラ族では長女の外の女兒は皆殺される。

：アフリカ大陸では特殊の場合の外行はれない。」(Westermarck : vol I. p. 396–398) 全部殺すところもある。例へばアフリカのヤガス族では自分の子供を全部殺して、他部族から十三四の男女を組織的に竊んで妻にしたり、戰士に仕上げたりする。

しかもこんな野蠻殘忍と見える行爲、親の愛情の閃光もない習慣は、必ずしも遠いアフリカの土人の話とは限らない。日本人もまた二の殘忍を敢てした。日向では嬰兒殺が烈しく、「國人少なき故、人買船といふもの往來して、上方を始め他國にて兒童を拐はし、盗みて日向に賣るに、その民幼孩を育てる世話なくてよしとて、爭つてこれを買ふことになつてあり、其幼成長の後鄕里を慕ひ歸らんとすれども、領主よりまた大禁を設け、關津を糺察して出さず」(草茅危言)といふ有樣であつた。

ギリシヤでは三分の一が殺されたといはれてゐる。ローマでは父權のやゝ衰へた時代に於ても尚第二番目の女兒以下を殺す權利を持つてゐた。支那の福建あたりでは子供の四分の一は殺される。英國の一士官はこの地方の海岸のある岩が嬰兒の死骸で覆はれ、その中にはまだ微かに息の通つてゐるものもあつたのを見たさうである。印度の嬰兒殺の程度は無論高い。

これらの事實が科學的正確さを持つてゐないことはいふまでもない。極めて粗雜な推斷だし、またそれ以上のことを許されない問題である。けれども少くとも野蠻人乃至未開人の間に、生存能力を持つ魂の殆んど半數が空しく闇黑の淵に沒し去ることだけは確實である。しかもそれらの母親はたゞこの殘酷な行爲を行はんがために、十ケ月の間その肉體と精神を浪費しなくてはならないのである。産んだ以上は育てるべきだといふやうな道德觀が實現せられるためには、餘りに大きい運命が人類を覆うてゐる。さうして、この運命の暗影は現代文明の光も照滅し得なかつたものである。子供が死んで生れたと聞いたとき「神樣、ありが

たうございます。」と叫んだ貧しい米國婦人の聲は餘りに悲痛ではないか。(Sanger: Care of Birth Control) また墮胎をし損つて自分の生命を失つても、世間の非難を蒙るよりもましだと考へる印度婦人の心情は餘りに眞劍ではないか。種々の理由から嬰兒殺が非難せられ、禁示せられ、强壓せられるやうになつても、その遂行を自分の生命を賭けて決心する勇氣——勇氣の何物であるかさへも知らぬか弱い婦人のこの勇氣は所謂「道德」の綱で繫縛するには餘りに力强いではないか。今や嬰兒殺は暗流となつて現代人の胸底を物凄く流れてゐる。現代人はその感情に於て、生活狀態に於て、生活手段に於て、ポリネシア人や印度土人などとは遙に隔絕してはゐるだらう。現代人は嬰兒殺の觀念に戰慄するかも知らん。けれども彼等は敢て墮胎を行ふ。現代人は炎天の下に原野や森林を漂泊しはしないだらう。けれども彼等は安い日給で十時間を工場に働かなくてはならないのである。若し彼等がカガス族の母親のやうに、長旅の邪魔にならぬやうに自分の子供を全部殺すだけの大膽さを持つてゐたならば、彼等は如何に助かつたことであらう。幸にして、あるひは不幸にして、彼等はそんな大膽さを持ち合せてゐない。さうして嬰兒殺は現代社會に消滅した。けれども彼等の「子供さへ無かつたならば」といふ嘆息は決して消滅したのではない。自分の志向を實現すべきあらゆる手段を奪はれて、蕭然として立つてゐるのが現代婦人の實相である。かうして、その生活手段の豐富さを誇る現代人は、この一事に於て、「自然のまゝ」といふ輕蔑して止まぬ場所に自己を壅塞し苦しみ惱み嘆息をつきながら、サンガー夫人の言葉をかりて言へば、次の文明のために悲劇を準備し、貧民窟をつくり、養育院を氣狂で滿たし、賣淫社會を補充し、裁判所と監獄とを繁忙にしてゐるのである。成程嬰兒殺の程度は低くなつた。その代り不自然な墮胎が流行した。墮胎の程度もま

た低められた。その代り人間が喘いでゐる。（私は嬰兒殺の減少を刑罰を伴ふ禁止の結果だと判斷するのではない。殺すべき理由の減少がその主因である。たゞ此處ではその理由が全然消滅したのではないのに、その手段が全然禁止せられてゐることを指摘したまでである。

五　嬰兒殺の人類學的分布

前に述べたやうに嬰兒殺の志向は人間文化の各階段を貫通してゐる。ただその理由がちがひ、志向實現の能力がちがひ、社會感情がちがふために、嬰兒殺の方法が多樣となり、その程度に高低が出來たのである。このことは嬰兒殺の考察に於て最も重要な點である。だから、ここでは如何なる文化階段に於て、如何なる方法による嬰兒殺が行はれ、それが文化の進行と共に如何に消長したかといふことを略敍しようと思ふ。しかし文化階段といふ以上はその定義が第一に必要だから、次にスザーランドに從つてそれも概括的に分類して見よう。（スザーランドは文化階段を、野蠻人、未開人、文明人、文化人に分ち、またその各を高中低に分つて、現代歐洲人を低文化人に達したものとしてゐる。）

A　野　蠻　人

食物は野生のもの、從つて小社會が散在する。

低

一〇──四〇人位の家族で漂泊する。
家はない。
衣服も殆んどない。

中

五〇──二〇〇人位の部族として漂泊する。
風よけを造る。
衣服の使用は知るが大抵は裸。
丸木舟、木石の武器。
社會組織はない。習慣が法律となる。

高

一〇〇──五〇〇人位の部族として漂泊する。
皮の天幕を造る。
衣服は前と同じ。
石、銅の武器。
階級の初期、酋長は絶對權を持つ。習慣法。

B 未開人

食物は一部分自然を利用して得るやうになる。

農、牧、工藝、科學の初期。

低

一〇〇〇——五〇〇〇人位の部族提携が出來る。

家の固定と村落の形成。

婦人の裸體は稀になる。

土器、立派な丸木船。

家の周圍に耕地。

商賣の初期。

個人力による階級と、習慣法による酋長政治。

中

一〇〇、〇〇〇人位、王の統治。

都市の形成——永久的家屋。

陶工、織工、金工が出來る。

商業の初期と貨幣の使用、階級の決定。

習慣法による政治。

高

五〇〇、〇〇〇人位、君主の統治。

石造家屋。

衣服は日常生活に必要となり、紡績が婦人の仕事になる。

鐵具の使用。

商業と貨幣の鑄造。

櫂による小船の使用。

文字の初期。

世襲階級と法律、分業が始まる。

C 文明人

食物その他の必需品は分業によつて得られるやうになり、從つて社會は複雜となり、相助を必要とする。科學工藝が盛んになる。

低

城壁に圍まれた都市。

戰爭は一階級の仕事となる。

文學の確立。

成文律が出來る。

裁判所の設置。

中

商業が盛んになる。

帆船の使用。

文字の使用と寫本の流布。

學的教育が始まる。

高

石造家屋が普通になる。

鋪道、運河、風車、水車等が出來る。

科學的の航海。

戰爭は一般の仕事となる。

文字の普及。

中央政府の確立と法典の作成。

（低）食物は容易に得られる。從つて精神的敎養に力が傾注せられるやうになる。印刷術が發達する。敎育は第一義務となる。身分は才能によつて決定せられる。代議制による立法。（スザーランドが觀念の發達に就て何事をも語つてゐないことを見落してはならない。）

一　嬰兒殺の考察一

嬰兒殺は人類の出現と共に始まつたものではないらしい。少くとも現存せる野蠻人よりの觀察から類推するならば、低野蠻人の間には殆んど嬰兒殺は行はれないし、行はれても例外的のものだけである。ブッシユマンやアンダマンは嬰兒の血で自分の手を汚すことはない。セイロン島のヴエダ族にもこの風習はない。中野蠻人であるホッテントットは母親が死んだときだけ嬰兒殺をやると言はれてゐる。マダガスカルは迷信で殺すだけである。

この中野蠻人に萠芽を發した嬰兒殺は高野蠻人に至つてだん〳〵一般的となり、組織的となる。嬰兒殺さうして低未開人に至つて高頂に達する。嬰兒殺の本場ともいふべき、アメリカ土人や印度土人や南太平洋土人、オウストラリヤ土人は多くこの兩階段の何れかに屬してゐる。同時にこの頃からは墮胎が、あるひは嬰兒殺の代用として、あるひはそれと平行して實行せられるやうになる。墮胎の最高潮に達するのは中あるひは高未開人に於てである。このことは古代ギリシヤ人に代表せられる。

この墮胎の文化の進化に伴ふ增加とは反對に、嬰兒殺の步合は中未開人あたりからだん〳〵下降して、文明人時代に至ると著しく減少する。さうして「文化人に至つてこの實行は終熄し、その記錄はただ人類進步の醜惡な一階段のものとして殘される」やうになる。但し嬰兒殺の終熄と墮胎の表面的停止とに拘らず、文化人の間に產兒制限の聲が高く響き渡り、古風な道德觀や宗敎觀から來る反對の聲も、現代の人心を最も强く捕へてゐる愛國心への國家的打算からの訴へも、この人間の衷心に反響する聲を壓倒し去ることは出來ないやう

に見える。かうして「子供を持ちたくない」志向の波動は高野蠻人に於て嬰兒殺として高まり、高未開人に於て墮胎として高まり、今や低文化人に於て第三のうねりを造らうとしてゐる。造らうとしてゐるばかりではない。既倒の狂瀾の趣さへもある。この人間生活の中心を横流奔馳するのが、あらゆる間隙を窺うて氾濫する實狀を觀察するならば、「捨子捨馬死罪の法」を立てて、「斯樣に手緊しくありては締らぬといふことあるまじきなり」（肥後物話）といつて見たり、嬰兒殺はその嬰兒を永劫の地獄に陥れると說敎して見たところが、大河を隻手で支へる位の效力よりないことは明瞭にならう。無論捨子死罪の法を立てるならば、「只今にては決して捨てるものなし」といふ狀態には一時なるだらう。さうして、この文化頃の肥後の狀態が多少その程度を異にして現代日本の狀態でもある。けれどもそれが道德であつても法律であつても、一個の獨斷から發展した理論によつて、嬰兒殺の志向が絶滅しなかつたことは事實の實證するところである。志向の存するところに手段が存する。あらゆる手段が奪ひ去られて、人が宗敎家の說敎を待たずして、最高の克己と殉難を敢てするやうになつたとき、解放の叫びとその實行があらゆる非難と壓迫のただ中に現はれる。さうでなければ、直接墮胎や產兒制限の形をとらず、例へば社會不安といふやうな漠然とした相で現はれる。さうして、一時代の嬰兒殺は（廣義にとつて）それを實行せしめる理由が消滅するやうな事情の生ずるまでは續く。若し禁壓されたならば、人は極度の善行者となり得たのである。

（私はかういふことによつて嬰兒殺を無條件に承認するのではない。ギリシャやローマ末期の嬰兒殺の理由が善いとは思はない。ただ事實としてその時代の惡習が止むためには、女奴隷や女冒險家が活動する餘地を失ふまでに、その時代の富力や權力が失墜するか、又は人心が緊張するを要す

るといふだけである。かう言へば道德至上主義者は直に、その人心緊張の爲に道德と宗敎とが必要だといふだらう。その通りである。私はそれに反對しようとは思はない。私は道德的主張は不必要だといふまでに實生活萬能主義にはなれない。ただ問題は、人心の緊張とは何を意味するかといふ一點にある。既成道德を遵奉することが人心緊張の證據であるか、それとも、「子供を持ちたくない」志向が先天的に惡であるから、その惡からの離脱は人心緊張を意味するのであるか。これらは後の問題だが、兎に角、實際生活から生ずる嬰兒殺の理由が、獨斷的な道德的理由よりもより力強く動いてゐることは事實である。私は茲で思想や感情の純化深化を輕蔑したのではない。單に禁壓や說敎が嬰兒殺の志向を消滅さし得ると考へるならば、事實はそれに反駁するだらうといふだけである。さうして、經世的道德家はこのことを充分知つてゐた。「貧しさの怖れのために汝等の子を屠る勿れ。われ彼等に食を與へん。嬰兒殺は大いなる罪なればなり。」(コーラン)

六　嬰兒殺に對する社會の態度

議論が道德のことに及んだから、ここでは(嬰兒殺(廣義に於ける)に對する社會の態度に就て述べて見よう。生活意識が社會組織から生ずるかどうかといふ問題は別として、單純に嬰兒殺が如何に是認せられ、奬勵せられ、命令せられ、また非難せられ、禁壓せられ、罰せられたかといふことだけを略敍する。

マックレナンは嬰兒殺の始まりを想像してかう描いてゐる。「長旅(漂泊)の途中で生れた子供は多く殺されるだらう。こんな場合、衰弱した母親は喜んでその子を連れて行くだらうが、皆に遲れ勝になるとその子供を捨ててしまへとの命令を聽くやうになる。」(McLennan: Studies of Ancient History. p. 81.) これは事實ありさうな想像である。若しこの場合、彼の屬する社會がこれを批評する

ならば、この社會は嬰兒殺を是認するだらう。漂泊の生活はこれを非難するやうな何等の論據をも提供し得ないだらうから。嬰兒殺を生存の絶對的必要條件とする社會は一般に嬰兒殺を是認する。それぱかりではなく、ある場合には義務として强いられる。オーストラリアのある種族では、嬰兒殺をやらなければ罰せられることは前に述べた。子供所有の限界を法律や習慣で決定してゐるところはいふまでもあるまい。

この最もよい例はアリゾナのピマス族である。ここでは生活難から行ふ嬰兒殺には罪がないとせられてゐる。このことは、現代の歐洲で未婚の女子の墮胎や殺兒には罪がないと考へられてゐるのと、その理由は違ふが、論理に於ては類似してゐる。單純で率直な物の考へ方は文化階段を超越してゐるやうに見える。

この是認の理由が忘れられて、「嬰兒殺は是認すべし」といふ命令が無批判に受け取られるやうになると、(さうしてこのことは何時の世にも絶えないことだが)今度は嬰兒殺を實行しないものは利己主義者のやうに見えて來る。例へば日向では「若し二三人もあれば未練なりと笑ふ。」(草茅危言)オーストラリア土人の間では、「婦人は三四人以上も子供を持つて部族に重荷を負はすのは惡いことで、普通以上に母の愛情を滿足さすことは利己の證據と考へるやうに育て上げられる。」(Sutherland: vol. i. p. 115.) この例などは多少社會的見地から嬰兒殺を考へたのだが、これが最も明白に意識せられ且つ主張せられたのは言ふまでもなくギリシャ、ローマである。この時代の思想家たちはオーストラリア土人の思想家たちの今日主義の見解とは違ひ、優生學的には見てゐるが、少くとも、社會のために嬰兒殺を是認し奬勵する點は同一である。(但し、若し民衆の間にこの風習がなかつたならば、彼等はこんな大膽な立論を堂々となし得たかどうかといふことを想像するのは興味あるこ

とだが、私は何とも答へることは出來ない。）犠牲に就ての社會感情は別に述べる必要はないと思ふ。

この是認と關聯して考へられることは、子供に對する親の權利の觀念である。（Westermark vol. i. p. 597-628.）親は子供を所有してゐる、子供は親の勝手になるといふ觀念から人類が離脱したのは餘り遠い過去ではない。主君のためにはわが子の生命をも惜まぬのが忠臣であり、勇婦であるといふ考へは講談や淨瑠璃を少し讀めば分る話である。この觀念は種々の要素から形成せられてゐるだらうが、家族制度あるひは結婚制度がその主たるものであらう。これらは後に考察するつもりだが、兎に角、子供は親の所有品だと考へられてゐたことは、あるひは、今も尚考へられてゐることは事實である。そこで子供の生死與奪の權は親——特に父親の手に握られることになる。大家族制度の支那などではそれは最も多く家長の權となる。かうして、支那では『彼は子供を殺し、賣り、存分に使つても構はない。この無上權を妨げるものは、『若し、父、母、父系の祖父母が我儘な子供を殘酷に折檻して死に至らしめたときは、その關係者は一百の笞刑に處せられる』といふ法律だけである。』（Douglas: Society in China.）しかもこの法律さへも實行せられてゐない。ローマの家族制度に於ける家長の絶對權は言ふまでもあるまい。ゲルマン人の間でも、父は生れた子供を育つべきか葬るべきかを決定する權利を持つてゐた。かうして、親の權利の見地から觀察すれば、嬰兒殺は權利の正當な行使（權利の濫用が非難せられることは無論である）であり、從つてそれは是認せられる。（逆にこの親の權利の觀念は必要な嬰兒殺から生じたと推論出來ないこともないが、これは最も一般的な事情、「我」のある種の考へ方に根據を持つと見るのが妥當であらう。）

然し子供の無制限の殺戮は權利の濫用である。

これに親の愛情も手傳つて、嬰兒殺の權利に期限がつけられ、期限經過後の嬰兒殺は非難せられるやうになる。例へばある北米印度人の間では一ヶ月以上母の乳を飲んだ子供を殺してはならない。ギリシヤでは一度育てかけたものを棄てるのは罪惡だとする。大抵の場合、嬰兒殺はその出生の瞬間に行はれるもので、父親が暫く躊躇するか、母親が乳を飲ますかすれば育てあげられ愛撫せられるのが通例である。さうして、親の愛情の見られないやうな行爲の非難せられるのは自然のことではないか。羞恥や悔恨や恐怖の感なしに嬰兒殺を行ふ南太平洋諸島の土人やアメリカの印度人にこのことのあるのは意味深いことではないか。嬰兒殺に於ける最も本質的なるもの、性慾と生存慾と親の愛情の三つが最も鮮かに姿を現はしてゐる。

　墮胎が一般に未開人の間に非難の的とならなかつた理由は、この親の愛情の點に求めらるべきではあるまいか。例へば嬰兒殺を全然知らないサモア族や殆んどやらないダコタ族などでも墮胎は平氣で行ふ。(ある北米印度土人などは墮胎を罪だと考へるから一概には言へないが、大體の傾向としては墮胎は嬰兒殺のやうには非難せられない。)インドに於てもアラビアに於ても、ペルシヤ、トルコに於ても、世間は墮胎に對して沈默してゐる。日本でも一般に墮胎は罪惡とは思はれてゐなかつたらしい。德川時代にも正保三年の墮胎禁止令の出るまではこの風習に無關心であつたらしい。

　ギリシヤ、ローマでは墮胎は無論是認せられた。キリスト敎會がこれを禁じた理由は道德的感情とは全然緣のない敎義によるのであつて、そのことは胎兒は人と認むべきか、あるひは受胎後どの位の日數が經過したときに人と認むべきかといふやうなことを議論したのを見ても分る。彼等は「規則」を盾にとつて道德を決定したに過ぎない。

　かう考へて來ると、「親の身として子を殺すこと言語道斷の惡事なり」といふことが、嬰兒殺の非

難せられる第一理由らしい。さればこそ、犠牲としての殺兒を讃美したユダヤ人の神はただの嬰兒殺を憎んで、犯人の首に三日間その死骸を縛りつけて置くことを命じたのであらう。けれども、この犠牲のためには、「親の身でありながら嬰兒殺の許されるところに人間の悲しい運命がその片鱗を現してゐる。野蠻人に於ける嬰兒殺の是認は概してこの犠牲の是認に外ならぬ。さうして、生活手段が豊富になるに從つて嬰兒殺に於ける犠牲の色彩が漸退するのは自然のことで、その反對に、「常に饑餓に瀕してゐる野蠻人の間にあつては有利であつたところの嬰兒殺は文化の進歩と共に不利となる。」(Sutherland: p. 135.) 何故ならば、「その土地に人多くなりなば、自らその國益となるは大なること」(草茅危言)であるから。かうして、一面の嬰兒殺の是認も非難も、感情の點からではなくて功利的見地からなされてゐる事實は覆ふべくもない。だから、その土地に人が多くなれば、個人の幸福は破壊されるやうな社會狀態が出現すれば、嬰兒殺は如何なる形に於てか(何故ならば、一社會は他の社會と全然同一の生活意識を持つことは不可能であり、從つて、嬰兒殺を必要とする一原因が同一だからといつて、多くの他の要素を含む嬰兒殺を同一の形で實行することは出來ないから)提唱せられるだらう。さうして、そのことがまた犠牲的精神の發露だといはれるやうになるだらう。もつと突きこんで言へば、嘗つて人間行爲に對する社會の態度の一つも純粹に愛情の點から決定せられたことはない。愛情は常に功利によつて濁され蹂躙されてゐる。嬰兒殺の非難が、それを犠牲と呼ぶ必要のなくなつたまでに、生活手段の豊富になつた時代に力を有するやうになつたのはこのことの一例證となる。

けれども、嬰兒殺の非難の基調をなすものは何といつても親の愛情である。まだ生命神聖の觀念の芽生えてゐない野蠻人の間に、既に低調ではあ

し洗禮せずに死ぬならば、それは永劫に天國から放逐せられ、地獄の深淵に投げ込まれる運命にあると彼は教へる。嬰兒の生命の價値と神聖さの感を吾人がこの教義から大なる程度に於て得たといふことはあり得べきことである……。」(Lecky: p. 23-24.) この獨斷的教義から生命神聖の感情の流れ出たのは一種の不思議といつてもよからう。何故なら教會は生命は神聖だから嬰兒殺や墮胎を禁じたのではなく、ただ「人は洗禮してから死ななくてはいけない」と教へたに外ならないから。教會がその教義の宣傳のためには想像し得る限りの手段を用ひたことは「恐らく絶望のために子供を殺した不幸な母親」を如何に殘酷に罰したかといふことを見れば分る。「バレンチニアン一世は嬰兒殺を死罪相當だとした。ルーデュノアの慣例(Contume de Londunois)によれば子供を殺した母親は燒き殺された。獨逸と瑞西に於ては彼女は棒でつき刺されて生埋にせられた。」(Wertennale: i.p. 412.) 獨逸のある地方では、母親は袋の中へ蛇と一緒に入れられて河へ流された。しかし兎に角この殘虐の間から、人は生命は神聖だと感じ出してゐるとしてもこの非難の起つてゐることは注意すべきである。ブラックフィート族では子供を殺した婦人は死んでから幸福の山には登れないで、脚に木の枝を縛りつけられたまま、罪の座の周圍を彷徨せねばならぬと信じられてゐるが、これなどは恐らく親が自分の子を殺す時の實感から來てゐるのであらう。その實感が、習慣や思想や感情やによつてあるひは稀薄に、あるひは濃厚にせられて、嬰兒殺の是認や非難となるのであらう。これを稀薄にするものに就ては既に述べた。これを濃厚にするものは先づ生命神聖の觀念である。

レッキイはその著「歐洲道德史」(Lecky: History of European Morals.)に於て、キリスト教が生命神聖の感じを人心に植ゑつけたことを力說してゐる。「異教徒には、嬰兒殺や墮胎が罰せられる場合にも、この罪は些細なことのやうに考へられる。何故ならばその犧牲者はつまらぬもので、その苦痛は輕いやうに見えるから　。しかしながら神學者にとつてはこの嬰兒の生命は重要な意味を持つてゐる。胎兒が生命を持つた瞬間それは永遠の存在物となり、アダムの罪を擔ふものであり、若

來た。さうしてこのことが嬰兒殺の減少に與つて力あることは誰も否定しないであらう。

　嬰兒殺を殺人と同じ範疇に入れての非難に就てはここに述べる必要はあるまい。「罪なき人を殺すことは天の惡み給ふが故に天に代りて上樣より賞罰を行ひ給ふなり」（教條談話）といふ一句が完全にこの非難を代表する。さて、罪とは何であるかといふことがここの問題になるのだが、それは事實の觀察の範圍外であるから暫く問はずに置く。ただ注意すべきことは、一方このいはば一元的の考へ方が法典や敎義に具體化されてゐるのに反して、民衆は實生活に卽して物を考へてゐることである。支那や印度で經典や法律がこれを禁止しても、輿論はこれを是認してゐるのはこの好例である。若しウィルキンスの「近代印度敎」の中の「寡婦」の一章を讀むならば、人はこの國に於ける嬰兒殺や墮胎の止むべからざることを悟るだらう。又十九世紀以後の歐洲では、未婚婦人の殺兒や墮胎が殺人と同一範疇に入れて考へられてゐないことを思ひ起すならば、そこに何物かを見出すだらう。

　尙捨子はその志向に於ては嬰兒殺と同一だが、親の心持や、その結果に於ては異る場合がある。エスキモー人が嬰兒を雪の中に捨てるのはその生命の永續を豫期してゐないが、ローマ人が神殿の入口に捨子する時は、親は子の救はれることを豫期してゐるし、又この豫期は大抵實現せられた。

　序に一言すれば、日本に昔から捨子のあつたことは、養老年間に悲田院の建てられたことでも分る。平安朝時代にも「京中諸人、捨男兒於道路、遂爲犬馬害喫」（政治要略十七）とあるので大體想像がつく。德川時代になつても捨子は盛んに行はれた。而も「捨てる時さへ見付けられざれば、跡にて詮議も咎も無」かつた。捨子死罪の法などは例外で、大抵は「急度叱り置かるべし。」（落穗集）位の處であつたらしい。元祿十五年に捨子禁止の觸書が出たが、恐らく效果はなかつたらう。捨子は居村へ下すといふ法令を出して一時捨て止んだといふ話もあるが、この法令もすぐ行はれなくなつた。

殺人女教員の心理

根岸病院醫局　佐藤政治

私は今日中村さんからのお話で、殺人女教員の心理に就いて申し上げます。皆様も既に御承知の如く、一時世を騒がした郡視學殺しの女教員に就いて、私の病院へ一寸入院してゐました時臨牀的に見た模樣を座談的に申し上げたいと存じます。之に就いては色々鑑定その他の專門の方が批判研究し、既に纏つた報告を御承知の方もありませうが、それは難かしくも成りますから、ここでは患者から親しく聽き取つた一片の顚末を話したいと思ひます。

患者はT・Yといつて五十六歳の女、本人の言に依れば一向大した遺傳もありませんが、係りの辯護士の調べたところに依りますと、患者には十二人の兄第があつて、内六人は死亡し、六人現存、妹が發作的に精神に異常を來すことあつて遂に濠に身を投じて死にました。それから患者の父系祖父の實弟の子に精神病がありました。また患者の伯父の子も精神病者であつたと申します。それが若し本當とすれば、可成り濃厚な素質があると見ていい。患者の生れは佐賀縣で、その當時は可成り相當な遺產もあつて、暮らしもよかつたのでありました。父親が少しお坊ちやん育ちで、家計などはやれず、商法か何かで失敗して零落しました。しかし、酒も飲まず、精神病的な樣子もあり

ませんでした。母親は勝氣で始終爭ひ、夫婦喧嘩が絶えません。父親は患者を可愛がるけれど、母親は反對に虐めますので、家庭が巧く參りません。それで、患者は年頃に成つて嫁にでも行く場合、家庭を持つことが斯うも苦しいものかと感じ、他へ行くまいと斷念しました。ところで、患者は至つて醜婦で、丈は四尺二三寸位、色黑く、髮も少く、斜視で眼が釣り上つて、嫁に行きたくても緣が遠いかも知れません。母親に似て强情、勝氣、思ひ立つたことはたとひ反對があつても何處までもやらねば不安心でならない。患者は男のやうだと言はれて來ました。

　學校の成績はよく、殊に記憶がすぐれ、小學校だけで止めて、後は家政の手傳ひをしてゐましたが、益々父親などの爭ひが不愉快に成り、家にゐるのが厭に成り、母方の伯母を賴つて出京したのが二十三の時でありました。それから、方々見習奉公したり、內職したりしてゐましたが、小學教員を希望し、苦學十年の後、準教員養成所を卒業し、區內へ奉職しました。そして、今日まで勤勉に一生懸命勤務しました。しかし、段々小學教員も準教員だけでは行かず、正教員の必要を熟々感じ、數學や理科やその他六七科目皆受驗して、益々努力しました。そして、裁縫科だけの資格を得たのです。

　明治四十二年、患者は郡部の小學校へ奉職しました。その夏、郡全體の小學校製作品展覽會が行はれました。患者はやつと裁縫の正教員の免狀を受けただけでしたから辭退しましたが、その學校に一緒に奉職してゐた花村といふ女教員が厭だといふのに無理に出せと言つて、生徒の粗末に出來たまづいやうなものに患者の名を附して陳列しました。そして、一寸も知らないでゐるとそれを秘密に敎へて吳れた者があります。患者の名が生徒の製作品に附いて並んでありました。誰の仕業かと調べますと、花村がやつたことと分つて之を責

田中香涯先生新著　（四六版總布裝函入）

忽五版

夫婦の性的生活

紙數二五〇頁
定價金貳圓
書留送料拾五錢

著者自序――人生享樂の第一義は家庭の圓滿にある。倫理學者及び道學先生等には之に就いて種々なる意見もあらうが、私は醫人としての立場から觀て、夫婦間に於ける性的生活の調和及び合理化をば家庭の平和圓滿の基調と認むる者であるから、這般の見解の大要を起草して曩に『變態心理』誌上に公にしたものに、多大の增訂を加へて再び世に公にすることゝ成つた。一般世人を相手にして論述したものである故、專門的學理に關する所見は成るべく控へ目となし、通俗的なることを主眼とした。幸ひに之に依つて幾分なりとも家庭の平和圓滿に貢することを得ば、實に望外の光榮である。

――（目次一斑）――

東京品川
御殿山

日本精神醫學會

振替東京三一七一七
電話高輪一〇四三番

めたところ、花村は皆の前で泣いて申譯ないと言ひました。患者は猛烈に追究し之を校長になぢりますと、校長は好い加減に胡麻化して花村を叱責せずに、却つて大人げなしと患者を叱りました。患者は腑に落ちないと思つてゐました。

それから間も無い秋の頃、患者は校長の家の直ぐ近くに下宿してゐたので、校長の奥さんと懇意に成りました。その奥さんが實家へ行く用事が出來て、子供ばかりであるから患者に時々留守の見廻りを乞ひました。患者はそれに應じて見廻りに行きました。すると、校長の部屋に花村が一緒にゐて妙なことを見ました。それで、始めて患者は校長の態度や、新參の人よりも患者の名札が下の位置に置かれてあつたり、始終虐待の傾向のあるのを漸く覺りました。

かやうなことを見てからは、患者は學校にはゐたいが、ゐては却つて兩方のためによくないと思つてゐますと、案の條翌年六月、隣の學校へ轉任させられました。その方が患者も結局いいと思ひましたが、校長の奥さんが頻りに遊びに來いと言ふ中に、校長と女教員花村との間が村中に知れ渡つて、色んなビラが貼られたり、色んな評判が仲々やかましい。ところが、これは皆患者が奥さんに告げたり、村の者に言ひ觸らしたりしたと取つて恨まれました。仕舞には花村もその學校にはゐるにゐられず逃げ出しますと、校長がそれを停車場へ追ひ掛け、どうするかうするといふやうな大騷ぎでありました。そして、手紙の交換も盛んに行はれ、校長の家の便所にあつたのを拾つて裏打ちして、患者は役場などへ持つて行きました。それから、そんな評判が立つたので、校長もゐられなくなつたかどうか分りませんが、視學に轉じました。その當時患者はそのままその學校に勤務しました。

それから、府令が變り、今迄の正教員ならぬ者は履歴書を出すことと成りました。患者も資格が

よからず早速履歴書を出しましたが、それがどういふものか届くところへ届かず、いゝことと思つてゐますと、突然紛失して居りました。翌年六月それが分り、その七月限り資格がなくなりました。それは皆校長のはからひであつたといふやうに患者は思つてゐます。それから、患者は職に離れましたが、自分の手續上に遺憾が無いのに斯う成つたと楯に取り憤慨に堪へず、しかし理窟を云はず職さへあればよいと郡内の學校を廻りましたが、何處でも患者を使つて呉れません。それで、郡長の自宅を訪問して、困るからどうか使つて欲しいと頼みました。それならば視學に頼めと敎へられ、郡長の紹介で暫く待つてゐるやうにといふことに成り、漸く代用敎員として雇はれることに成りました。これで患者は先づ安心しましたが、それが大正元年十二月のことで、翌二年三月限り何の豫告もなしに解職されました。それで、患者はまた郡長に頼みました。そして、最後に紹介された視學が、今度殺された荒井であります。それは前の女敎員と關係した校長とは同窓同期の人で、荒井といふ人に直接恩恨はありません。唯同窓同期で、自分を恨んだ校長から色んな事を云はれて、頼まれて自分を苦しめるであらうと考へました。

患者は大正三年頃、北多摩郡の山奥の小學校へ行きました。その時は無理矢理に雇はれたやうなもので、大抵の要求には應ずる決心でありましたが、山奥のことゝて、第一泊る所もありません。百姓家を聞いて見ますと、疊がない。學校の附近などと贅澤も言へず、一里半ばかりある山の頂上に一軒の古寺があり、そこにゐたらといふので仕方なくそこへ泊ることにしました。ある日、校長があの寺には巡査の夫婦がゐたが、一週間ばかりで妖怪が出てゐられなかつた、また一月もゐた人があるが、あなたは何ともないかと尋ねました。聞かない間は平氣でしたが、さてそれを聞いてからは氣味惡く感じました。患者は平常獨身者で始

終懐劍を持つてゐました。妖怪の話を聞いてからは懐劍を握つて夜を待ちましたが、案の條十時頃に成りますと、しんとして物音一つありません。唯鳥の鳴く聲ばかりです。段々夜が更けますと、誰も來る筈のないのに足音がします。そして、何の斷りもなしに家の中へ入つて來た者がありました。患者は日頃懐劍を逆手に持つて寢てゐました。患者は覺悟をきはめて待つてゐました。すると、何の遠慮なくすつと戸が明きました。ランプは一つついてゐました。そこへ非常に大きな男が入つて來ましたから、懐劍を拔いて無禮者と向ひましたが、男はにや／＼笑つて驚きません。患者は閉口して夢中で飛び掛りました。そんなに驚かなくてもよい、下の村の者だ、一人で寂しからう、泊りに來た、騒がずとも好からうと男は云ひましたが、それは村の道樂者でありました。患者はそれを校長に話しますと、それは村の薄馬鹿で、本當の化物は別にをると答へました。雨の降る晩、寺のこと故高い欄干があり、そこへざあ゙／＼といふ音がします。始めはざあ゙ばたがひどくなり、影がちら／＼障子に映ります。それは蜘蛛のやうな影であります。きつ／＼と音がします。自分から戸を明けて振向きますと、大きな蝙蝠でありました。妖怪恐るるに足らず、氣味惡いこともないと悟り、校長に又もその話をしますと、校長は非常に豪膽でえらいと患者を褒めました。これは本人の性格を語るある點であります。

その他患者から聽いた話ですが、患者が何處の村の學校へ行つても、理由なく虐待され、ある時などは村の有志が患者を排斥するに盡力し、受持の生徒を途中に擁して學校へやらず、或は外から石を投げるとか、色々なことをしてその授業を妨げました。またある時は、村へ轉任しますと、宿がやはり無い。ある役場では特別に無理に部屋を明けて下宿させました。そこはお神さんの亡くなつた巡査の家でごく狹い。ところが、二三日は好

いが、巡査が酒など飲んで冗談を言ひ、寝所へ忍び込み、またそんな時に限つて村の人が入つて來たり、子供が入つて來たりします。それが村中に傳はりました。それ以來、視學から貴方は他人のことをかれこれ云ふが、こんな話が現にある、昨晩もそんなことがあつたと云ふぢやないかと責められました。患者は皆一貫して、視學が教員や校長や村の有志と關聯して自分を陷れてゐると考へてゐます。こんなことは假に患者が云ふやうに、同僚から虐待されるのは本人に何か特別な性質や具合の悪い點があつたものと思はれます。

愈々視學を殺すことに成つたのは大正五年四月であります。教職からは離れ、どうしても小學教員になりたい、兒童のため天職を盡したい。それで大正八年五月に又無理に頼んで、ある小學校に代用教員に入りました。郡視學といふのも患者に何か摑まれて、厭々ながらあそこへ行つて見ろといふやうな譯で、そこに又長くゐて貰つては困るといふことが何遍か繰返されました。それで、患者もどうしてもあの視學がゐては自分は教員が出來ないと考へました。

患者は最後に如何なる理由で虐待するか、職業を邪魔するか談判しようと、大正九年四月に視學の私宅を王子に訪問しました。當時の決心は、それまでに非常に生活逼迫し、且つそればかりではなく、成りたくも小學教員に成れぬ苦しみに惱んで、思ひつまつて訪問したといふわけであります。視學は快く會つて呉れて要領を得ました。その後二三遍訪ねましたが、また來いで追ひ拂はれました。四月二三日にも行きましたが、外出してゐません。一週間位寝ず、三日食を攝らず、視學の近所の百姓家の物置に寝ました。二十一日の朝行きましたら、今晩夕方まで歸らないとのことでした。で、患者は玄關の右の方にへと／＼に成つて待つてゐました。患者は長く眠らず食はず衰弱してゐました。夕方になると、視學が歸つて來る

刻限に便所を借りて入つたら、その出合頭に視學は歸つて來ました。その時には物をも言はず、視學の横腹を衝いて一緒に倒れました。

で、近所の警官の厄介になりますと具合が惡いので、小石川の警察へ自首しました。それから、ある時は視學が歸つて會つたことだけ患者ははつきり覺え、後は何も知りません。十二日目に牢屋で新聞を見て段々自分が視學を殺したといふことが節々思ひ合はされ、始めて自分がやつたかと氣が付いたとも云ひます。恐らくそれが本當でありませう。身體も疲勞し、興奮の頂上に達し、その順序を知るなどゝいふことは、患者の精神上の程度では出來なささうに思はれます。冷靜にその晩のことを間違ひなく記憶するなどといふことは仲々出來ない。むしろ思ひ切つてやつたやうな事柄は、普通の精神狀態の場合には覺えて居られぬと想像されます。患者も後で新聞など見てから氣が付いたことと思ひます。

これは鑑定が色々になり、ある人の鑑定では精神耗弱者と成つて居ります。第二審に依りますと心神喪失の狀態で無罪であります。その程度は難かしいが、廣く云へば變質性の精神病で、强情で反省心なく、感情を抑へるなどといふことが無いから、衝動的に行動するといふ性質の患者でありませう。しかし、その當時は大分恐れられて側へでも寄れば誰でも殺されるかと思はれましたが、正直な、子供みたいな、その點はごく好い女教員なので、精神鑑定上からは難しいが、精神耗弱として罰せずに、精神喪失として無罪と成つたのは、好い判決であります。病院でも强情で、看護人の云ふことをきかずに言ひ張ります。言葉は丁寧で亂暴もしませんが、その强情振が大概二度と相手に成るのも厭に成る程であります　あんな調子で自分の主張を述べたら、大概厭にも成らうかと思ひます。以上、まとまらぬことを申しあげました。

（文責在記者）　——變態心理講話會に於て——

懸賞應募

嘘のいろ〳〵

――嘘のいろいろ――

□

京橋　山野井織治

朝から晩まで嘘でかためて世を渡るずるい八右衛門、其名は誰知らぬ者ない程でもいつも甘々騙される人の氣が知れない。そこに何か秘術があるだらう。

私が幼い時のことであつた。此の八右衛門何用あつたか、牛を追うて隣村に行つた。時正に二時、空腹でやり切れない。例の芝居氣が心に浮んだ。忽ち路傍に倒れて、急造的腹痛を起した。如何にも堪へ難く、呻吟苦悶、見るも憐れの有樣。通りがゝりの人が氣の毒に思つて、早速我が家に同行した。さうして、水よ薬よと介抱したが、却つて痛みを増すばかり、これでは致し方がない。直ぐ樣醫者を迎へに行かうとするを、

「しばらく待つて下さい。今に治るでしよう。私は元來お腹が空になると腹痛を起こすやうです。いつもかゝりつけのお醫者もさう診斷して居ります。其時は必ず滿腹にすべしと注意を受けて居ります。今日も或は其爲めかも知れません。御高情の序、失禮ですが、何卒一椀だけなりと頂いて見ませう」と八右衛門息もきれ〳〵に話せば、こは容易の治療法、早速差上げようと、進めらるゝまゝ四五杯平げたと思ふ間に、痛みは去つて跡方もない。

「おかげ樣で全快しました。何れ其内改めて御禮にまゐります」と辭し歸る。其途中牛はと見れば、路傍の豆畑で豆を大牛喰ひ盡して居た。八右衛門牛に向つて曰く、「我れもよし、汝もよし」と。

其後上總の或る地方に旅行した。其土地で盛んに大きな物を并べて自慢話をして居るのを聞き、如何にも殘念だ、我も仲間入させて吳れと語り出したのは、我が〇〇の里には古いお寺がある。そこに大きな藤がある。九里八町亙つて居る。若し見物なさるなら案内して上げようと約束した。其翌日大勢して見物に參つた。よしとばかり、お寺に案内して、此の藤だと云へば、見物の人大いに怒つた。八右衛門、

「よく御覧下さい。私の云ふ通り庫裡から八疊に亙つて居るではありませんか。」

其後又或るけちん坊の家の前を通り掛つた所、不圖栗のイガの捨てあるを發見した。早速かけ込み、

「お宅では、あのイガを深山へなぜお捨てになりました。勿體ない」と云へば、其家の人はなぜにと聞いた。八右衛門爰ぞと許り、

「これは田の肥料に至極よろしい」と誠しやかに云へば、日頃のけちん坊、

「それは君に上げる所でない、私の田に入れます」と云ふ。八右衛門それでは止むを得ませぬと立ち歸つた。後で聞けば、田の中に入れは入れたが三年越腐らず、田には跣足で入られず殆んど閉口したと云ふことで、八右衛門態々其家を訪れ、

『其儘では定めてお困りでしよう。私は其の儘とも何とも云ひません。實は燒いて灰にして入れるのでした』と云つた。

□

大阪　佐藤秋溪

私の子供の時分村に嘘文と云ふ嘘つきの名人があつた。名から嘘文と呼ばるゝから誰も其の言を信ずる筈はないのに、巧妙にだますのでつい〳〵引かゝるのである。

『おい小供今京ヶ野で女の首縊りがあつた鼻洟を垂らして眞青な顏して、一本松の枝に掛つて居た。それあの通り皆が見に行くではないか』と折柄他の事で急ぎ行く通行人でもあれば、それに結び付けて全く事實らしく云ふので、子供等のみならず、大人も到頭半信半疑で行つて見たくなる。行つて見れば何の事もなし、再び彼の言には乘らぬぞと思つて居ると、次には全くの事實であることを故ら變な顏つきで告げるので例の嘘であらうと取合はず忽諸に附して置くと、そればかりは嘘でなく事實であつた事が後に分つて、時としては重要な事件で期を失して取返しのつかぬ事さへあつても、彼は其の事件には眞實を告げたのであるから、彼を責める途がなく、大なる迷惑をするやうな事が往々あつた。こんな時には嘘文は大得意でうまく欺き得たのを自慢顏して居た。彼は益々嘘が面白くなり、遂には子供や他人を欺く位では飽き足らず、眞面目な顏で隣人をだまし、終に自分の妻子をだまして喜んで居た。

嘘文の長男が徴兵適齢で檢査を受ける事となつた折柄、日清戰爭後で村にも戰死者もあつた後なので、其の母は何とかして免れさせたいと祈念して居たが、抽籤の結果外れて現役を免れたのであつたが、一つ家内を欺き驚かしてやらうと嘘文は戸口から妻に向つて芝居もどきに、

『女房喜べ、伜はお役に立つたはやい』と云つて歸つて來た。一家は其の當籤入營を信じ、今更憂慮悲歎に暮れ居たが、間もなく事實は分り、全く主人の惡戲と知れて、一家の悲劇は喜劇と變つた。此の例のやうな事が屢あつた。今は彼死して既に二十餘年になる。

□

和歌山　YW生

私はある日田舍を散歩した。不圖雨に會つたので附近の百姓屋の軒端によつた。家の中で百姓が二人話してゐるのを聞いた。

『ふつて來た。』

『えゝあんばいぢや。』

『ほんとに好い天氣じや。』

嘘を眞面目くさつて話してゐる。どうしたのかしらと私は思つた。けれども直ぐ私は悟つた。この會話は百姓には嘘でない。心から出た本當だ。私にとつては、少くとも今の自分にとつては嘘である。

×

私はある晩舊師を訪れた。師は私のあいさつの後に云つた。

『御家族の皆さんは無事ですか。』

私はすぐ答へた。

『はい。お蔭でみんなまめです。』

すぐ私は思つた。お蔭といふ言葉は少くとも嘘だ。無事息災が何で他人の、しかも何時も餘り親しくない人（譬へそれが先生であつても）その他人の爲にもたらされるも

のか。間接の、ごく遠い所の、その上ごく少しの私の家族の無事なことに、その先生のなすことが影響すると言ひ得るとしても『お蔭』といふほどのものだらうか。

×

旅行してゐてつい〳〵缺席してしまつた私は缺席屆を書かねばならなんだ。而も嘘の缺席屆を書かねばならぬ。小學校の教師である私は世の中に妙なこともあればあるものと熟々思ふ。缺席屆には『病氣のため』と書かねばならない。學校では嘘を云ふなと說きながら、自分自身が嘘を必ず書かねばならぬといふ運命にあるのである。

×

嘘といふことを考へつめて行くと、この世は嘘でないものが無いやうに思はれてくる。そして人間は時々は嘘がなければ生きて居られないのだ。大臣が二枚も三枚も舌があつたり、アインシユタインがニユートンの學說は嘘だといつたりするやうな大きな嘘に關する話が新聞種にも多いやうだ。

×

「嘘をいふと閻魔に舌をぬかれる。」「嘘の皮剝げる。」「嘘の皮八百。」「嘘つくは盜賊の始まり。」「嘘も方便。」「看板に僞なし。」「二枚の舌をつかふ。」「人間とついたては直ぐには立たぬ。」「二度の神は正直。」「正直の頭に神宿る。」「管の穴から天のぞく。」「よしのずゐから天のぞく。」「當るも八卦あたらぬも八卦。」「法螺吹く。」「煙にまく。」「紺屋の明後日。」「嘘の世の中。」

嘘に關する諺を集めて見ました。

□　小樽　松田德三郎

船へ乘つて北米航路をやつてた時の事です。初めて此の航路に乘つて來た事務員を掴まへて、

「君、けふの正午に百八十度を通過するのだが、甲板に出て見てゐ給へ、きつと波の上に赤い浮標（ブイ）が見えるから」と眞面目な顔で聞かすと、先生すつかり信じて了つて、正午餘程前から、御苦勞にも甲板に立つて長い事、あてのない海の上を眺めて居りました。

スエズ運河を通る時に、これも矢張り此の航路に初めての者を掴まへて、

「君、今にピラミツトが見えるよ。默つて見てゐ給へ」つて云ふと、先生矢張り熱心に甲板へ出て、アラビヤ寄りの沙漠を見てゐるのです。さうしてラクダを連れたアラビアンの姿などを見つけると大喜びで、

「まだピラミツトは見えないかなあ」なんて云つてます。間もなく他の連中から聞いて、だまされたと知りますが、初めは大抵かつがれるものです。

赤道通過の時も赤い線があるなんてよく騙されますが、此奴は餘程の間拔でなかつたら掛りません。

一體に船乘りの嘘は、ほんとうに罪のない嘘とでも云ふのでしよう。嘘を云ふ方でも深い氣はありませんし、云はれた方でも平氣なものです。無論、役目や仕事の折の言葉は別ですが。

港に着くと水夫の一人が云ひます。

「おい、女がてめえを迎へに來てゐるぜ。部屋へ行つて見い。素敵な別嬪が來ててめえを尋ねてゐるぜ。」

「きまつてらあ。」

「なぜ、行つてやられえのだ。」

「わざと待たすんだ。癖になるから。」

「笑はせらあ。行きたくつても借金があつて逢へねえんだらう。」

女は實際に來なくつても、彼等はウイン

チのワイヤを巻き乍らこんな事を怒鳴り合つてゐるのです。其處へもう一人が現れて、
「おい、今部屋へ來てゐる素敵な女は誰のだよ。何處かで見たやうな女だけれども思ひ出せねえ。」
「どんな女だい。」
二人は遽てて叫びます。それから、それを見る爲に二人はタラップを降りて、船首の部屋へ行きますが、直ぐ歸つて來て、嘘を吐いた男に向つて斯う云ひます。
「おらあ、あんな別嬪を知られえな。おめえこそ大知りだらう。あの物賣の婆さんにはおめえ前航に借金があつたぢやねえか。可愛想に、婆さんはおめえを尋ねて泣いてらあ。まだ返してなかつたのなら返してやれよ。金が無えのならおれが貸してやる。千でも二千でも。」
まあ斯う云つた調子です。

□

――嘘のいろいろ――

福岡　KM生

嘘も方便とやらで往古來今眞實らしい嘘も多い。古くは神話より新しくは此頃の珍奇學説にも中々嘘が多い。日々の新聞廣告及び記事に至つては尚更のこと、余はこれまで嘘ばかりつかれて眞實の社會はどんなものか知らない。否この嘘その儘が眞實の社會であらう?かう云つて仕舞へば嘘も眞實も區別がつかなくなつて仕舞ふ。左に述べんとする嘘は嘘中の嘘と思ひますが、間接的です。

余が中學の二年の時で寄宿舍に居つた時、隣の寮舍の者が余の前の廊下にパラピン蠟を塗つたのが事の起り、授業時間や食事の時寮に出入の度毎に皆辷る。少し叮嚀になると尻餅を搗く。その都度隣寮から拍手が起る。笑はれた余等の寮員一同は緊急會議を開き、復讎の協議を凝らした。その方法が二つに決議し、一つは余自身が絶對秘密裡に行ふ可く引受けた。その二つの方法とは隣寮一同への返禮として、食堂にある隣寮員の食器に唐がらしを塗る事と、余の引受けた方法はパラピンを塗つた發起者に對してゞあつた。

食事の報が鳴つた。競爭的に各寮の者は食堂に繰込んだ。余等は食卓迄隣寮と隣合せてあるから、今や吾々の係蹄にかゝらんとするのを見ると噴飯に堪へない。隣寮の者は互ひに顔を見合せ、今日の御汁は非常に辛いと云ふ。そのうちこちらから吹き出したので、隣もパラピンの復讎と知つたらしい。

次は第二の方法で、食堂に學生の來信が小さいボールドに掲示するのが規則であつたが、隣寮のF君の名が掲示してあつた。これは余自身の秘密方法であるから吾寮員も知らない。Fは食事中に立つて寮監室から封筒を一本持つて來て、食事し乍ら披いて見て居た。手紙の中途迄讀んだ頃シクシク泣き出した。もう食事も中止して歸寮した。隣寮員一同もソコ〳〵に仕舞つて去つた。此の時余はうまくいつたので痛快でたまらず吾が寮員に説明した。一同も大いに喝采を拍した。その手紙は余がこしらへたので、封筒のスタンプ迄苦心して書いたのであつた。手紙の内容は故郷の親が十日程前から流行性感冒に罹り、始めは大した事もなかつたが次第に重患となり、此頃では頭も上げられぬ。それで勉强中ではあるが、手紙の着次第歸省せよと云ふ意味で、旅費等は此の手紙の着く頃電報爲替で送金する。又親族の者の代筆たる事を附記したのであつた。いつも寄宿舍ではラブレター式のも

のは大抵看破されるので、破天荒の新案でやつたら嘘がきき過ぎて氣持惡くなつた。

寮に歸ると隣ではもう出立の準備を急ぎ、寮員一同午後の授業時間を休んで見送ると云ふ有樣、隣寮の寮長(五年生)は袴をつけて寮監の許へ願ひに行きかけた。かうなつては一大事と余は早速隣寮へ這入り、其の手紙の嘘たる事を説明した。然しこれが又嘘ではないかと中々承知せず、Fは目をはらして泣いて居る。遂にスタンプと電報爲替云々で納得したが、寮員一同も馬鹿らしかつたか笑ひもしなかつた。此の後寄宿舍ではこんな嘘は流行らなかつたが、余自身はスタンプ博士の稱號を得た。

□

大阪　佐藤成義

虛僞は概して不正であり罪惡であるが、併し時と場合に依つて嘘も亦必要であり、却つて親切である事が尠くない。孔子も父は子の爲に隱し子は父の爲に隱す直其中に在りと云はれた。裁判所で宣誓しても、父子が其の一方の爲に隱匿僞證しても罪にはならぬ。嘘は又時に可もなく不可もなく、毒にも藥にもならぬ唯一場の笑草位のもある。併し最初は人を笑はせたり驚かしたりする位に興味を持つと、段々馴れて後には人に迷惑をかけて罪の深い嘘をつかれば居られぬ樣になる樣である。

今は一昔前の事、予の家も此嘘つきの爲に大なる迷惑を蒙つた事がある。予の祖母は一里ばかり隣村の近藤家から嫁して來たのであるが、幼時其の村より五里程隔つた村の水谷家から近藤家へ養女にせられた人で、水谷家は其の後二三代も更り、血統も絕え他人が嗣いで居るので、吾家とは何時とはなしに消息を絕ち、其の當時より五年程前に祖母が死んだ時にも、吾家からも近藤家からも通知さへもせなかつた。

近藤家の村に赤平と綽名された赭顏矮小な男があつた。一定の職業とてなく、僅かばかり農作をして隨分貧乏に暮して居たが、嘘は三度の御飯よりも好物だと自稱し、夫も段々と嵩じて始終考へて人をだまし、其の迷惑したり怒つたりするのを無上の興として居た。例へば五月や秋で農家が一刻を爭ふ多忙な時に、數里の先に嫁した婦人の家へ行き、親里の老母が大病だと報告して、其の倉皇實家へ走り行くのを見て面白がつて居る樣なのである。

赤平は或日態々水谷家を訪れて、

「私は佐藤家の使ですが、お祖母さんが俄の病氣で昨日死去され明日が葬式ですからお知らせに來ました」と申出た。水谷家では久しく疎遠に音信不通になつては居れど、該死者の生家である事は聞き傳へて居たので、捨て置くべきにあらずと赤平を犒ひ、一泊させ酒食を饗して待遇し、翌日は當主夫婦が供人をつれ挾箱を持たせ、會葬の用意をして吾家を尋ね來た。着して見ると死者のある家らしくもなく森閑として居るので、訝りながら入つて來意を告げた。當方でも五年前の亡祖母の事といひ双方全く狐につまゝれた思で、段々と話して見ると赤平の惡戲と知れ、吾家からは五年前に通知を怠つた疎漏を謝し、先方は甚だ手持無沙汰の體で歸つて行つた。こんな端(はし)た人足を叱つて見ても責めて見ても詮なく、否責めたり怒つたりすれば彼は興がるので、唯苦笑する外なかつた。同人の生きて居る間隨分迷惑した人も多かつたが、今は彼死して數年になる。

×

「予の云ふ事は皆嘘だ」こんな不可解な言

は無い。それが果して皆嘘ならば嘘だと云つた其の言は少く共嘘でない。又嘘でないのを嘘だと云つたのなら、最初のは嘘ではなかつたから皆嘘ではない。

□

東京　竹林生

上總國竹岡村の豪農、春野金右衛門と云ふ家があつた。或る日の午前一時頃、雨戸を叩いて、

「戸を開けて呉れ、戸を開けて呉れ」と云ふものがあつた。今時分何者かと不審を抱いて、心窃かに警戒しては居つた。其の内に戸を外して入つて來た。其家の細君駈けつけて、

「御苦勞樣」と丁寧に挨拶した。それは豫期の如く、强盜であつた。有金を全部渡せ、渡さぬとこれだとスラリと目先に閃らせた。細君は少しも騷がず、

「いつもながら、御冗談もよい加減になさいませ。早く頬被りをお取り遊ばせ」と云へば、

「此あまめ生意氣だ、文句を言はずに早く出せ」と威丈高に刀を振りかざす。細君時こそよしと、

「これは誠に恐れ入りました。私は全くあなたをお見外れ申して居りまして、實はお巡りさんと心得て居りました。いつも午前一時と云へば、お巡りさんの巡回時、さうしていつも夜の巡回は假裝にきまつて居ります。だからすつかりそれと心得ました」と述べた。强盜一目散に逃げ去つたと云ふ話のやうな實例。

□

北海道　田中畫衣

雪枝は明敏な頭腦の所有者であつたのみならず、ヴアイオリニストとしても當時S市に鳴つて居た。加ふるに、溫順で、正直で、親切で、快活な天禀の性格であつた。然し好事魔多く、佳人は薄命である。彼女が最優等で高女を卒へた翌年、結婚することになつた醫學士の性格と、其家庭の複雜な事情とは三年にして彼女を破鏡の嘆に陷れた。顧みれば、「ヴアイオリンを彈くやうな者は貰はない」などゝ放言して居る家へ嫁いだのが、抑も結婚生活の出發點に萌した不覺な破綻でなければならなかつた。

雪枝が離婚後の比較的自由な生活から二度目の複數の生活に立ち戻つたのは、更に三年後であつた。新しき夫といふのは藥屋で、「ヘイ體溫は二十七度に昇りまして……」などゝ云つて濟して居る程の男で野卑でもあつたから、此度も亦眞に伉儷相和す譯はなかつたが、S市に畜產共進會が開かれて居た大正六年八月、雪枝等は財產隱匿罪の事件から、其町に假住居をすべき事情に在つた。姙娠八ヶ月目の身重な身體を持ちあぐみながら、獨り殘つてゐた。或日雪枝の所へ出し拔けに、

「奧さん！大變です！今旦那が共進會の福引で一等を引當てなすつたで、すばらしいい馬を挽いて來るだに依つて、早く廐を建てい、飼糧も買つて置けつてんですよ。ハア……」と汗を拭き〳〵やつて來たのは、顏馴染の車夫の保さんであつた。雪枝は夢にも豫期しないこの大吉報に先づ驚いた。次に道がに湧き上る喜びでいつぱいになつた。それから、まめ〳〵しい働き振りを發揮して、急いで材木を買つて來させたり、大工を呼んで來たりして、取敢えず裏庭の隅に假ながらも一つの馬小屋を建てに掛つた。さうするうちに、氣早な車夫の振れ廻

りに依つて、そちこち二三の知人や親戚からお祝ひ物が運び込まれる騒ぎ。とかくして厩も七八分通り出來て、雪枝等が話の馬の到來を首を展べて待つて居る處へ、空手でブラリと歸つたのは夫の善造であつた。より多く意外な面持の雪枝に向つて、「何して居るんだ?」と不審顔、呆れ返りながらも、雪枝は事の次第を述べる外なかつた。善造は之を聞きも敢えぬにいきなり「馬鹿者め!」車夫の保さんを戯つた先刻の自分の言葉からこんなことが起つたのは、雪枝の無智からでもあろうに。(イヤ自分がそんな冗談の噓を口走つた事實其物さへ想ひ出されなかつたからといふ方が正確かも知れないが)。「瓢箪から駒」でなくて「冗談から駒」だとでも洒落れたい處であるが、雪枝の身としては、元は罪の輕い冗談の噓もこゝ迄發展してしまつては四月馬鹿(エイプリルフール)でゝも無い限り、開いた口の塞がると同時に口惜し涙が膝に落ちたのを嗤へまい。

贈られたお祝ひの品々は一々譯を斷つて返して歩かればならなかつたし、厩の材料は二圓で買つたが、取りほぐして、半値の一圓で買ひ戻して貰はねばならなかつた。

序ながら、雪枝は此時腹に在つた子の誕生過ぎて二月程經つた年の瀬に、雪の深い北見の片山里で二十九年の其生涯を腸チブスの爲め奪ひ去られた。愈々死んでしまつてから遉がに嘆いた夫善造も病中は相渝らずケチで冷かつたとやら。其時已を抛つて看病に努めた雪枝の愛妹が僕の妻です。

×

僕が二度目も美術學校の入學試驗に失敗したと知つた時の口惜しさ!無念さ!下宿屋から飛び出して、人の居ない野原か山の中か藪の中で死ぬ迄泣きたくつてたまらなかつたあの時の氣持は、自分以外到底十分に知つて呉れる人はあるまい。其悲痛さは遂に僕を驅つて、試驗官の一人端山行水教授の自宅の玄關に立たしめた——尤も行水畫伯には日町の研究所で數度會つて居たが。悲憤滾々たる胸底にも、存外な其教授の好意的忠言と激勵とを受納する餘地はあつた。そして同夜再訪して自分の作畫を見せて批評を仰いだ處、中の一枚の構圖(コムポジション)は非常に持ち上げられた。其時謹聽した言葉は今でも端々さへ忘れて居ない。尙翌日は更に美術學校へ行つて、試驗の成績品たる素描(デッサン)に就いて、彼我を比較しての懇切な具體的說話を聽き取り、實は體格檢査で既往の肋膜炎の痕を發見されたのが、落第の重大因となつた事も判明し、一縷の希望の手綱を握つたやうな薄ら明い氣持を感じた。けれとも、血書を認めて迄學資の貢ぎを哀願した手前としても、どう考へても國元の兩親に會せる顏はなかつた。

遂に、身を切られる思ひながらも一枚の葉書に墨色もアヤフヤに、「試驗には十番で合格しました」と記して投函した。死に似た數日を經ると、喜びの言葉の添うた若干の金子が故鄕から送り屆けられたが、之が「美」の字の徽章も輝かしい憧れの制服とはならずして、斷頭臺(ギロッチーン)にかけられる思ひの歸國の旅費とならんとは……。

扨て、失敗後の初對面に、如何なる言辭を以て母や姉に——父は不在だつたと思ふ——眞實を告白し、且つ苦肉の詐りの策を執つたのを謝したであらうかは何卒餘りに語らせないでもらひ度い。

其後、新聞配達をしながら勉強し、方向を換へた某醫專の試驗に見事一番でパスしたが、更に省みて現在の妥協的な不徹底な俗生活に想到する度、彼の行水畫伯に對しても、飽迄初一念を貫徹し遂げなかつた事が犇々と身を責なむ悔いと恥とを齎すのである。尙美校の成績發表前に貧しい洋服屋の叔母(父の弟の妻)がプランセットを弄んで僕の運命を問ふた處、プランセットは躊躇もせずに、「二バンデハイル」と答へたといふ事も附記して置き度い。糠喜びと一樣に云ふべけれど、前の「馬」に比べるとこいつはチト深刻過ぎたテ。

文學青年の心理

井東憲

一

世に文學青年と云ふものがある。文學を愛好し又は愛玩する青少年の謂である。

抑も、何時の頃から出來上つたものか、歴史は詳かでないけれど、明治十八年「硯友社」一派なる文人の群發生し、一文壇村を造つて以來だらうと想ふ。

勿論、文學を愛好する者は、皆文學青年だと云ふ頗る廣義の意味では、その源や大に遠いと云はなければならぬ。卽ち、世に文字なるものあらはれ、文なるもの出來、文藝の形の成つた時代より、最早發生してゐたと云はなければならない。が、此處に謂ふところの「文學青年」とは、文藝潮流の一旺盛期なる現代特異の文學青年の謂である。從つて、彼らは現代の生んだと云ふ意味で「現代的」で、時代心理の反映だと云ふ意味で、時代的特異性を最も多量に持つてゐる。言ひ換れば、現時代の生んだ複產物の內、何より慥かに現代心理を代表する一部青年（文學女生も含めて）の謂である。

諸君も知れる如く、世界を通じて我日本國程文藝の新刊書の出る國は餘りない。その點は、日本の大なる印刷所のうち、その過半數が日に夜をついで、純文藝、思想書類等所謂「文藝物」を刷り

つゝある事を以ても推して知る事が出來る。

東京の新刊書大賣捌の言に依ると、東京市內のみを以ても、日に十册平均の文藝書類が小賣店に送られると云ふ。その數、初版千部平均としても、月を踏み年に至つては、恐る可き高でなければならぬ。それらの目ま苦しい程矢繼早に現れる新刊書を購買する者は、如何なる階級であらうか。云ふまでもなく、其大半は文學青年諸子である。

斯くの如く善惡美醜交々、文藝書類の亂發せらるゝ時代が、本當の人文の發達したものか、或は過渡期の一現象に過ぎないか、或は又所謂文化の享樂に過ぎないか、はたして喜ぶ可き現象であるかのことは、他の論文を持つて考へる事とする。

此處では、現代の一事象として存在する「文學青年」(女生も含む)の心理に就いて、考究して見よう。

二

自分自ら一個の文學書生であらう僕は、種々な機會で種々な文學青年と會ふ。その表面に現はされた態度、調子、意見等は、彼らの好んで讀む書類、及彼らの崇拜乃至尊敬する人達の思想、藝術の異るに從つて異るが、その底を貫く氣分、大體のタイプは、皆一樣に「文學青年型」を出てゐない。

先づ「年齡」から云ふと、春期發動期前後、四五年の間、即ちニキビ青年(女生も含む)が最も多い。それは、この期間は人間が一番リヽカルになる憧憬的時代であり、且又人格的にも、思想的にも、知識慾の盛んな、藝術的感傷に敏感な、人間の黎明期であるからである。このあこがれの、人間の處女地時代には、誰も大抵歌を讀んで見たくなり、詩を唱して見たくなり、あるひは又、人生の謎の文であらう文藝書を繙いて見たくなる。かうした傾向は、文化が普及され、青年の心理的生活が發達するに從つて、益々強く熱して行かうとしてゐる。

その次は、二十前後から三十歳位までの間の人が多數をしめてゐる。本の購買力の方面、投書家の方面から觀ると、この人達が一番多いので、前の芽生時代から一歩を踏み出した人々である。所謂大家に入門の手紙を送り、中家を散歩訪問し、小家を冷かして歩くのは、この年の人達である。次は、一生涯を通じての文學青年であるが、かうした人々も、五十三で小品文を投稿し、六十歳で「文章クラブ」を愛讀する話を聞くと、少しはある事が判る。

「風采」から云ふと、今の文學青年の大方は學生風である。勿論、凡ゆる階級の青年を含んでゐる事とて、商人あり、農夫あり、勞働者ありと云ふ有樣だが、就中書生が多いので、大方は學生風である。然し乍ら、何と云うても、文學青年は、後に述べるやうに、文壇的氣分に動かされてゐるのであるから、時の文壇的中心人物の如何に依つて、其風采も異つて行く。往年三田派の荷風振ひたる時、三田の文學青年が江戸趣味に耽れた風姿をし、武者小路新らしき村を造るに及んでは、白樺の崇拜者共すつかり農村を氣取り、プロレタリア文藝現るに及んでは、企んで菜葉服に革命歌を唄ふ文學青年現れたなぞ、正によい例示である。

一時は、長髮、眼鏡、細身のステツキなぞ、最もよき文學青年のサンプルであつたが、ブルヂヨワ文壇對プロレタリア文壇と、文壇にも階級別出來て以來、未明、廣一郎等の崇拜者と、寛、龍之介、百三の崇拜者とは、丸で職業人物まで異にしてゐる。(常に無自覺でセンチメンタルで淺薄な文學女生は、未だ百三、實篤に安價な涙を流してゐる。)風采の異る、又當然である。

三

地の東西を問はず、昔なら文學者は一個の天才乃至特異なる才能を惠れた者と思ひ込まれて居る慣習がある。さうした天才肌、變異者氣取は、大方の文學青年の丸で特權的享樂感情の如くである。

多くの文學青年に會つて見ると、あだかも變異振らんが爲めに、文學を讀むかの感さへある。それ程、彼らは自己を天才視し變異者振つてゐる。そして、彼らの斯うした考へ方は、往々にして高慢と虛傲とを生む。而して、其原因は、「多讀」と、Poisoning と、青年的敏感とに在る。

彼等は全く底のない袋のやうに多讀である。而も其「多讀」と云ふ事は、素質を考へない、體系を持たない「多讀」であるから、卽ち「亂讀」である。彼らの「變異者振り」なるものは、此の「亂讀」と云ふ行爲の結果ではあるまいか。

彼等は、一定の體系も主柱も持たない。その點頗るまとまりなく、淺薄である。成程、常に天才的言辭を弄する文學青年達は、何らかの意見は持つてゐる。が然し、其意見たるや、所謂「中毒」の賜物であつて、獨創的でも深察でも何でもない。淺薄と云はれるのは、當り前の事である。

僕は前に、彼らは「變異者振る」と云うた。彼らは、生活の態度で、變異者振らうとするのみならず、又一個の文壇的變異者でもある。彼等は文壇人の著書を縱橫に漁り步くのみでなく、單なる文壇的興味にかられ、文壇人の表裏の生活、文壇の內面、文壇の事件、さうしたものを熱心に知らうとする。そして彼らは、つひに立派な文壇ゴシツプ學者となつてしまふのだ。僕が「淺薄」呼ばはりをしたのはこの點に就いてである。

又、彼らは言辭に纏りがないのみならず、其思想に於ても、藝術觀に於ても、嚴たる自己を持つてゐない。文壇の風潮の變化するが如く、昨日の花袋、今日の實篤、明日のバルビウスと變つて行く。

「半可通」、彼等は字義通り半可通だ。從つて、其態度でも意見でも、大いに生意氣で、頑に押しが强い。

四

僕は、文學青年の心理を書いて、その缺點を書

き並べてしまつた。然し乍ら僕は決して文學青年の存在を否定するものではない。寧ろ、益々多くなりつゝある現状に、滿腔の誠心を以て、喜びを感じてゐるものである。

何となれば、玉石混淆の彼等の中にこそ、本當の新興藝術家、新思想家が潜んで居るにちがひない。且又彼等の中からこそ正しき人間が生れ出なければならないと、常に信じて疑はないからである。

現在文藝家と云はれてゐる人々は、皆一度は文學青年であつた。其中にあつて、素質と教養と力強き歩みとに依つて、自分の理想の行程に徹した人々が、文藝家となつてゐるのである。

人間は一度は必ず詩人と成る。藝術的感傷家にもなる。文學青年にもなる。が、世の大方の文學青年達が、下らない文壇意識に拘はれて、下劣な興味のうちに、文藝の作品から遠ざかつて行く事は、實に殘念で堪らない。彼らの十中の九分九厘までは、かげらふの如く、文藝雜誌の上をたゆたうて、知らぬ間に消えて行つてしまふ。それと共に、藝術の問題も、人生の問題も、何も彼も雜務の裡に忘れてしまふ。情けない事の一つである。

文學青年は淺薄で不可ない、半可通で生意氣だ。本當の藝術なんか一つも判つてやしない――と先輩共は嘲笑する。

然し乍ら、僕は多くの缺點を差引いても、尚彼等が必ず何物かを創り出し、本當の人生と藝術とが判る時が來る事を信じて疑はない。さうした人が、萬人のうち、十萬人のうち一人あつても、現代の如き社會では、どれ程の喜びであるか知れない。

一年一回の好機を逸する勿れ!!

催眠實技夏季講習會

□會期　八月一日（水曜）より七日間、毎日午後六時より九時迄

□會場　東京市外、品川御殿山七一八　變態心理學實驗所
（市内電車品川終點鐵橋前の大石垣に沿ひ右へ約五丁）

□講師　日本精神醫學會
日本變態心理學會　主幹　文學士　中村古峽氏

本講習會の特色

本講習會は、文學士中村古峽氏が多年の研究と創意とに基き、一擧にして催眠心理學の學理と實際の兩方面に通達せしむる目的を以て開催さるるものにて、其の講義は通俗平易にして實驗を主とし、特に其の實技教授には斷じて助手を用ひず、中村文學士自ら講習生諸君の手を取りて懇切に教導す。坊間に有觸れの山師的講習會と同一視する勿れ。

世間には、或は氣合術と云ひ、或は哲理療法と云ひ、或は靈子術と云ひ、或は靜座法と云ひ、其他何式、何法と、如何にも新らしき秘法のやうに云ひ觸らす者あれど、是等は其の根本を繹ぬれば、何れも皆吾々の催眠狀態（即ち換言すれば吾々の精神統一狀態）を利用したるものに外ならず。從つて本講習會に入會する時は、以上諸法の原理にも通達することを得るは勿論なり。

又世間には、肉身貫通術、熱湯術、鐵火術などと云ひて、或は身體に針を立て、或は蠟燭の火を口に入れ、或は燒火箸をこき扱くが如き、單なる物理現象や生理現象を捉へ來りて如何にも靈妙不可思議の秘術なるかの如く說き立て、以て世人を惑はさんとする輩あり。本會はかかる詐欺師を撲滅せんがために、是等所謂秘術の原理をも學理的に說明す。

又世間には、精神感應、透視、千里眼、念寫、念動の如き、極めて稀に見る所の、或は殆ど見るべからざる所の心靈現象を捉へ來りて、何人にも容易に習得し得べき日常普通の現象なるかの如く云ひ觸らし、以て世人の好奇心に投ぜんとする輩あり。本會は是等の迷妄をも打破せんがために、一々根柢ある學理と正確なる實例とに基きて、彼等の牽強附會なる所以を說明す。

講習要目

一、催眠の原理。催眠狀態と暗示。暗示感受性。催眠狀態の特徵。催眠狀態の諸階段。

二、催眠の方式。催眠狀態檢査法。覺醒法。實習。

三、筋肉運動を左右する諸種の實驗——觀念運動、運動不能、强直狀態、發聲運動、步行運動、運筆等。實習。

四、感覺活動を左右する諸種の實驗——感覺銳敏、感覺脫失、諸種の錯覺幻覺等。實習。

五、記憶及び人格變換に關する諸種の實驗——記憶喪失、年齡變換、兩性變換、人格變換、珍らしき二重人格者の實驗等。實習。

六、治療矯癖に關する二三の實驗。所謂奇術秘法の實驗。心靈現象の說明等。實習。

規定

會費　本會會友（變態心理學講義錄修了者）は金參拾圓。會友以外は金五拾圓。（但し變態心理學講義錄全部を無代配布し、本會會友に編入す。）

手續　入會希望者は、開會當日迄に、住所姓名年齡職業を明記し、會費を添へて御申込の事。

特典　一度本講習會に入會したる諸君は、今後開會毎に何回にても無料にて出席することを得。但し從來の成績に依れば、入會者は何れも一回の講習にて催眠實技に熟達し、治病矯癖に應用することを得、其の報告は本會に山積せり。

主催

日本精神醫學會

日本變態心理學會

電話高輪一〇四三番

一萬圓の行方

淺草 X Y 生

——一萬圓の行方——

一萬圓の紙幣がいつの間にか古端書に化けてしまつた。一體どうして姿を變へたものかさつぱり分らない。この不思議な犯罪は今日まで未解決のまま取殘されてゐるが、之を變態心理的興味の上から眺める時、その解決の鍵を握り得るある物が潜んでゐはすまいか。私は昨年十月、日本精神醫學會の實驗デーに出席し、その時中村先生が北海道講演旅行中札幌で接したある珍らしい裁判事件として講話のあつたものが卽ちこの事件である。しかし、私のはその講話に依つたものではなく、近頃ある材料が手に入つたので、專らそれに依つて書いて見たのである。

武州鳩ヶ谷町の米穀問屋今館五左衞門は同町に竝びもない豪商であつた。番頭平沼芳之助は當時二十六歳、小僧の時からこの家へ住み込んで、今では東京への賣込から掛先の集金までも、一切彼の手一つに委されてゐるほど信用が厚かつた。

大正三年五月、芳之助は東京の得意先から掛金を集めて、態々それを一二の銀行で百圓紙幣に換へてもらつたのであるが、その一萬圓の大金がいつどこで姿を消してしまつたか、古端書に化けてしまつた。警察署や裁判所も盡せるだけの手は盡したものの、未だに一萬圓の行衞は皆目分らない。これが不思議でなくて何であらう。

芳之助は極めて眞面目な男で、何一つ是迄間違ひも無かつた。それのみならず、大の信神家で、今館の邸內に在る最上稻荷の社へ日參を缺かしたこともなく、供物から社殿の掃除まで、すべて自

分で引受けて、少しも人手を借りるやうなこともなかつた。

　ところが、大正四年一月、東京の華客の新年宴會が淺草公園草津に開かれて、芳之助もその席にあつたが、一座の人々が彼を今館の若大將と言つて持ち上げた。やはりその席へ聘ばれてゐた公園藝者の松島家の仙吉（十九）が、てつきり鳩ケ谷の今館の若旦那と看て取つて、誘へよがしの水を向けた。彼はその席の崩れに、仙吉に言はれるがままに千束町の待合浦島へしけ込んだ。

　芳之助はそれが病附きと成つて、それからは東京へ來る度に、月に二三度宛は、浦島を根城として、仙吉に逢つた。

　五月十六日の夜、芳之助は浦島へ出掛けた。この時彼はいつになく非常に酔つてゐたが、それでも來ると直ぐに、女中を呼んで内懐から出した小さい風呂敷包を渡して、これは大切なものだからしつかり預つて置いて呉れと頼んだ。しかし、仙吉が來ると間もなく、痴話喧嘩をやつた末、どうしても歸ると言ひ出して、女中の手から預けた包みを取戻した。

　浦島の女將も、棄てても置けないので二階へ上ると、芳之助は女將を捉へて、今夜は百圓紙幣で拂ふから、直ぐ勘定してくれといきまいた。しかし、女將は平常六七圓位の遊興よりしたこともない彼のことであるから、深くも氣に止めず、まあまあそんなことは云はないでと、その晩はどうにか納めてしまつた。

　芳之助は翌日十時頃やつと眼を覺まして、いつの間にか仲直りをした仙吉相手に迎へ酒をやつてゐると、やがて帳場へ千束町の藝妓屋菊本の女將で、浦島の女將の姉に當るおきみといふ女が遊びに來た。おきみは彼の遊んでゐることを聞いて、浦島の女將と一緒に二階へ上つて來た。四方山話の末に、おきみはこの頃橋場の大神宮様で、神

りといふことを始めたが、それは不思議なやうに何でも能く中るといふことを彼に話した。浦島の女將も側から合槌を打つて、これから行つて御覽なさいと頻りに二人で勸め立てた。

唯さへ信心深い芳之助は、勸め上手の二人の女將に說き立てられて、不圖行つて見る氣に成つた。主家の行末や自分の運勢も觀て貰ひたいと思つた。で、その日の午後、菊本の女將と仙吉と女中の四人連で、俥を聯ねて橋場へ出掛けた。

大神宮では女三人を別室に通して、芳之助だけを神前へ招じた。そこには巫子と中年の神主と鬚まで白い老人との三人が端座してゐた。老人はおごそかな態度で、先づ彼の願意を聞いてから、しばらく神前に禮拜して默禱をした後で、神前の幣束を取つて立ち上つた。老人は合掌して目を瞑つてゐる巫子の前に立つて、默禱を續けながら、四五度輕く巫子の頭を撫でると、女は一時がつくりとうなだれて、無我の境に入つたやうに見えた。

やがて、女は姿勢を正して、

『今館の家には神か佛か分らぬやうなものが祀つてあるが、これは神として祀るべきものである。神として祀れば、神は必ずこの家に幸福を與へるぞ。』と告げて、またがつくりと成つて前方に倒れて、五分間程經つて我に歸つた。

成程今館の家には、最上稻荷が祀つてある。そして、それが最上經五大菩薩として祀つてあることを芳之助は知つてゐた。

『はは、この御稻荷樣が佛として祀つてあつては惡いのだなあ。』と芳之助は忽ち感づいた。

『それにしても能くこんなことが分つたものだ』と彼は心から神憑りを信じて、醉もすつかり醒めてしまつた。

そこで、芳之助は自分から進んで、老人に賴んで神憑りをしてもらつた。老人は巫子にしたのと

同じやうに神前に禮拜してから、幣束で彼の頭を撫でると、彼は全く夢中になつてしまつた。しばらくの後正氣附いた時には、彼は俯伏せに伏せつてゐることを知つた。

しかし、芳之助は正氣附いてからも何となくぼんやりとして、心がそわ〳〵と落付かないので別室へ戻つて、同伴の女三人にも碌々挨拶もしないで、一人でこの場を立ち去つてしまつた。女達も彼の樣子が餘りに變なので、呆氣に取られて止めるにも止められず、そのまゝそこで別れてしまつたのである。

それでも芳之助はその晩八時頃、鳩ヶ谷の今館の家へ歸つて來た。

彼は直ぐに飯を食べて、間もなく湯にも入つてから店へ出て來た。そして、無言のまゝで、頻りに爪を取つてゐた。その動作が何となく平常と變つてゐるので、主人がそれとなく注意してゐると、彼は突然主人を睨みつけて、

『旦那は信神氣が無い。信神氣がないからいけない』と叫び出した。

『俺に信神氣のないのは、今に始まつたことぢやない。それがどうしたか』と主人が詰るやうに尋ねると、今度は芳之助は眼を据ゑ、顏色を變へて、

『今迄は最上稻荷一人であつたが、もう荒熊稻荷と二人に成つたから百人力だぞ』と怒鳴り立てた。

主人はこれは彼が慢心して氣が少し變になつたのだと考へ、

『まあ、いゝから今夜は寢てしまへ』と芳之助を離れのやうになつてゐる奧の部屋へ連れ込んで、無理に寢させてしまつた。

それでも燈火が險呑なので、提灯を部屋の隅へ懸けて置いて、動作を覗つてゐると、芳之助はそれから一時間ばかりの間は、蒲團の上に坐つたまま、自分が稻荷に成り濟ました氣で『俺は荒熊稻荷だぞ』とか『伏見稻荷だぞ』とか頻りに怒鳴り

立ててゐたが、やがてすや〳〵寝てしまつた。

芳之助の動作を見屆けた主人は店へ引返すと、丁度芳之助の親父も、外の用事で來合せたので、主人は彼の容體を話して、彼が店の戸棚へ入れて行つた風呂敷包を、彼の親父と一緒に明けて見ると、之はどうしたことであらう。中からは古端書二三十枚の一束と空つぽの紙入と手帖とが出たばかりで、金などは一文もなかつた。而も其の端書は、どれもこれも今館の得意先から來たもので、平常芳之助の居間の棚に乘せてあるものばかりであつた。

で、主人も不審を起したが、翌朝目を覺ました芳之助は、どうも未だ動作が本當でない。小僧を相手に米の出し入れなどはしてゐたが、隙さへあれば眼の色を變へて考へ込んでゐるので、その日はそのまゝにして置いて、翌十九日の朝になつて大分落着いたのを見屆けてから、掛先の樣子を訊ねると、ぢつと考へ込んでゐた彼は、『金は確かに集めました。置いて來た處も思ひ出しましたから、取つて參ります』とそのまゝふいと家を出て、二日經つても三日經つても歸つても來なければ便りもなかつた。

そこで、主人も愈々不審に思つて、二十二日の朝、彼の親父を呼んで、得意先の樣子と彼の行方を搜させるために、詳細言ひ含めて東京へ出した。

一方、家出した芳之助は、段々正氣附くにつれて、百圓紙幣で一萬圓と別に小出しの參拾圓を風呂敷に包んで腰に結び附けたまゝ、待合の浦島から橋場の大神宮へ行つたことまで思ひ出したので、五月の二十日に又も大神宮で訊ねて見たが、金はなかつた。

が、之を聞いた神官は、それは棄て置き難いことだと、すぐと芳之助を神殿に招いて、巫子の女と彼とに、交々神憑りを行つた　巫子は神憑り狀

態に入ると、

『金は芳之助が信仰致す伏見の稻荷が預つてゐるから、六月二十九日の午後十時に、必ずここで返すぞ』とはつきり言ひ切つた。

芳之助は自分が神憑りに成つた時は何も分らなかつたが、自分も巫子と同じことを言つたと聞かされたので、神主からこの神憑りの託宣を書いて貰つて、一時は之を證據に鳩ヶ谷へ歸らうかとも思つたが、主人は不信神だから、この話をしても信用すまい。それよりは金が出てから歸ることにしようと、日本橋の知人の家に隱れてゐたが、二十三日の晩、とうとう搜しに出た親父に搜し出されて、彼は鳩ヶ谷へ連れ歸られた。

連れ歸られた芳之助から仔細を聞いて、一萬圓といふ大金が、古端書に變つたことを初めて知つた主人は、彼から神主の證明書を見せられてもどうも不安心で耐らないから、翌日彼を連れて上京し、大神宮へ行つて神憑りを頼んだ。すると今度は巫子の口から、明日の午前十時に、金に代り神樣の證文が神前の三寶の上へ現はれると告げた。

しかし、之を聞いた主人の疑念は、一層昂つた。最早や猶豫は出來ないと、事の次第を直ぐ日本堤警察署へ訴へて、翌日午前十時に刑事を一人同行して橋場へ出掛けた。

ところが、案の定時刻になつても、三寶の上に證文が出なかつたばかりか、巫子は刑事が來たと聞いて怖氣附いて、神憑りをしようとしても、どうしても出來なかつた。そして、白髮の老人がいくら骨を折つても駄目であつた。

芳之助は神憑り狀態に成つたが、その時彼は、『金のことは聞かなくても汝が知つてゐる』と大喝した。斯う成ると、伏見の稻荷が借りたといふ託宣も、愈々うろんと成つて來た。白髮の老人は、『神も時には嘘を吐くこともある』と芳之助の言辭を打消さうとしたが、それが却つて嫌疑を深くする種となつた。

（以下次號）

形外漫筆（九）

醫學士　森田・形外

恒産といふ事

恒産といふのは固定した資産である。不時の事變に備へて其の生活を安定にせんとするものである。男一人前となれば皆獨立自活の力がある。結婚しても共稼ぎでやつて行かれる。然るに人は何時病にかゝるかも知れぬ。妻が姙娠する、子供が出來る。又親は老人になり且つ人は何時死ぬるかも知れぬ。是等に對する準備として相當資本の貯蓄を要する。若し之がなければ常に生活に脅かされて、相當の自信あり生き甲斐のある所謂天職を完うし、人を損はず世を毒しない處の生活をなして行くことが出來ない。之が恒産なければ恒心なしといふ所以である。此の恒産は男が或は病に罹り或は死んだ時等に、其の妻子が忽ち路頭に迷ふとかいふことのないのを最小限とし、更に子女が澤山に出來ても敎育も出來、自己の天職を完うし社會に貢獻し得る丈の準備として、其の慾望にも限りはないのである。

○

余は今自分のこれ迄の經歷を考へて見る。余の家は數町步の田地があつて、數十石の收入がある。之が余の家の固有財産である。余は自分が一通り獨立して後も、最近まで此の父の財産の分量を委しく知らなかつた。又之を知る必要を感じなかつたのである。余の學校時代の資金は其の收入から支出された。中學時代は米の價が一石三四圓で家計が甚だ困難であつた。大學時代は米は高く養蠶等の收入で却つて樂にやつて行かれた。

父は此の固有財産を減じてはならないといふ主義であつた。其の爲に余の弟には高等の教育を授ける事が出來なかつた。余は中學時代、身體虛弱であつたのと（今になつて考ふれば實は神經質で、本質的に病身ではなかつた）資金の乏しいために、中學卒業後父は余に高等教育を受ける事を許さなかつた。然れども余はきかぬ氣象で、一時は父に背き他人の世話で高等學校に入學する事が出來た。

又中學時代には父が金をケチケチするのを憤慨して、自ら獨立苦學せんとし無斷上京した事がある。しかし間もなく重い脚氣にかかり、又一方には世の中は血氣の心の思ふやうにならないことを知り、何でも父にかぢり付いて勉强した方が得策であると思ひ、歸國して中學に復校した事がある。で、中學時代には自炊生活もし、大學時代には獨逸語の教授をして學資の補ひにした事もある。常に出來る丈の儉約をし、大學入學後迄も、例へば衣類の洗濯等の如きは必ず常に自分でやつて來た。

○

余の知人の内には或は余の家以上の財産であつて、學資の爲其の財産を賣り盡し、中途で其の子に死なれ家族は困窮に陷つたものもあり、或は子が成業の後には既に産を失つたため、其の子は家族を養ふために働かねばならぬといふ境遇となる者もある。是等の人々は從來の家産は之を學業の資本とし大學さへ卒業すれば直ちに恢復出來るやうに思つて居るものである。斯かる場合には其の財産は恒産ではなく一時の流通資本である。恰も人間を商品に見立てたやうな形で商賣の元入である。若し中途にして其の子が死んだ場合には、冒險事業のために産を失うたやうなものである。思ふに大學に入るのは、より高き人格を作る事が目的である。金を儲けることが目的ではない。實際に於ても一般の場合には、例へば卒業迄の學資金に相當の利子

を計算した時には、俸給生活で之を返却するといふ事は仲々困難なことである。又一方には此の學業を單に金儲の爲に使ふといふことは、必ずしも其の人が人格を完うし世に益すると極まつたものではない。甚だ危ぶなかしいものである。

ルボンは其の著群集心理の内に佛蘭西の教育の弊害を痛論して、徒らに注入教育をなし多くの高等遊民を作り、國内に不良分子を養ふやうになるといふ事をいつてある。人は高等教育を受けたとて、單に之が智識の詰込教育であつたときには、必らずしも其の人は獨立自重の人格者となるべきものではない。猫も杓子も單に所謂高等教育を受けるといふことは、群集心理による虚榮のあこがれであつて外面的の眩惑である。人は物を知れる分量で其の人の德の高下を定める事は出來ぬ。それは恰も財産の分量で其の人の人物を評價することの出來ないのと同樣である。

○

余の場合には父の財産は恒産として成立して居る。其の財産は少し許り增加した位で、昔も今も大差はない。父母は社會の經濟狀態の變動にあつても生活に困らない。それは儉約といふことが平常の習慣になつて居るからである。余も父母を養ふの心配はなく、只自活さへ出來れば自分で好むことをすることが出來る。余の目的としては殊更に金を儲けるといふ事はいらない。只自己の人生に對する滿足の心を犯すことなく、職業に對する興味を沒却することなくやつて行かれればよい。又余が多少の貯蓄をして余の恒産を强固にするといふことは、生活を豐かに安樂にするのが目的ではない。自己及び子の將來の人間としての向上に要する資となし、多少なりとも自己の興味と抱負とに對して、社會に貢献せんとする餘裕を作るがためである。此の故に華美贅澤の慾望もなければ外見を張り體裁を繕ふとい

ふ必要もない。汽車の上等に乘りたくもなければ、宿屋でお世辭取持をよくしてもらふ慾望もない。旅行は彌次喜多が最も人間味が深い。所謂文化生活に中毒したものには此の味は解らない。

○

今ここに金がある。其の分量の如何に拘らず吾人は之を或は恒産となし、或は之を流通資本とすることが出來る。例へば今千圓の金を貯へて其の利殖を以て之を生活の補助にする。此の時にはそれが恒産である。然るに之を以て投機の資本とし或は廣告費とし、或は外見張りの費用とする。此の時には流通資本であつて、其の目的は更により大なる利益を得んとするものである。特に最も露骨なものは金は天下の流通物なればといつて有る時には自由に使ふ。それは現實であるから思ふ通りに出來る。然るに金の無い時には金は天下の流通物であるから、金のある人は俺に呉れべき筈であるといつても、此の時には思ふがままにはならぬ。思ふやうにならぬ時には從つて不平となり世を呪ひ社會を怨むやうになる。これが所謂危險思想を醸す素地となる事もあらう。

世には「多く得んと欲するものは多く散ぜよ」といふ標語を唯一の主義として居るものが甚だ多い。立派な服裝をするのも玄關を大きくするのも其の爲である。皆自分の便利且つ心持よいといふ爲ではない。たとへ無い袖は振つても或ものを得んとする一圖の執心である。新聞に大きな廣告さへすれば、其の物の内容は何であつても必ず其の幾倍率の利得があるといふことは現實に此の事を示して居る。然らば人が何のためにこんな事をするかといへば、其の驅らるる心は發展慾、權勢慾、事業慾等からである。然るに今此の發展慾、事業慾が高き人格の抱負であり止み難き願望であつて、人間の向上に資し社會に貢獻する事柄であるならば、それは世

に最も難有いことである。何となれば本來金といふものは人間生活の一手段といふに止まるものであるからである。されど一般人心の趨向を見れば一方には恒産による生活安定といふ事を主義とするために、何時しか其の人の心を驅つて守錢奴となし終る事のあるやうに、一方には徒らに成金になりたいために種々の事業を起すものがある。其の表面は社會的の事業慾のやうに見えて實は黃金萬能宗の拜金奴である。拜金奴も守錢奴も進むと守ると積極と消極との相違はあつても、孰れも同じく自己本來の面目を忘れて金に眩惑された夢遊者である。

今毎日の新聞廣告を見よ。如何に多くの成金志望者が哀れにもすざまじく、自信を擲ち自德を沒却して奮鬪して居る有樣がうかがはるるではないか。世人は之を世の爲に計る事業慾の結果と見るであらうか。或る飮料や菓子や或る新藥や賣藥や或る雜誌や出版物や、或はやや成功するものあれば忽ちに之に模倣するものが出來、或はあらん限りの廣告心理を應用して、人心の誘惑をのみこれ事として居るといふ事が明かではなからうか。而かも是等の廣告物は人生の向上に貢獻するものであらうか。吾等の眼から見れば其の大部分は無益有害である。仁丹、キャラメル、有田ドラックでも少しも人生に必要なものとは認めない。種々の出版物、通俗雜誌の如きも其の內に多くの弊害と惡德とを認める。吾人は玆にも現在の優勝劣敗、弱肉强食の社會現象を認めることが出來る。此の黃金萬能の氣風に驅らるる大小の戰鬪者は、其の一部が成功者となり一部が敗殘者となる。而して其の戰場となつた處の社會は、物資は徵發され人心は踏み荒されるのである。

○

近來中產階級とかいふ名稱がある。思ふにこれは其の財產の分量により、現在の生活に不安を感じない程度のものに名づけ

だものらしい。或人は此の中產階級が續々と失脚して、無產階級に仲間入りして行くのが現世の狀態であるといつた。然るにこれは單に財產の分量から見た表面的の觀察であつて、例へば親の作つた固有財產を流動資本に主義がへをして之を失つたやうな場合のことである。

今一度觀方をかへて其の財產の性質若しくは其の人の氣質から觀る時には、或は之を恒產若しくは恒心階級と投資若しくは虛榮階級とに別つことが出來るかも知れない。

恒心階級の中には代々續く分限者もあれば其の日に困る貧乏人もある。しかし恒心者は常に自ら持し自ら重んずる事が強く只自分の力に賴り何處迄も努力する。卽ち分限者でも贅澤虛榮等に對するあこがれがない。岩崎彌太郎氏の母堂は老後にも自ら手機（はた）を織つたとの話もある。又貧乏人は車夫でも髮結でも一生懸命に働いて、貯蓄をなし子を敎育して相當の人間に仕立てて行く。其の他職人でも縣廳の給仕でも小學敎師でも、恒心あるものは常に必ず自主獨立の氣があつて、絕えざる努力により其の運命を開いて行くのである。固より其の成功と否とは其の人の素質卽ち佛敎に所謂業が異なり、利根と鈍根とによつて異なるけれども、孰れも其の人格に於ては恒常である。一般に人は金があつて高等敎育を受ければ立派な人間になられるやうに思つて居るけれども、常に溫室で咲かせた花よりも自然の花が如何に見所が多いかも知れない。昔から世に貢獻ある發明家、經世家、事業家、學者でも其の確實なるものは常に恒心から出來た產物であつて、必ずしも學校敎育の高さや財產の多少にはよらない。エヂソンでもメンデルでも後藤子でも二宮尊德でも皆其の通りである。

次に投資若しくは虛榮階級には、藝者を總揚げして紙幣を撒きちらしたといふ船成金もあれば、金あれば飲み無くなれば働

くといふ渡り者の勞働者もゐる。相當の收入ある者でも旅館の女中を分外の茶代で賑はし、一方には米屋を借り倒すといふ連中もある。都會の華美や賑はひは主として此の階級からの副產物である。此の階級は自主といふよりは人に依り社會を相手にして行くものであるから、成金は威張り世を蔑り、敗殘者は羨み呪ひ棄鉢になるのである。

○

又此の頃資本階級と勞力階級といふことが流行語になつて居る。思ふに此の資本階級とは財產家といふ意味ではなく、流通資本による事業家といつた方が却つて適當であるかも知れない。卽ちこれも余の所謂投資階級に屬する。斯く見る時に恒心者は不變性のものであるけれども、流通資本者は絕えず變化するものであるから、昨日の資本階級も今日は無產階級となる事も多からう。

所謂勞力階級も余の所謂虛榮階級に屬すべきものであつて、今日資本階級との爭鬪は、恒心なきものが互に己れに不利なる點から相憎惡反目する心から起つたものであるらしい。互に同じ獲物を奪はんとする爭鬪である。弱肉强食の最もあらはなる社會の現象である。此の爭鬪精神が其の社會の群集を支配するときに、特に虛榮階級は理性を失ひ感情に支配され容易に破壞的となつて、社會を混亂させるやうになる。所謂ミヅ商賣（例へば何時お客がかかるか豫め知る事の出來ぬ見ず商買）の料理店花柳社會等に極めて卑しき低級の迷信が多いやうに、此の虛榮階級にも極めて群集的に暗示され易い雷同し易い氣風のあるものである。恒心階級は之に反して理性的で自己內省が强く、社會からの暗示を受ける事が少ない。此の恒心階級が社會の大部を占める時に其の社會は堅實であり、虛榮階級が勢力を得る時に其の社會は益々動搖混亂するものである。農村は恒心階級であり都會は虛榮階級である。

〇

又學生時代といふ事に就いて一寸考へて見る。余等の先代頃は例へば一つの辭書を數人で使つた。余等の時代には寄宿舍でも下宿でも六疊坐敷に二人同室した。今の學生は讀むに書籍は自由で一室を一人で占め、それでなければ勉强が出來ないといふ。現代の社會は生活難とか住宅難とか至る處に聞かされる。思想浮薄な社會には常に矛盾が多い。昔も生活や住宅や決して安樂であつたのではない。只質素であり儉約であつた。今は生活に對する便利安樂以上の贅澤と誘惑とがある。卽ち今日の生活難住宅難は飽くなき慾望の不平である。昔は流通貨幣が少ないために人が質素であつた。今はそれが多くて自由に贅澤をなし得るがために益々金が缺乏になる。物質の分量の關係ではない。恒心の有無の相違である。其の贅澤の結果は常に人が生活に對する抵抗力、耐久力を弱くし、思想が浮薄になり、感情的過激破壞的になる。又昔と今との相違は、今は交通、印刷が盛んになつたがために思想の宣傳が容易になり、これが社會人心を驅り特に靑年血氣のものをそそのかして之を群集化し其の氣風を惡化するやうになる。

〇

余が中學卒業の時、父は余に高等の學校に行くことを許さなかつた。余は憤慨して「自分は相續を弟に賴み獨立獨行して自分の志を立てる」といつた。父は「父の意見を尊重することが嫌ならば何故に今迄父の世話を受けないでやらなかつたか」と詰つた。是が非かは知らず親には親の意見がある。自分の意見の爲に他の意志を沒却する事は出來ぬ。自分の意見は自分で實行すればよい。子は親の意見を容れず、而も親は子の意見を尊重しなければならぬといふ理窟は成り立たない。余はここに於て親父の一言に一本參つたのである。卽ち余は其の後策を運らし、他人の世話で高等學校に入

學するに就き、父の了解を得るやうになつたが、後又父から取り返されて父の世話で大學を卒業することが出來たのである。

徳川、明治、大正と時代は絶えず代り行くとも、昔も今も、「地震、雷、火事、親父」の諺のやうに、子から見れば親父は常に恐ろしいものであり、舊式思想であり、分らずやである。これは子の親父に對する感情である。決して現代にのみ限つたことではない。何となれば何時の世にも常に親父は子よりも年が長じて居るからである。先日も東京日々新聞の記事で自殺者の報道の内に、「親父とソリが合はなかつた」といふ見出しが附いて居た。此の言葉は世の子に對して、「親父は子に對して充分の理解を持たねばならぬ義務がある」といふ思想の暗示として働くものである。親父からいへば子の心を理解しなければ當然悲しむべき運命に遭ふべきもので、「子を觀るは父に如くなし」といふ諺もあるやうに、これは親の子に對する本來の情である。然るに子が親に對して此の要求を以て當然の權利として暗示さるる時には「子は親を了解しなければならぬ」といふ事は全く等閑となり「どうせ子は若氣の者であるから」と自ら自分を寛恕するといふ結果になる。扨斯樣なことは恒心あるものも、無いものも其の親父に對する感情は同一である。只其の異なる處は、恒心あるものは自重心があるから、其の感情を抑へて親父の意見をも尊重することが出來る。之に反して恒心なきものは自己の感情のままに親父の意志を沒却破壞しようとする。更に此の心は本人に丈け極めて便利なる勢力である處の所謂現代思想と名づけらるるもので、實は社會的暗示、群集心理的感情に尻おしをされて、益々反抗心乃至破壞的自暴自棄の心を強めるのである。斯くの如くして恒心といふものが次第に社會の人心から失はれて行く。恒心あるものは子として親の

意見を沒却しないやうに、人として社會に於ける他の人々の心をも沒却しない。人が此の世に生れるのに親の性質や境遇や種々雜多である。或は親の遺傳が惡いとか或は親が貧乏であるとか、各人が一々之を怨みかこつても追ひ付いた話ではない。各人互に各其の機根に應じて生の力を發揮して行くより外に道はない。世の中の人々の心でも同樣である。其の氣質、主義、地位、力量等千變萬化である。或は親父の意見を沒却し或は成金を暗殺し或は世の華美を燒き盡したりとも、決して自分に少しも獲る處はない。矢張り本の杢阿彌である。吾人が只人の事よりも先づ我を自重しベストを盡して世に奮鬪するより外に途はない。現世の所謂思想で、先づ物質上財產を統一し均一にしようといふのが、所謂共產主義であらうか。此の物質的差別の起る基礎たる氣質や力量を統一し均等にするのが、平等主義とか均力主義とかいつてもよからうと思ふ。

尙ほ附言しなければならぬことは、ままならぬ浮世に生けるものは、皆世に對する不平や憤慨の感情の湧き出づる事は同樣である。恒心者にも無恒心者にも同じ人情である。此の故に世上の傲慢や虛僞や其の他の惡德を惡むことも同樣である。只其の相違する處は、恒心者は其の感情の強い程益々自ら省み自ら重んじ、自分の力と德とを養はんとする傾向がある。之に反して恒心なきものは自ら省みず徒らに人を呪ひ世を破壞せんとして、現代不平の宣傳思想の暗示を受け、甚だしきは近來の所謂危險思想となるのである。

○

思想とは事實に對する說明である。事實に合致せざるものは空想である。事實を離れて思想ありと考ふる者は、それは言葉の遊戲である。智惠の駒の玩具のやうなものである。危險思想とは空想であつて事實に合致せず、恒心なきものの不滿の感情

から世の中の實際を離れ所謂理想と稱する蠱惑的言語に魅せられ直ちに之を實行せんとして、破壞的行爲に移り易きものを稱するのである。

共産思想

東京日日新聞の角笛欄に「納豆賣り是非」の問題で、次のやうな事があつた。「毎晩々々カフエーやバーで酒と女とを求めて暮す一部の學生の使ふ金と、汗と膏とに黒くなつて働くものの得る尊い金との平均される時が來ないものでしようか（一印刷工）」といふ風に苦學生の不平が漏らされて居る。所謂現代思想の影響を受けて居るといふ事が其の語の内に現はれて居る。

寶丹宗に身家盛衰循環の圖といふものがある。圓を二重に畫き中央に心の字を書き、其の周圍に富足、驕慢、奢侈、淫暴、禍變、困窮、悔悟、勤苦、節儉、貯積と循環の圖を示してある。これは吾人の人生に於て大小輕重の差こそあれ絶えず循環して止む時はない。それは一日一時期一生の内にも行はれて居る。

吾人の身體には榮養と消耗と絶えず新陳代謝して居るやうに、吾人の心にも失策と成功とが絶えず新陳代謝し、社會にも前の循環圖のやうに盛衰が絶えず新陳代謝して居る。之が吾人の生命なり社會の活動なりの現象である。若し之が平均してしまつた時には、そこに吾人の生命もなければ社會も成立しない。其の平均思想は事實を離れた空想である。

前のカフエーびたりの學生は或は今奢侈の時期にあるかも知れぬ。間もなく悔悟の時が來る。汗と膏との苦學生は今勤苦の時期にある。間もなく富足の時節が當然到來すべきである。此の苦學生は多少現代思想にかぶれんとしつつも尚ほ一生懸命努力奮鬪して居る。これが余の所謂恒心あるものである。

近き昔は大守の御通りに土下座をした。老人は涙を流して今の世を悦ぶ。これが感謝の情である。今の若い理想家は高貴の

人とアグラをかいて冗談話をしたいといふかも知れない。そんな時代はたとへ小說にあつても決して現實に來ることはない。貴賤とは力量の多少であり、德卽ち人格の高下である。人には各其の業、機根、素質が違ふ。これが人生の開け世の發展する原動力である。

現代は事業家跋扈の時代といつてもよいかも知れぬ。前代權力跋扈の時代は循環して今は四民平等となり自由となり、華美贅澤も野心も誘惑も新聞一面の廣告も大びらに思ふがまま行はるるやうになつた。斯くして其の事業といふものが或は益々今日の貧富の懸隔を大にしたものかも知れぬ。次の時代は或は思想跋扈の時代が來るかも知れない。權力でも事業でも思想でも常に其の正しき道を逸したものは其の世を亂り時勢を壓制するものであり、其の正しいものは常に世の新陳代謝の權衡を保つて行くものである。此の權力、事業、思想孰れも世から之を破壞し滅却する事が出來ると思ふのは大なる迷想である。それは恰も世から怒りや戀を取り去らうとするのと同樣である。破壞する事は出來ない。唯循環し新陳代謝して行くものである。

正しき判斷

判斷とは事實の說明である。判斷の極致は事實其のものを如實にピッタリと捕捉することである。恩師理學博士近重先生は其の著「禪學眞髓」の內に三段論法と一段論法とを舉げ、眞理は唯此の一段論法によつて得らるるものであるといふ風にいはれてある。

吾人が物を觀察するに客觀と主觀といふ區別を用ひて居る。客觀とは我から我に對する他の對象を觀察するものである。といふのはよいが、物を觀察するものは常に我であつて決して他のものではないから、主觀とは我から我を觀察する事であるといへばそこに矛盾がある。何となれば我身長なり頭の重さなり我氣分なり思想なりを觀察批評

する時に、それは既に我に對する他の對象となつて居るから客觀といはなければならない。然らば主觀とは我其の儘の我であつて、觀察判斷の起る時それは既に客觀であるといへないであらうか。此の主觀が卽ち一段論法で判斷が三段論法ではあるまいか。例へば我が花なり戀人なりに對する時、其の時と場合とに於ける我其のまゝの我である時、(言葉をあやつれば却つて色々の混雜を起すけれども)我は花の內に溶け花は我となり終つて、二者ピッタリと合一した時に之が主觀である。其の時若しあれは櫻である、我は櫻を見ても心の結ぼれが解けぬとか、彼の目付が愛らしい、我に靡くであらうかと思へば、それは客觀である。又例へば我に頭がある。今我は現實であると批評も判斷もない其の儘の我である時に主觀である。若し我頭の重さは如何、今我は夢に非ずやと觀察する時客觀となるのである。

禪家の語に初一念といふ事がある。例へば禪定から醒めたとき、ハッと自分の事に氣が付く。これが初一念である。續いて良い氣分であつたなと思へば第二念である。これが悟りであると思へば第三念である。卽ち其の第一念から聯想、思考が續々と起つて來る。既に第二第三念となれば種々の誤解があり迷ひに染みて、これが悟りであると思つてもそれは最早悟りではない三段論法であり一段論法ではない。此の初一念は禪定の時に限らず、吾人が或は物に驚き或は喜ぶ時其の刹那には、我其のままでであるが、ハッと我に返る時それが初一念である。同じく花若しくは戀人に對して我が其の內に同化した時我其のまゝであつて、我現在にハッと振顧みる時初一念である。此の我其のまゝ卽ち純主觀が本來の眞であるといふのではあるまいか。我頭の重さを知らず、我は今夢ではないかと思ひのない時に、それが本來の我であつて生の力の最もベストに活動する處ではある

まいか。此の關係は余の神經質の治療に於て最も明かに之を見る事が出來る。例へば本人が頭痛、耳鳴、胃の不快感、便祕、心悸亢進がすると思ひ、苦痛、煩悶があると苦慮し、强迫觀念があると取越し苦勞する時に、其處に初めて是等の症狀が益々增惡するが、之に對する思考判斷を全く沒却して我其のまゝになつた時に是等の症狀は全く消失する。何となれば神經質に起る千變萬化の症狀は皆實は精神的の執着から起るもので、本來決して實質的のものでないからである。而も神經質では只其の判斷の錯誤、心の迷妄によつて如何なる重篤の症狀でも起り得るのである。判斷の錯誤、迷妄の執着の恐るべきは之によつても解る。

扨吾人が客觀的に事物を觀察判斷するのは我と對象即ち外界內界（自己の身體內部に起る變化、精神活動等）の現象との間に於ける相對的のものであるから我といふものの場合と時との異なるに從つて其の對象も之に相當して變化して見えるのである。例へば井戶の內で物言ふ時に聲が異樣に響き、前にこゞみて股の間から外界を見る時に其の景色が異樣に見え、自分が自働車に乘る時と通行人として自働車を見る時と其の自働車に對する感想が違ひ、自分が治者として被治者としてと其の立場によつて世の人に對する觀察が違ふ。又自分が爽快の時と饑餓の時と、醉つた時と寐醒の時と皆其の時々に同じ對象が變化して觀察されるのである。

斯くの如く正しき判斷には常に先づ第一に我の立場といふものを明かに定めてかからねばならない。此の事を忘れて決して正しき判斷の出來るものではない。之には常に自分を客觀的に觀察する事を練習しなければならぬ先入主とか我情とか我の執着とかいふものは、自己を觀察せず我の地位境遇を度外視して物を判斷する事から起るものである。例へば自分は死を恐れる、

生の不安がある、といふ立場から世の中を見るときに、其の我情に支配さるるがため諸行無常是生滅法といふ事を考へるのさへも恐ろしい。卽ち何とか自分で都合のよい安心の出來るやうに曲げて判斷をしようとして、ここに種々の緣起や御幣かつぎが起る。或は人が自分に陰鬱、悲觀の氣分の苦痛を惑ずるものがあるとする。此の時には其の人が此の苦痛から脫せんとして樂天主義を工夫し、世の中の事實を曲げて自己の安心を得ようと努める。ここに種々の判斷の迷妄が生ずる。斯かる時若し吾人が深く自己を客觀的に觀察して、眞に自己が死を恐るるものであるといふ感情の事實をつきとめ、或は自己が陰鬱の本性を捕へ得た時にはここに初めて正しき人生觀を得自己をも外界をも如實に正しく判斷する事が出來ようと思ふのである。嗜酒者が酒を百藥の長なりといふのも自分の嗜酒の感情と社會に於ける酒の事實とを明かに區別して見る事の出來ないから起る事である。又現在社會に對する感想でも、若し自分の立場を明かし、一方には縱に古今の社會現象を檢し、橫に生物乃至廣く人類界の現象を觀察するときに、初めてここに正しき判斷が出來ようと思はれる。彼の禪家で初一念から次第に聯想の起るに從つて迷妄となるといふのは、自己の立場と外界との關係を明かにすることの出來ないから起る迷妄を次第に重ねて行くからの事ではあるまいか。

クーエ式自己暗示法の價値

エミール・クーエ氏の創意に係る誘導的自己暗示法は、藥物療法の代用ではない。これは吾々を不死にするものでもなければ、又人生のあらゆる疾病から全然吾々を免除し得るものでもなからう。然し其の總ての含蓄が實現せられ、又その總ての資力が十二分に發揮されたら、將來どうなるか吾々には分らぬ。只この法則に依つて育てられた時代は、今日のやうに疾病に惱める人間の多い時代とは、非常な相違のあることだけは疑ひがない。とは言へ吾々の直接の利害は現代にある。

今日の成人は其の無意識中に、幼年時代から累々と積み重ねた不良な暗示で一杯詰つた記憶を持つてゐる。だから誘導的自己暗示が先づ第一になすべき仕事は、この精神的廢物を一掃するにある。この事が完成されない間は、眞の人間が現はれず、自己暗示の創造力が眞價値を發揮し得ないのである。

此の方法を使用する時は、人々は病氣の極めて少ない生涯を享樂することが出來るだらう。しかし此の方法が如何ほど大なる役目を演ずるかは、吾々が其の實習を規則正しく、且つ正確にやるか否かに大いに關係する。たとへ疾病が吾々を襲ふとも、吾々は自己の精神内に、それを驅逐し得る有力なる手段を持つてゐる。しかし、此の事は、外部から其の病氣を撲滅させる補助的手段を無效にするものではない。自己暗示と普通の藥物療法とは、兩々相俟つて互に補佐し合ふものである。だから諸君は病氣になつたら、從前通り醫師をよぶがよい。そしてその治療的效果を促進し擴大するために、誘導的自己暗示法の助力を借るべきで

ある。

此の點から、自己暗示は病氣の性質や、又其の症狀の輕重如何に拘はらず、すべての疾病に利用さるべきである。總ての疾病は精神の作用で重くも輕くもなるものである。吾々は決して中立的の態度を取ることは出來ない。つまり吾々の精神を疾病の事ばかりに集中すると、遂にはその疾病の爲に身を滅ぼし、又はその疾病に對抗すると、疾病を撲滅し得るのである。處が吾々は兎角自發的に、常に前者を取る傾向があるのである。

暗示療法は常に機能障害や神經障害にのみ有效であるといふ一般の意見は、事實と相異してゐる。クーエ氏が三十年間の實驗中、數千人の患者を治療したのであるが、氏は其の間の經驗によつて、器質的障害も機能的障害と同樣に、換言すれば肉體的故障も、神經的及び精神的故障と同樣に、容易く治療し得ることを發見した。氏はそんな差別を設けない。疾病はどんな性質のものでも要するに疾病である。クーエ氏はこの論法で疾病を取扱つてゐるので、氏の治療は成功の結果に多少の差こそあれ、九割八分までは快癒してゐるのである。

精神內の自己暗示機關に故障を生じてゐる永續的精神病者は別として、誘導的自己暗示が成功しないと言はれてゐる患者に二種類ある。その一は智力が馬鹿に低くて、かういふやうにせよと言はれてもそれが全然理解し得ない人達で、他の一は、有意的注意力が缺けてゐて、數秒間と續けて一つの觀念を持ち續けてゐる事の出來ない人達である。だが、この二種の人々は、數の點に於ては殆んど數ふるに足らず。全體の二パーセント以上には出ない。

自己暗示はまた外科療法の補助としても等しく價値がある。勿論折れた骨は自己暗示だけでは癒らないから、外科醫を呼ばなければならぬが、其の折れた足なり手なりが接ぎ合はされて、必要な機械的の豫防が講ぜられたら、其の回復に一番よ

い狀態を提供するのは自己暗示であらう。尙、又ややもすれば後々までも殘る跛足とか、硬直とか、醜い畸形とかにならないやうにしたり、普通の恢復期間を著しく短縮したりすることが出來る。

又自己暗示で癒つたものは永續しないといふことも時々言はれるが、これは全く人爲的な抗議で、自己暗示の本當の性質を知らず、單に療法としてのみそれを見てゐることから起るのである。吾々が或る病氣を癒す爲に自己暗示をやるのは、吾々の無意識を健全な思想で滿たし、其の特別の疾病ばかりでなく、他の疾病となるべき傾向をも共に根絕するのである。

たとへ或る疾病が除かれたとしても、吾々の精神が不健全な思想に復歸するやうに許しておくならば、其等の思想は他の思想と同様に實現されて、吾々は再び疾病の犧牲となるのである。その病氣は前と同じ病氣である事もあればさうでないこともある。それは吾々の思想の性質如何によつて異る。だが一般的公則を規則正しく用ひるならば、吾々はかかる再發を防止することが出來る。故に吾々は精神の不健全な狀態に立戾る代りに、更に進んで、既に吾々に健康を與へてゐる健全な創造的思想を一層強くし、日一日と吾々の病氣に對する防備を堅固にすることが出來る。かくて吾々は以前の疾病に再び罹らないのみならず、將來に於て我等を待つてゐる幾多の疾病をも、其の行手から一掃することが出來るものである。

私はナンシー實驗所で卽座に治療した實例を幾らも見た。然し數日間に奇蹟的になほさうといふやうな考へを以て、誘導的自己暗示を初めるのは間違ひである。しかし熱烈なる信念を以てすればそんな結果を得ることもあらう。否、それどころではない。第二者の援助を求めずしてそんな結果を收めた實例も澤山記錄にある。一例を擧ぐれは、余の友人、ボルドーのアルベール・ペー氏は、十年餘りも、顏面神經痛で惱んでゐたが、クーエ氏の

事を聞いたので、氏に宛てて一通の手紙を書いた。處が一般的公則を反復せよと敎へられたので、彼は命ぜられた通りしたのであるが、神經痛は二日目になほつて、爾來再發しないのである。だが、かういふ信念は普通にはない。卽時治療は例外であつて、吾々としては漸次的快癒を望む方が、遙かに安全であると思ふ。かうすれば絕望に陷ることもないであらう。實際クーエ氏自身でさへ漸次的治癒の方を推賞し、此の方が遙かに確實で、且つ不良な狀態に邪魔されることも少いやうだと言つてゐるのである。

吾々は、他の科學的發見と同樣な理性的態度を以て、自己暗示法に接しなければならぬ。其處には何等の詐術もなく、又經驗の證明し得ない敍述をも許されない。しかし吾々が最も注意しなければならぬことは、智的好事家の態度であつて、彼等は生命の重大事を食卓に拂ふべき小錢と同樣になすものである。自己暗示は宗敎の如く實行すべきものである。或る人が基督敎の信仰箇條を熟知したからとて、その人は決してその爲に少しも善になつてはゐない。神及びその使徒等を愛する純朴な精神は、神學に關しては文盲の輩であつても、其の生活中に基督敎の眞髓を生かしてゐるものである。自己暗示に於ても亦その通りである。

自己暗示は又生理的疾病と同樣に、道德的犯行の治療にも效果がある。卽ち、飲酒癖、盜癖、習慣的藥用者、過度の若しくは變態の性慾、其の他性格上の色々な缺點にも應用されて、重症にも輕症にも同樣に效果がある。又特別暗示を用ひれば、味覺を變化させる事が出來る。從つて生來嫌ひであつた食物を好むやうになつたり、又飲みにくい藥も飲みよくなつたりする。更に又、道德的方面の應用にも盛んに推奬される處から、今やクーエ氏の方法は佛蘭西公立感化院にまで採用されんとしつつある。尤も其處までは、改革に對する官僚的の嫌惡が一つの障害になつてゐるので、どうな

るか分らないが、兎も角犯罪者治療上に此の方法を適用することは、近き將來に於て著しく發展すると期待されるだけの充分な理由がある。

又、或る障害を豫知する點では、クーエ氏の誘導的自己暗示法は、如何なる意味に於ても催眠的暗示に劣らないと言はれてゐる。クーエ氏自身も最初は催眠術者であつたのだが、其の結果に不滿を抱いて、もつと簡單な一般的な方法の研究を始めたのである。意識的自己暗示は、其の便利な點は別としても、催眠術よりは遙かに得る所が多い。即ち、催眠的暗示の效力は、その治療後僅かに數時間で消滅してしまふ事があるが、誘導的自己暗示の結果は、一般的公則のお蔭でます〳〵增大されて行くのである。

茲で吾々は再び暗示者の問題に觸れる。吾々は、暗示者はいらない。自己暗示は一人でやつても充分な效果が得られるといふことを既に知つたが、或る人々はいくら言つて聞かされても、この事實を受け容れる事が出來ないで、何か不滿足な意識を持つ。つまり、從來のよからぬ暗示の塊が山ほど積み重なつてゐるので、之を動かすことは出來ないと自分できめてしまふのである。そんな人々は、一人の暗示者は確かに助けになる。彼は受動的態度を取つて、暗示者の發する觀念を受け容れる外には、爲すべき事は何もない。だが、それにしても、一般的公則を反復することに同意しなければ、其の結果の出ることも極めて弱い。

然し自己暗示を一種の療法として見てゐる間はまだ〳〵その眞價を知つたものとは云へない。第一にこれは、今日まで世に行はれた諸種の修養法の中で、最も有力なる自己修養の一手段である。吾々はこれによつて、自己に缺けた精神的特質——即ち、能率、判斷力、創造的空想力等、總て吾々の生活の計畫を助けて成功せしめるものを發達させることが出來る。吾々の大多數は、才能が挫かれたり、能力が發達しなかつたり、衝動性がそ

の生長の途中で阻止されたりすることを知つてゐる。しかしから云ふことが吾々の無意識中に存在するのは、丁度深い森の中で周圍の木蔭に被はれて、日光や空氣の不足な爲に生長することの出來ない樹木のやうなものだ。だがこの自己暗示法を用ふれば、それ等のものに、成長に必要な力を供給する事が出來るし、又意識生活の中にその實を結ばせることも出來るのである。吾々がどんなに年老いてゐようと、病身であらうと、我儘であらうと、弱からうと、惡癖があらうと、自己暗示は必ず吾々に何かよい事をしてくれる。それは吾々に修養と訓練との新手段を與へて吳れるので、それによつて吾々は『未熟な表現』や『不確實な目的』を力あるものに育て上げ、又よくない衝動を根本的に絶滅させることが出來る。これは本來個人的實習である。卽ち精神の個人的態度である。ただ狹い觀察が色々な部門に分類して、これに應用したらよいか、あれに應用せねばならぬとか論じ立てるのである。それは全體に於て吾々の存在に觸れるのである。波浪の立ち騷ぐ海面の底下には靜かな深淵がある如く、地方的な住民、其の名稱、其の習慣、意見、奇癖などと立ち騷ぐ小さな自我の奧底には、力の大海が存在してゐるのである。で、諸君が自意識の三稜鏡に依つて、たとへどんなに惡化されたとしても、結局諸君に屬するものは、皆其の大海から出て來るのである。自己暗示は、此の究極的存在の平和な力が、現在今此處に於ける吾々の生活の水平面にまで上げられる通路なのである。

此の自己暗示は吾々の將來に如何なる前途を展開せしめるのであらうか。

自己暗示は我々に、生活の重荷の少くとも大部分は、自分自身の創造したものであると敎へる。吾々は自己の心內に、又その周圍に吾々の精神の思想を再生する。それが追々と進んで行く。それは吾々に、是等の思想が惡ならばこれを變じ、善

ならばこれを育くみ、吾々の個人生活を一樣によくして行く手段をも提供する。然し此の過程は、個人を以て終るものではない。社會の思想は社會狀態に於て實現され、人類の思想は世界の狀態に於て實現する。その幼年時代から自己暗示法を知り、且つこれを實習して育つた時代の人々が、今日吾々の接してゐる社會問題、國際問題に對する態度はどんなものであらうか。恐怖と疾病とが個人の生活から掃蕩された時には、彼等は國民生活を固執するであらうか。總ての人々が各人の心內に幸福を見出した時でも、尙所有に對する妄覺的な貪婪が殘るであらうか。自己暗示法を受容することは、態度の變化、生命の再評價を惹起する。若し吾々が西に向つて立てば、只雲煙漠々たる空の外は何物も見ないのに、僅かに頭を一轉することによつて、廣々とした日の出のパノラマを眺め得るやうなものである。

クーエ氏の發見が吾々の敎育法に深刻なる影響を與へたことは論ずるまでもない。從來吾々は只直接に意識心のみを取扱つて、それへ知識を詰め込んだり、有益な才藝を接木（つぎき）したりしてゐたのである。だから今まで性格發展のためになされたことは、皆偶然な第二義的のことばかりであつた。無意識が發見されなかつた間は、これも仕方がなかつたのである。しかし今や吾々は更に深奧な場所に達する手段を得、兒童に、單に讀書算術ばかりでなく、身體の健康、性格及び人格をも附與する手段を得たのである。

然し最も大なる革命が期待されるのは、犯罪者の取扱法である。彼等が投獄されるに至つた行爲は、無意識心內に於ける思想の混亂に外ならぬといふのが、斯界の大家達の意見である。しかし自己暗示法は百尺竿頭更に一步を進めて、何故にかかる性格の不調和が生ずるかを示してゐる。クーエ氏が殺人的傾向ある一青年を道德的健康狀態に立ち戻らせることに成功した今日、何故に此の同

一方法が、監獄内にゐる多くの追放者等に成功しないことがあらうか。少くとも年の若い犯人は感受し得るであらう。然し此の態度の下に横たはる觀念は、吾々の刑法制度に於ける革命を惹起させる。それはかういふことである。卽ち犯罪は疾病であるから疾病として取扱はなければならぬ。懲罰觀念は治療觀念に、復讐的態度は慈善心に地位を讓らねばならぬ。これこそ眞に吾々を新約聖書の理想に近づかしめるもので、且又、善をなす力として自己暗示法を深く宗教に接觸せしむる所以である。

自己暗示法は、世の聖人君子が萬世を通じて公布した内面生活の教義を教へ、内には靜穩、力量、勇氣の泉ありと説き、人一度、自己の内面の世界を支配することを得ば、たとへ如何なる事件が眼前に落下しても、自若としてこれに對面することが出來ると教へる。この眞理は偉人の生活に見ることが出來る。又、殉教者が焚刑の柱に繫がれつつも、讃美歌を誦するは、彼等の眼が内に向つて、胸中に溢れる榮譽の幻影を追ふからである。古來の偉大なる事業はたとへ外部に反對の聲如何にかしましくとも、内なる聲の命ずる所に從ふ堅忍不拔の精神を有する人々によつて成されたのである。

基督が彼の弟子達に病を癒す奇蹟を行ふ爲に與へた力は、僅かに數人の選ばれた人々に限られた才能ではなく、萬人に遺された遺產であること、又彼が譬喩を以て説いた吾々の内なる天國は、吾々の日常生活を向上させる爲に、又更に健全なる肉體、更に善良なる精神を得るに大いに役立つたことを想像して見るがよい。クーエ氏の公則に含まれてゐる斷定は、一種の祈禱ではあるまいか。それは自我生活以上の或るもの、卽ち吾々の背後に橫はる無限の力に訴へるものではあるまいか。

自己暗示は宗教の代用ではない。それは寧ろ宗教の甲胄の上に附加せられた一の新武器である。若し單なる科學的技術としての自己暗示法が、かくの如き結果を生むとすれば、これに宗教の形體を附與し、完全に對する高き憧憬の表現としては、果して何事か成らざらんやである。

── 本會發行近著『クーエ式自己暗示法』の一節 ──

編輯室日誌

——五月、六月——

五月廿六日(土) 午前、「近世變態心理學大觀」の件に付、主幹警視廳へ出頭す。

廿八日(月) 午後、主幹警察講習所講義。

廿九日(火) 「變態性慾」六月號發送。夜、主幹川崎記者同道、神田青年會館に市民自由大學特別講演を聽く。これは曩の日あつた杉田醫學博士の「精神現象の科學」に引續くもので、同博士の紹介に依る交靈者の實驗と、水野葉舟、石田勝三郎、野尻抱影三氏の交靈現象に關する講話とがあつた。該實驗者は中野薫といふ十二歳の少年であつたが、實驗は單に自動書記の現象に過ぎず、それさへ不完全極まるものであつた。そして、その推賞者は例の淺野文學士であつた。

卅一日(木) 醫學士杉江董氏逝去。午後、主幹告別式に參列す。午後、會友鹿兒島縣指宿中學校長井上專敬氏來訪。

六月二日(土) 夜、主幹築地精養軒に開催されたるヨッフェ氏の日露交驩會出席。

三日(日) 午後、主幹木戸侯爵家に於て講演。

四日(月) 午後、主幹警察講習所講義。

五日(火) 「變態心理」六月號發送。

十日(日) 午後一時より本會樓上に於て變態心理講演會開催。森田、佐藤兩先生の別項所載の講話があつた。中村主幹は「色情性犯罪者の數例」と題して、專らデリニアスコープの映寫を以て、決して他では見られないやうな珍奇な寫眞の說明があり、觀者に多大の興趣を與へた。會する者四十餘名、頗る盛況であつた。

十一日(月) 午後、主幹警察講習所講義。「變態心理學大觀」第一回發送。

十三日(水) 同じく「大觀」發送。

十五日(金) 午後、主幹警察講習所講義。「變態心理學講義錄」第五期第二冊發送。

十八日(月) 午後、川崎記者內務省出頭。「變態性慾」七月號校正の一部の內檢閱を乞ふ。

二十日(水) 午前、會友鷲山弟三郎氏來訪。

廿二日(金) 午後、主幹警察講習所講義。

廿三日(土) 主幹、國府津に赴く。

廿四日(日) 夜、主幹歸京。

廿五日(月) 午前、川崎記者內務省出頭。「變態性慾」內檢閱未了。

廿七日(水) 本會贊助員函館太刀川善吉林濁川兩氏來訪

廿八日(木) 「變態性慾」內檢閱漸く濟む栗山記者來訪。同氏新著「信仰生活の諸現象」出來。

廿九日(金) 午後、主幹、警察講習所講義。

前號正誤

大月徹誠氏の「夢の錯覺的性質」中、(ハ)錯嗅と錯味の末段三行(六五七頁)は、(ロ)錯聽の末段へ組み入れるべきものでありました。筆者からその旨申して參りましたから訂正致します。

なほ『好いぢやないかに就いて』の筆者大下倉太郎は木下倉太郎の誤寫でした。

―大正十二年五月―

犯罪

■茨城縣石岡町木比提神社入口國道側の溝中に、四日朝六時頃全身紅に染つて昏倒して居る男あるを發見大騷ぎとなり取調べた所、那珂郡五臺村山×靜（四四）と云ひ、前夜內緣の妻に當る石岡町料理店稻×うめ方に來た所、うめが土浦町內西洋料理店稻川屋事小×倉庄×（四四）と同衾し居るのを發見、憤怒の餘り兩人を殺害せんと企て、出刄庖丁を携へて同家に闖入し、大格鬪の末庄×を殺害したが、うめは逃走した旨自白したので稻×方に臨檢すると、前記庄×が數箇所に重傷を負ひ卽死し居り、一面血の海に化して居た。

■川越市相生町製糸工場主關×和×（五〇）は五日午後五時半頃作業中、工女なる大×くら（二一）を大鉈を以て突然斬り付け、頭部其他に重傷を負はせた。生命危篤、原因は痴情の果てらしいと。

■大阪市北區西野田中江町硝子業新×田×一（四一）方へ同居して居る同人の甥新×田進（一八）が、五日午後六時頃西成郡鷺洲町海老江壽司天麩羅商藤×まつ子（三一）を襲ひ、おまつが洗濯してゐる眞正面より矢庭に刄渡り一尺の刺身庖丁を以て、おまつの口中に突刺し下顎部を貫通させ、更に胸部に重傷を負はせ、被害者は生命危篤である。一方現場を逃走した加害者は友人の家に潛伏して居たが、六日午前六時逮捕され目下嚴重取調中。原因は加害者の伯父なる×一が內緣の妻岡×いせ（三八）があるにも拘らず、被害者おまつを妾として前記の場所に壽司天麩羅商をさせて、妻いせを毎日虐待する處から、見るに見かねた加害者は意を決してこの兇行を敢てしたもの だと云ふ。

■八日午前二時頃横濱加賀町警察署に一青年が出頭し、涙ながらに過去の犯せる罪を並べ、本年は徵兵適齡であるから宜敷く御處分を乞ふと自首したので、詰合せの係官が取調ると、此の者は靜岡縣駿東郡當時住所不定秋×朝×（二一）と云ひ、大正七年中業務上横領の罪に依り靜岡地方裁判所に懲役二ヶ年の刑に處せられ、九年一月刑務所を放免後當地方に來り、川崎町の富士紡績會社に會計係として雇はれたが、本年一月同社員が新年宴會を催すべく會費百五十圓を徵集した際、之を着服して姙娠中の內緣の妻を棄てゝ岐阜市に逃亡し、同市加納町某工場の職工として雇はれ中、三月中旬朋輩職工の金時計、銘仙袷其他價格百二十圓を窃取逃走し、大阪に飛んで西區鶴町の下宿屋富士家方に投宿し、知人なる上野小四郞名義を利用し、戶籍謄本を役場から取寄せ印章を僞造して上野に成り澄し、大阪商船會社別府通ひの汽船紫丸火夫として乘組んだが、火夫長の隙に乘じて現金三百餘圓を窃取し、今度は東京に高飛して諸所を放浪し、或日淺草の活動寫眞を見物した處、偶々映畫中に『孝女鈴江』なる題下に、貧に迫れる一少女が粉骨碎身して兩親に孝養を盡す敎訓的の寫眞があつた。見物中の朝×は孝女の行動に悉く感激し、自己の犯せる罪が空恐ろしくなり、處刑を受けた上新しき生涯に入らんとして當地に來り、斯くて同署に自首した事が判つた。

■九日午後八時頃府下大崎町字谷山八五先

で四十男と若い娘とが格闘し、娘が持つた出刄庖丁で男は胸部に負傷して居るを通行人が發見引分けると、右は同町字桐ヶ谷直江方同居魚屋石×庄×(三七)と同人長女かつ(一九)といひ、庄×が平素酒癖惡く同夜も附近で泥醉し居るをかつが見兼ねて連れ戻さんとしたるも應ぜぬので、業を煮やして強意見の末の格闘とわかつた。娘が實父に切りつけるに至つた動機は、單に實父が酒亂であるが爲めのみでなく、其の間家庭には種々複雜した事情があり、娘の行爲には同情すべき點ありとして取調を進めて居る。

■大阪南區北日東町岩×寬×內緣の妻水×とめの私生子きく(一五)は、年齡に似合はず昨年春頃から南區下寺町土商松×敬×郎(四六)長男一松(一九)と戀仲となり、親の目を忍んで媾曳を重ねてゐたが、昨年實父から嚴しく意見されて以來、きくとの逢瀨は勿論小遣ひ錢さへ儘にならぬ處から、持前の不良性を出して女に小遣ひを強請するやうになつたので、きくは若し此の要求に應じなければ男に見捨てられると娘心の淺墓さに、身の廻りの衣類や指環を持ち出しては入質し、僅な金で男の歡心を買つてゐたのをきくの母親が知り嚴重に叱責したので、戀に盲となつたきくは遂に惡心を起し、遊びに行つた同町の土商山田方奥の机上にあつた三圓入の蟇口を盜んだを手始めに、知合先まで手當り次第に物を盜み、一松に入れ上げてゐたが、遂に惡事發覺し檢擧された。因にきくは姙娠三ヶ月の身重で、數十回に亘り百餘圓の竊盜をなしたる事を逐一自白した。

■兵庫縣加西郡山本熊太郎(七七)方へ去月十六日午前二時頃強盜が押入り、折柄就寢中の熊太郎と同人の妻みさ(六九)を棍棒やうのもので強か毆りつけて、瀕死の重傷を負はせて在金全部を掻攫つて逃走し、みさはほど經て絶命した事件がある。爾來所轄署では署員を擧げて犯人の搜査に全力を注いでゐたが、何等の手掛りなく途方に暮れてゐた所、玆に不思議なのは兇行當夜熊太郎やみさと共に枕を並べて寢てゐた娘のいとゑ(二六)のみが危害を免れてゐる事で普通の強盜であれば老人夫婦にのみ危害を加へ、現場にゐた年頃の娘をそのまゝにして置く譯はないとこの點に不審を懷き、いとゑに絡まる痴情關係でないかとその方面に搜索の手を伸ばす一方、いとゑの擧動についても嚴密に注意を拂つてゐたところ、いとゑの素振が益々疑はしくなつて來たので廿日同人を嫌疑者として本署に引致し、嚴しい取調べを進めた結果、いとゑは遂に包み切れず廿一日午後三時に至り、強盜を裝うて肉親の兩親を殺傷した大罪の顚末を自白した。肉親の娘がかゝる大罪を犯すに至つた原因につき、いとゑが自白したところによれば、同女が殺害した實母みさの里方は、血統が惡いとの評判が高く、これが爲めいとゑは今年廿六歲になるも、良緣がないところから、淺墓にも自家將來の禍根を絶つべく、斯かる慘劇を演じたものであると。

情死

■三日午前十時頃、府下荏原郡駒澤村曹洞宗大學校裏手の畑道に二十歲位の女と五十位の男とがのた打ち廻つて苦悶して居た。直に係官出張し取敢ず兩人を最寄りの同大學校の應接室に連れ込み應急手當を施したので生命丈けは取止めたが兩人とも重態である。男は同郡上目黑村陸地測量部助手深×安×郎(五〇)女は朝鮮京城慶尙南道東萊屯上元里金永欽の娘の金牙只事日本名金子うめ(二一)と判明した。うめは十四歲の頃から亞港で藝妓

になり、大正九年頃迄稼いで居る內、深×の恩人で陸地測量部の技手木×又×が同地方に出張の際、うめが抱へ主の虐待を受けて居たのを同情してやつたので、うめは其後木×を慕ひ、木×が內地に歸つて以來度々救ひを求むる手紙を寄せて來たので、木×は助手の深×が同地に赴いた際伴れ來らしめ、其後は深×の許へ同居させて、月々二十圓の食費を與へ、上目黒のミシンの學校へ通學させて置いたが、いつか深×はうめと關係を結ぶやうになつたので、深澤の內縁の妻平×かれ（四〇）が感づいて、其の旨木×に告げた。兩人は首尾惡く、去月三十日靖國神社へ參拜すると稱して、別々に家を出で、諜し合せて高輪の旅館品川館に投宿して、共に恩人の木×に對して申譯がないからと情死を思ひつき、三日午前一時頃府下駒澤のゴルフ倶樂部の運動場內で、猫いらずを嚥下したが、苦しさに悶えて、終に前記の場所に彷ひ廻つて居たことが判つた。

■日本橋區箱崎町三×しず（一八）は貧困の中から弟眞×郎を中學に入れる爲め、七百圓の前借で四月二十三日熊本縣球磨郡多良木村の料理店に身を沈めたが、以前から戀仲であつた京都市生れの米×明（三二）は、しずをはるばる尋ねて來、五日朝六時兩人は猫イラズで情死した。男は相場に失敗し、戀しいしずを救ひ出すことの出來ぬのを悲觀したのだと。

■埼玉縣秩父郡小鹿野町料理店高×やす方へ十五日夜登樓した二十三歲位銘仙の着物を着た若者は、同家の酌婦篠×きん（一五）を相手に十六日午前四時頃迄飲み續けて居たが、隙を窺ひ突如所持して居たダイナマイトをきんに投げ付け昏倒したのを見て、自分もダイナマイト自殺を遂げた。男の身許は判明せぬが、同人は下荒川上流で工事中の關東水電のダイナマイト盜難事件に關聯する怪漢らしく、其筋の捜査急なる爲め逃げ場を失ひ、死出の旅連れにきんに情死を要求したが拒絶され、前記の次第に及んだらしく、きんは生命危篤。

■廿三日午前六時頃横濱市新子安瀧坂踏切側二丈餘の斷崖より飛降り、折柄進行し來た列車に轢かれ情死した男女があつた。男は四十四五歲商人體、女は二十二三歲藝者風で、遺留品は化粧品の風呂敷包みと申譯がないから情死する旨の遺書一通で身許不明である。

不良少年

■都下の不良少年少女は益々激增するのみで、現在警視廳で注意して居る男女が約二萬人で、其の中黒表に乘つてゐるのが二千五百人、銀座、神田神保町、牛込柳町、本郷臺町及び府下では五反田、井の頭公園、中野の藥師なぞを中心にして旺に跋扈跳梁し、社會に害毒を流して居るので、警視廳では之が豫防警戒のため、社會の實情と彼等不良男女に適合する具體的取締を行つて撲滅を計るべく先づ不良少年少女になつた原因經路現狀等に就て、充分調査研究を續けて居るが、大正七年から十一年末までに警視廳が檢擧した一筋繩では行かぬ不良少年少女は二千五百十七人で、其の原因は頗る繁雜であるが、純不良兒、自暴自棄、誘惑、模倣、思想の惡化、趣味、虐待、虛榮、過重教育、破廉耻の十種類に大別出來る。純不良兒は精神上又は體質に先天的缺陷卽ち盜癖金錢の浪費なぞの病癖を持つてるもので盜癖が一番多く、前記檢擧數中盜癖男七百二人、女五十八人、浪費者男百四十四人、女二十六人あつた。自暴自棄、誘惑、模倣、虛榮、虐待に至つては、從來から型通りの徑路で不良少年に化したのが多く、殊に近來最も注意

すべき原因は思想の惡化で、權利觀念の發達から生れた自由思想を穿き違へた結果、社會主義者になつて行く傾向があり、議會の蛇投げ事件、政友會本部の放火事件などは思想惡化の實例で、警視廳では近く全部の調査が終ると共にそれを參考材料にして徹底的取締りをする筈である。

■靖國神社の例大祭では夥しい不良男女の檢擧を見たが、その多くは所謂軟派と稱さるゝもので、善良なものに對して猥らな行爲があつて捉まつたので、中には掻拂や掏模專門のものもあつた。而して是等不良團の活躍は、晩春の候から秋の末に至るまで猛烈を極め、緣日に公園に果ては明治神宮の神苑をさへ汚すに至るので、之が爲め良家の子女の過らるゝもの逐年激增の傾向を示す憂ふべき狀態にあり、當局は之が取締に腐心し先頃の短刀携帶禁止令の發布をさへするに至つたのである。然るに此の發令で一時等しく意氣を阻喪された硬派不良團の中に、短刀より更に恐ろしい武器を所持して橫行するものが出現した。勿論彼等の中のある者は恐喝專門から婦女子の誘拐を事とする軟派に早變りしたものもあるが、淺草の六區を根城にする不良兒は、市內某大藥劑店員を一味に引き入れ、魔睡劑を調合せしめて團員全部所謂ドス代りに之を携帶せしめることゝしたといふ。而して又短刀携帶嚴禁以來、彼等の間に殖えたのは太いステッキの所持で、殊に袴の下に厚い革のバンドを忍ばしてゐるものも著しく目立つて來た。兎に角濱の眞砂は何とやら。盡きないものは是等不良の徒で、彼等の活躍は日々に進歩してゐるので、其筋ではこの際徹底的に取締る方針であると。

■八日夜神奈川縣下藤澤町安藤方裏手便所屋根より二階硝子戶を破つて押入つた少年強盜あり。二階に臥し居たる、同家娘タミ(二二)に短刀を突付け、金を探さんとして階下へ下りたが、主人が未だ起きて居たので目的を果さず、再び二階に上つて懷中時計一個を盜んで逃亡したが、彼は右時計を處分するため特に田舍を選んで、翌日都筑郡都田村川和森川亭に來りて投宿したのを都田署の眼に睨まれて、同夜八時半頃齋藤刑事に調べられ、腹痛故便所にゆくと稱して便所內より床下に拔けて逃げ出したが、翌日午前六時半頃に同部落に於て法網にかかり、同署に於て嚴重取調の結果幾多の犯跡が判明したので、二十一日、遂に檢事局送りとなる筈である。彼は本籍長野縣下高井郡小×德×(一六)といひ、十一歲の時東京の親戚に厄介中金十五圓を窃取し、十三歲の時茨城縣古河の自轉車店に住み込み、次で府下千駄ヶ谷町同業枝野方に奉公中、主人の品物を數回に百圓餘を持ち出し、本年二月下旬本所小梅瓦町同業鹽谷方に住み換へて本月六日に至り、こゝでも客の紙入及修繕料の着服等の惡事を續け、同家を追はれてより諸所徘徊後八日東京驛から神戶行列車に只乘りをきめ込んだが、藤澤驛近くで切符檢査を避け、最前部車より客車の屋根傳ひに最後部の窓へ足を入れんとするところを車掌に發見されて線路に飛下り、その夜前記安藤方に押入つたもので、行動の敏速實に驚くべきものあり、末恐ろしき少年である。因に同人は最も活動寫眞を好み母親は酌婦で目下埼玉縣熊ヶ谷の某料理店に居ると。

■遞信省構內を巢窟として市郡各所の不良青年と氣脈を通じ、少女の誘拐や窃盜等を働く不良青少年のある事は久しいもので、警視廳や各署で之を檢擧して同省にかけ合ふと、其都度言を左右に託して之を庇護するので、警視廳當局はいたく憤慨してゐた

が、突如遞信省から警視廳及び各署の不良係に宛て、少年を檢擧した場合は勿論不良性ありと認むるものを發見した場合にも、同省に報告して貰ひたいと依頼して來た。仍つて警視廳では遞信省は勿論、各官廳の不良青少年を一掃する好機會とばかり、數日中に各署不良青少年原簿を纒め、同省と打合せの上、一網打盡的檢擧を行ふ手筈をした。

■二十四日午後三時頃宮城乾門外で、職工風の多勢が神田國民英學會生徒麹町區永田町上×（一六）を捕へ金錢を强要して居るのを折よく通りかゝつた麹町署の三刑事が引致取調べた所何れも博文館職工であるが、昨年九月頃から勤務をそつちのけにして卅餘名の同志を集め、紫團と稱する不良青年團を組織し、松本（二〇）が團長となりて常に揃ひの紫色アンダーシャツを着用して、晝夜を分たず數組に分れて市内を横行し、良子女を捕へて脅迫の上金錢を卷き上げ、又は商品の掻拂ひ等をした事を自白した。

自殺

■大阪市西區四貫島小學校尋常四年生は去月廿四日午後二時半神戸より修學旅行の歸途、阪神電車淀川停留所に於て森岡花江外三名が線路を横切らんとして重傷を負ひ、天神橋六丁目稻葉病院に收容し、連日校長受持其他各職員並に父兄一同が日夜交代で看護に努め、幸ひに其後の經過良く愁眉を開いた折柄、四女生の受持訓導森保×郞氏（三四）は深く自己の責任を感じて、人知れず煩悶を重ね、遂に一日午後四時半西宮停留場附近で電車を目蒐けて覺悟の自殺を遂ぐるに至つた。

■前橋市の土木疑獄事件の頭目と睨まれ、去月四日下條坂口、鹽川兩技手と共に前橋刑務所に收監された前橋市助役松×善×郞（四一）氏は、入監以來專ら獄則を守り精神修養に努め、差入れの書物無關門を愛讀して居た。入監後一箇月に及び、未決の生活の無聊の餘り神經衰弱に陷り、日々煩悶して居るので看守も萬一を憂ひて警戒中であつたが、裁判所の活動に依り疑獄事件益々擴大するとの事を耳にして、四日午前六時十分より三十分迄の間に、第二十一房の獨房の下に兵兒帶を吊し、端座して縊死を遂げた。同氏は廿一年間前橋市役所に奉職し、華かな活動を續けて居ただけに、其末路は悲慘で、夫人は餘りのことに喪心せん程で殘されたる子供四人も泣き叫んで悲痛を極めて居る。市民も同氏の自殺に同情して居る。

■七日午後十時ごろ赤坂新町會社員布田方で猫いらずを飲んで自殺をはかつた婦人がある。同家では大いにおどろき直に手當を加へたが、翌八日午前七時遂に死亡した。婦人は巖手縣盛岡市八幡町森×勝×郞妹うた（一七）といふもので、鄕里盛岡から去る五日朝上野に付き萬世橋附近の某旅館に二泊した上、同夜九時ごろ布田方をおとづれ、前記の次第に及んだのであるが、なり柄主人が歸宅し右の始末なるより大騒ぎを演じたのであるが、同女は布田氏の友人山形縣生れ京大法科を大正三年に卒業した横濱の公吏柴田某（三六）といふ愛人が、東京附近に居住してゐる事を知つて上京、その後をしたつて來たものゝ、愛人には既に妻子まである事を知り、遂に悲觀の餘り右の次第に及んだのであるが、警察側では同女の夫が相當の知名のものであるといふので、この事件に關しては一切口を緘してゐる。

■千葉縣東葛飾郡市川町蕎麥商金×きん（五八）は九日夜同町藝妓屋武久本方に忍び入り、奥座敷で小刀を當て咽喉部に突刺して苦悶中を家人が發見、附近の病院に舁ぎ込み手當を加へたが、生命危篤である。原

因は倅の喜×郎が同家の抱へ藝妓に誘惑されて金錢を蕩盡し意見をして居たが、聞き容れないので自分が死んで諫めようとし、前記の藝妓屋に行つて自殺を企てたのであると。

■横須賀市深田眞×忠×方居住海軍主計中佐内×榮×郎(四二)は十日午前四時頃猫イラズを多量に嚥んで自殺を遂げた。同氏は栃木縣足利市出身で内×家の長男に生れ前記忠×の長女きよ(二九)を妻とし二人の子供があるが、双方共家督相續人である爲め、妻を入籍する事が出來ず、殊に同中佐は海軍航空母艦鳳翔の主計長として勤務中、軍縮の結果待命となり、今日まで待命の儘前記眞×方に厄介となつて居たが、軍縮の悲慘に遭ひ精神に異狀を呈し遂に自殺したものであると。

■神奈川縣小田原在豪農椎×周×郎(六九)は十二日午後八時頃小作爭議の解決に行くと稱して家出した儘歸宅せざる爲め、家人が捜索中十三日朝自宅から五六町放れた梅林の中で縊死を遂げてゐた。懷中には半紙に『獨り行く旅はもの憂し枯野原』と記し又相續人菊江に宛て『我れなき後は繼母を實母と思ひ孝養せよ』と記した遺書を所持して居た。自殺の原因は昨年先妻に死なれ、後妻よね(四八)を迎へたが家庭が思はしからず、腹違ひの小兒同志は財産爭ひを初めた處へ小作爭議の問題が起り、是等の爲に悲觀して自殺を圖つたものらしい。

■十九日午前十時下關發三等急行列車が十一時頃西の宮神崎間に差蒐つた時、乘客年齡卅五六歲位の男が便所に入り内側から堅く錠をかけて何時迄も出て來ぬので、專務車掌が調べてみると外窓を滅茶々々に破壞し、内側にはおびたゞしい血痕あり、土瓶の破片一つを殘す切りで、入つてゐる筈の人間もゐなかつた。取調べの結果便所に入つて行方を晦ました男は、下ノ關から乘つた北海道石狩行の人夫十五名中の福岡縣吉×安×(二八)とて、監獄部屋に入れられる事を恐れ脫走しようとしたが、監視が嚴重なので絕望の末便所に入つて頭部を叩き付けて自殺を計つたが死に切れず、列車から飛び降りて自殺を企てた者らしいが、死體は捜索の結果西の宮神崎間の線路に頭部を粉碎され兩脚を轢斷されて慘死して居たのを發見した。

■二十二日午前五時半小石川氷川町千川筋の猫又橋に老婆の溺死體が漂着した。右は同區氷川下町野×てい(六〇)といひ、娘とめ(二〇)が去る三月女兒を分娩したるも産後の日立ちが惡く、其上ていも老病にて内職の袋はりも思ふやうに出來ぬを悲觀の結果、投身自殺を圖つたものと判明した。

■二十四日午前四時五十分、東神奈川發品川行の京濱電車が大森町北蒲田一〇〇七先の天野屋横丁の踏切りに蒐つた際、年齡二十七八歲の青年が電車目がけて飛込み自殺を圖つたが、跳飛ばされて人事不省に陷り間もなく絕命した。身許は芝愛宕下町機械商林×次×(二八)とてセルの單衣に大島絣の羽織を着、金側時計二個と三井銀行千五百圓と淺野晝夜銀行五百圓の預金通帳を所持しをり、英文遺書で『想ふには餘りに悲しわが戀ようつすかげなり星の如くに』『飲んで狂ふて死にたくもある』『君の居ぬ日はさびしかり壁一重障子一重も想ひの種、かね子へ』『金谷町の名も忘られず胃腸の痛手のかなしさ』などを認めてゐた。

編輯を終へて

□意外に發行が遅れましたが、本誌も本號を以て卷を改め、第十二卷に入りました。特殊な中にも特殊な本誌の如き雜誌が、兎も角今日に至つたのは、偏へに讀者諸君の御後援の賜物と感謝の至りに堪へません。尙ほ今後共一層の御鞭韃を加へられんことを繰返し御願ひ申す次第であります。

□大方諸君の御照會が頻々として參りますが、別項本文中の廣告にありますとほり、八月一日から向ふ一週間に亘つて、夏期催眠實技講習會が開かれます。詳細は右廣告に依つて御承知下さい。主幹は日夜非常に多忙を極められてゐますから、今年は實技講習會もこれ一回限りしか開かれません。講習御希望の諸君は、不取敢一刻も早く御申込を願ひます。そして、該講習は殆んど個人教授にもしといものでありますから、講習員が豫定數以上に達すれば、止むを得ずお斷り致すかも知れません。

□豫告する間もありませんでしたが、本誌記者栗山信次郎氏の『信仰生活の諸現象』が、日本變態心理叢書の第三編として上梓されました。同氏は以前から本誌に筆を執つてゐられるので、讀者諸君とは既にお馴染であります。盛裝をこらした同氏處女出版に對して、何卒御愛讀の榮を賜りたうございます。

□通俗精神醫學叢書第一編『精神統一法』は各方面より大好評を博し、愈々第七版が出來上りました。それから、第二編『クーエ式自己暗示法』も毎日多大の注文と催促とに接して居りますが、之も七月中には必ず上梓されますから、しばらくお待ち下さい。

□田中香涯氏の『性に基く家庭悲劇と其の救濟』は、目下内務省の内檢閲を仰いで居ります。遲くとも八月中には必ず出版の運びと成ります。

□次のやうな端書が編輯室へ參りました。

拜啓益々御奮勵奉賀候。就てはこんな事を申上げては甚だ失禮に候も、『變態心理』誌上に掲載致され候處の『神話研究者への一資料』『灌佛會由來考』の二文の續きが有之樣に存候が、是は如何に相成候や。無論編輯の御都合か北野先生の御多忙の爲かしらん等と推察致居候も、氣になるまゝに飛んだ失禮申上候。繼續掲載を願上候。(一讀者より)

本誌定價表

一部(一ヶ月分)	金五拾錢	税(郵稅五厘)
六部(半ヶ年分)	金參圓	税共
十二部(一年分)	金五圓八拾錢	税共

注意
□御註文は總て前金御拂込のこと
□なるべく振替にて御送金のこと
□特別號は定價超過分申受のこと

本誌廣告料

表紙二、三、四面	金五拾圓
普通面一頁	金參拾五圓

大正十二年六月廿五日印刷
大正十二年七月一日發行 第十二卷第一號

編輯兼發行兼印刷者 東京市外北品川御殿山七一八 中村 蓊

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發行所 東京市外北品川御殿山七一八 日本精神醫學會
電話高輪一〇四三番
振替東京三一一七七番

大賣捌 東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、盛春堂

變態心理第十二卷第一號

大正六年十一月六日第三種郵便物認可
大正十二年六月廿五日印刷納本　同十二年七月一日發行

定價金五拾錢